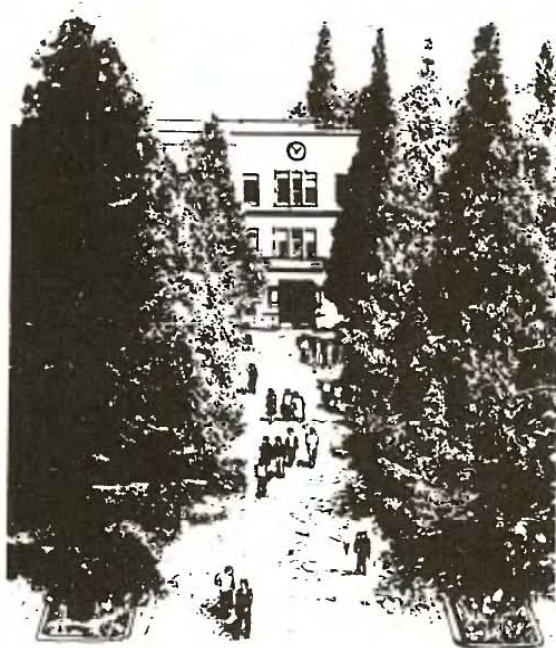


アジア8か国における大学教授の 日本留学観

— 総合的考察 —

権藤 与志夫 編



広島大学 大学教育研究センター

アジア8か国における大学教授の 日本留学観

—総合的考察—

権藤 与志夫 編

はじめに

本書は先に公刊した「アジア8か国における大学教授の日本留学観(上)」(広島大学大学教育研究センター, 1988年)と「アジア8か国における大学教授の日本留学観(下)」(同上1991年)の続編である。これらの(上), (下)両巻は, 本研究が対象としたアジア8か国について, (上)では韓国, 中国, タイ, インドネシアの4か国, (下)ではインド, フィリピン, マレーシア, シンガポールの4か国をとりあげ, 各国編としてまとめたものである。

本書では, これらの各国別の考察を総合し, 比較検討を行おうとするものである。

本来, 下巻とともに, またはそれと間をおかずに発表すべき性質のものであるが, 編者の諸般の事情により, 今日に至ったものであり, 当研究センターには大変ご迷惑をかけ, まことに申し訳ない次第である。

本研究の目的と方法は上記の(上)に述べているが, 総合的考察を行うにあたって, その要点を本書の序論の中で述べている。

本書の構成は, 目次にみられる通りであるが, 資料として質問紙の内容全文と, 各質問に対する回答の集計表を巻末に付している。

本研究は, (上), (下)に続くこの「総合的考察」編で一応終わりとなるが, 事柄の性質上, 将来も継続することを考えている。留学生問題はまだその緒についたばかりであり, 今後ますます問題は複雑かつ困難になっていくものと予想され, それへの対応ないし問題の解決は今後も重要な課題としてあり続けるからである。そして, アジア諸国は日本への留学生の最も重要な送り手であり, それらの国の有識者の助言は極めて有益な情報であると思われる。

質問紙調査を行って既に5年が経過している。この間留学生の数は順調に増加しているが, それとともに, 留学をめぐる質の問題が益々重要になってきている。そしてこのことは留学が留学生自身, 受け入れ側, 送り出し側のそれぞれにとって本来の目的を達成するものとなっているかという問題につらなっている。その意味で今日, 「留学の効果」の問題が切実なものとなってきている。

従って新しい問題状況の中で, アジアの有識者層への質問紙調査ないし, 面接調査が今日更に求められているということである。また, アメリカ留学が日本留学のライバルであるという問題意識にそって私たちの調査は企画された。今日なおこの展望は価値を持っている。

そして, アメリカの留学生受け入れのあり方は日本にとって参考になるところが極めて多い。アメリカの状況をも念頭にいれて今後のアジア調査を進めていきたいと考えている。

1991年11月

編者 権藤 与志夫 (九州大学 教育学部 教授)

目 次

序 論 調査の目的と方法	権藤与志夫	1
第1部 アジア8か国における高等教育の展開と海外留学		
－総合的比較－	久保田優子	4
1. 高等教育の展開		4
(1) 韓国		4
(2) 中国		4
(3) タイ		5
(4) インドネシア		5
(5) インド		5
(6) フィリピン		6
(7) マレーシア		6
(8) シンガポール		6
2. 海外留学の展開		8
(1) 韓国		8
(2) 中国		8
(3) タイ		8
(4) インドネシア		9
(5) インド		9
(6) フィリピン		9
(7) マレーシア		10
(8) シンガポール		10
3. 日本留学の展開		12
(1) 韓国		12
(2) 中国		13
(3) タイ		13
(4) インドネシア		13
(5) インド		13
(6) フィリピン		13

(7) マレーシア	14
(8) シンガポール	14

第2部 アジア8か国における大学教授の留学観

－質問紙調査の比較分析－	永岡真波	17
--------------	------	----

1. 回答者の属性	18
(1) 性別	18
(2) 専門領域	18
(3) 地位	18
(4) 年齢	19
(5) 所属する国際学会	19
(6) 所持する学位	20
2. 回答者の留学体験	21
(1) 留学経験の有無	21
(2) 留学回数	23
(3) 留学年代	23
(4) 主な留学資金源	24
(5) 留学中に取得した学位	24
(6) 留学先国	25
(7) 留学先国の選択理由	26
(8) 留学の最重要目的	27
3. 学生の留学に関する意見	28
(1) 学生への留学指導	28
①留学推薦段階	28
②留学推薦国	28
③留学先国の推薦理由	30
④留学指導の基準	31
(2) 学生の留学上の問題点	31
4. 日本留学に関する意見	32
(1) 日本の大学に対する評価	32
①日本の大学の水準	32

②日本の博士学位の有用性	33
③アメリカの博士学位の有用性	34
④日米の博士学位の水準	34
⑤日米の博士学位取得の難易度	35
(2) 日本留学の評価	35
①日本留学の必要性	35
②日本留学の有用性	36
③回答者の日本留学希望の程度	37
(3) 日本留学に関する指導	37
①日本留学の重要点	37
②日本留学の指導	38
5. 日本の留学生政策への要望	39
(1) 日本が取るべき改善策	39
(2) 日本語教育の改善策	40
(3) 日本の情報の改善策	40
(4) 日本留学の将来予測	40
第3部 日本の留学政策への提言	久保田優子 42
1. 各国からの提言－具体的事例－	42
(1) 韓国	42
(2) 中国	43
(3) タイ	44
(4) インドネシア	45
(5) インド	45
(6) フィリピン	46
(7) マレーシア	46
(8) シンガポール	47
2. 各国からの提言－総合的検討－	47
(1) 政府の政策レベルへの提言	48
①奨学金の強化	48
②交流の促進	49
③教育情報の提供	49

④日本語・日本事情教育の充実	49
⑤その他の提言・要望	50
(2) 個々の大学に対する提言	50
①交流の促進	51
②情報の提供	51
③奨学金の増加	51
④教育用語をめぐる要望	51
⑤その他の提言	51
(3) 日本の大学教授への提言	52
①交流・協力の促進	53
②外国語（英語）能力	53
③留学生への理解	53
(4) まとめ	54
結 語	権藤与志夫 57
資料編	久保田優子・永岡真波 58
①質問紙調査内容（英文）	59
②各質問に対する8か国の回答	72

序 論 調査の目的と方法

権藤 与志夫

われわれは、1985年から1986年にかけて、九州大学の「特定研究」（昭和60年度）の交付を受けて、韓国、中国、タイ、インドネシア、インド、フィリピン、マレーシア、シンガポール8か国の大学教授を対象とする質問紙調査を行なった。それは、彼ら自身の留学経験と共に、留学、特に日本留学への意見を問うものであった。この調査を基にわれわれは「アジア8か国における大学教授の日本留学観（上）」（大学研究ノート、第70号<1988年1月>）及び「アジア8か国における大学教授の日本留学観（下）」（高等教育研究叢書 11<1991年3月>）において各国別の研究報告を行なった。本書では、上記2報告を踏まえ、それらの総合的考察を試みることにする。

調査の目的及び方法については、前掲（上）で示しているが、要約すると次のようになる。まず、第1に日本の留学生問題を考える時に、日本への留学生の8割以上を占めるアジアからの留学生を考慮に入れることが必須である。そしてその際に、留学経験を持ち、学生への大きな影響力を有すると予想され、かつ質問紙調査による接近が最も確実な「大学教授層」を調査対象とすることとしたのである。

以下、再三の繰り返しになるが、本書における、比較検討に必要な情報をもう一度ここに提示しておくことにする。

(1) サンプルングと回収

本調査は、1985年8月から11月迄に行なった予備調査を基に、1985年12月から翌1986年1月にかけて質問紙を発送し、1986年9月迄に回収・処理したものである。サンプル発送数と回収数、回収率を国別、専門別、地位別に整理したものが下記の表である。

a. 各国別サンプル回収状況

	調査対象校 教師数	サンプル数	回収数	回収率
韓 国	6,918	700	266	38.0
中 国	不明	700	138	19.7
タ イ	6,340	506	177	35.0
インドネシア	4,872	700	207	29.6
イ ン ド	4,580	700	215	30.7
フィリピン	3,626	700	183	26.1
マレーシア	1,980	300	95	31.7
シンガポール	1,638	150	50	33.3
計	---	4,456	1,331	29.9

b. 専門別サンプル回収状況

	サンプル数	回収数	回収率
教 育	561	161	28.7
人 文	563	196	34.8
法 学	556	264	23.6
経 済	564		
理 学	560	157	28.0
工 学	560	171	30.5
農 学	529	192	36.3
医 学	563	135	24.0
その他	-	44	-
不 明	-	11	-
計	4.456	1.331	29.9

c. 地位別・質問紙発送数と回収数、及び階層間の比率

		教 授	副教授	助教授	講 師	助 手	不明	計
韓 国	発送数(人)	210	210	141	139			700
	回収数(人)	117	70	60	10		9	266
	階層比(%)	44.0	26.3	22.6	3.8		3.4	100.0
中 国	発送数(人)	236	232		232			700
	回収数(人)	30	55		38	12	3	138
	階層比(%)	21.7	39.9		27.5	8.7	2.2	100.0
タイ王国	発送数(人)	114	176	110	106			506
	回収数(人)	34	68	64	8		3	177
	階層比(%)	19.2	38.4	36.2	4.5		1.7	100.0
インドネシア	発送数(人)							700
	回収数(人)	20	15	163	7		2	207
	階層比(%)	9.7	7.2	78.7	3.4		1.0	100.0
インド	発送数(人)	345	355					700
	回収数(人)	176	26		1	8	4	215
	階層比(%)	81.9	12.1		0.5	3.7	1.9	100.0
フィリピン	発送数(人)	216	174	80	80		150	700
	回収数(人)	64	45	39	32		3	183
	階層比(%)	35.0	24.6	21.3	17.5		1.6	100.0
マレーシア	発送数(人)	100	100		100		5	300
	回収数(人)	35	36		23		1	95
	階層比(%)	36.8	37.9		24.2		1.1	100.0
シンガポール	発送数(人)	43	43	8	34		21	150
	回収数(人)	16	16	19	1		0	50
	階層比(%)	32.0	32.0	38.0	2.0		0	100.0

(2) 質問内容の概要

質問項目は英語で作成し、属性を尋ねるもの10問、回答者の留学体験に関するもの4問、学生の留学に関する意見6問、日本への留学に関する意見16問、計36問（サブ・クエスチョンを含めると50問）から構成した。その概要は以下の通りである。

1. 属性

氏名；年齢；性別；所属機関部局名；地位；専攻領域；所属学会；取得学位；授業担当
コース

2. 留学体験

留学経験の有無；留学回数；滞在期間；留学先大学名；専攻分野；経費出所；留学前の
身分；留学による取得単位；留学先国の選択理由；留学先大学の選択理由；留学目的；
留学の成果（研究上）

3. 学生の留学に関する意見

留学に最適の学校段階とその理由；留学に最適の国及びその理由；留学に最適の期間；
就職や昇進への留学の貢献度；留学先選択の視点；留学の成否の要件

4. 日本留学に関する意見

大学の水準－日・米・欧比較；日本留学の必要性；日本留学と帰国後の就職・昇進；学
位取得の難易度－日・米比較；博士学位の有用度－日・米比較；博士学位の価値－日・
米比較；日本留学に伴う困難点；日本留学の希望とその理由；学生に日本留学を勧める
理由；学生に日本留学を勧めない理由；留学事情改善への提言；日本語教育改善の具体
案；必要な情報；留学生数の増加の見込みと理由；政府、大学、教授への提言（自由記
述）

第1部 アジア8か国における高等教育と海外留学の展開

- 総合的比較 -

久保田 優子

1. 高等教育の展開

本稿では、アジア8か国の日本留学観を横断的に比較するために必要とされる、各国の留学の背景となっている高等教育の展開状況と高等教育制度について、すでに『アジア8か国における大学教授の日本留学観』(上)(下)にまとめられた各国別の報告を、総合的に概観する。なお、『アジア8か国における大学教授の日本留学観』(上)(下)を参考とした箇所は(8か国上、下、該当頁)とした。

(1) 韓国

高等教育は、日本植民地からの開放後から李承晩政権の1960年までに最初の量的拡大を遂げた。そして朴正熙政権下の第三共和国期に社会経済発展のためのマンパワー政策により質的拡充へ転換し理科系が重視された。1979年以降、4年制大学の定員抑制政策の緩和、専門学校の大学への昇格等にもなって高等教育人口は急激に拡大した。さらに工学系の拡大と大学院の急増、新大学の設立などにより本格的な高等教育大衆化時代に入っている。ちなみに、高等教育人口は1945年の8,000人から1986年には1,332,000人へと急増している。

高等教育制度には大学院、総合大学・各種の単科大学・教員養成機関(いずれも4年制)、2～3年制の中堅職業人養成機関、その他放送通信大学や大学レベルの各種学校がある。(8か国上、30～31頁)

(2) 中国

教育政策の展開は政治路線と連動しており、指導者の交替にもなって変化してきた。開放直後の教育事業は非常に遅れており、国民の約8割が文盲であった。1957年までは経済復興のためにソ連の制度に学び理科系が重視され、識字教育も普及した。1957年の反右派闘争以後は、学習と生産労働を結合させた半労半学学校や业余学校が発展した。しかし1960年代前半の中ソ関係悪化から経済困難となり高等教育の量的発展の反面、質的な低下が問題となった。さらに1966年以後10年間の文革中に教育の質・量ともに後退してしまったが、文革後の「四つの現代化」により高等教育の復興と改革が急務とされ全日制大学の質・量が高められた。それとともに各種企業や工場、地方行政部門により成人高等学校(テレビ大学・业余大学など)が設置運営され労農大衆の高等教育の機会が拡大している。全日制大学・学生数は1949年205校・116,000人から1985年1,016校・1,703,000人へとそれぞれ5倍・15倍に増加している。

高等教育制度(全日制大学)には教育部・中央各省庁・省レベルの地方人民政府が設置し全寮制、無料、国家計画による職場配分が行われる(1)4～5年制の総合大学・単科大学、(2)2～3年制の高専及び、地方都市が設置し、通学制、有料、就職先の自己選択が特徴である(3)2年制の短期職業大学、それに(4)各大学に設置されている大学院がある。(8か国上、45～47頁)

(3) タイ

1917年に最初の大学が創設されて以来、大学は各省の官吏養成を目的としていた。1958年のサリット政権以降、大学は国家の経済社会発展のためのマンパワー養成の役割を果たすようになり、1970年にはラムカムヘン国立大学（オープン大学）が開設された。さらに1980年にスコタイ・タマティラート大学（オープン大学）が生涯教育を提供する場として設立された。これらオープン大学の設立により1973年以降は学生数が急増した。高等教育機関への就学率も1983年には22.5%に達した。しかし、一方でこのような高等教育人口の急増は大卒者の失業という問題を生み出している。

高等教育制度には、大学省管轄（国立大学14校、私立大学18校）32校と文部省管轄（技術・職業、商業、農業、体育、芸術、教員養成などのカレッジ）323校、その他の省や機関の管轄（軍・警察アカデミー、軍・警察看護スクール、看護カレッジ、仏教大学、AITなど）46校がある。（8か国上、60～61頁）

(4) インドネシア

オランダの統治下では、インドネシア人に対する教育、とくに高等教育は軽視されていた。オランダから独立後、国家開発のための指導者養成の必要から高等教育の発展に重点が置かれた。さらに1960年代には、スカルノ大統領の高等教育重視政策により大学が増設された。次のスハルト政権下では、質的發展が重視されたが1984年には放送大学が設置されて高等教育機会が増大した。1952年に約1万人であった学生数は1984年には約100万人と急増し、とくに1984年の放送大学の開設がその傾向に拍車をかけている。専攻分野では伝統的に文科系が重視されてきた。

高等教育制度には1961年高等教育法下では複数の学部をもつ総合大学、関連する学問領域から構成される専門大学、教育、工科、農科大学などの単科大学、短期大学がある。1970年代の新制度により、修業年数が日本と同一化した。（8か国上、75～77頁）

(5) インド

イギリス統治期の1857年に、ロンドン大学を範としてインド初の3つの大学が設立された。これらの大学は教授用語を英語とし、一般教養教育が重視されていた。独立後は教授用語がインド語へ切り替えられ、国家建設を目的とした高等教育体制が整備され、商業や教育、工学、医学、法律などの専門教育が拡大している。高等教育の質の向上をめざした政策が一貫して行われてきたが、1961年と1986年とを比較すると大学数・カレッジ数は1,832校から5,628校へ約3倍の増加、学生数は663,661人から3,571,000人へと約5倍も増加しており量的にも発展している。

高等教育制度には3つの型がある。「加盟型」は大学の規定する教育課程に即した教育を加盟カレッジが行うもので、学士課程までしかなく3つの型の中で機関数が最も多い。「単一型」は学部ないし固有のカレッジからなり、専門大学に多い型で、教育水準が高い。学士課程から大学院課程まで有している。「連合型」はカレッジが提携して大学を構成しており、学士課程から大学院課程まで有している。これら3つの型の共通点は卒業試験の施行と学位の授与権を大学が掌握していることである。（8か国下、1～3頁）

(6) フィリピン

1565年のスペイン統治以来1946年の独立まで、高等教育はその植民地の歴史と歩みをもとにしてきた。スペイン統治時代はスペイン人の教育を目的としておりフィリピン人は高等教育から隔離されていた。アメリカ統治時代は、英語に堪能な官吏養成を目的としてフィリピン人のための大学が設立されたが、ごく一部のエリートに限られていた。独立後は教師不足から、教師養成機関の設立基準が緩和され高等教育人口は量的に発展し、1980年には1947年の15倍に増加した。学生の大部分は私立の文科系の高等教育機関に在学しており、大卒者の失業などの問題から質的拡充への転換が進められている。

高等教育制度としては、総合大学、単科大学、コミュニティカレッジなど約1,000校ある。これらの7割が私立であり、さらに私立の半数がカトリック系でマニラ首都圏に集中している。また、大学院が総合大学、単科大学におかれている。(8か国下、18～20頁)

(7) マレーシア

イギリス統治下では、大学は現地役人育成のためのものであり、マラヤの上層階級の子弟はイギリスかまたはイギリス植民地の大学に留学していた。マレーシアでは、1962年以降マンパワー育成のための高等教育が重視されるようになり、1970年頃から急速に発展した。さらに、大学入学者の割合や奨学金の給付などにおいて政府のマレー人優先政策がとられており、1985年現在で中等教育段階以降の民族別就学者はマレー系が約7割を占めている。また、教授用語も英語からマレーシア語へ移行している。

高等教育制度には、シンガポールにあったマラヤ大学から1962年に分離独立した「マラヤ大学」(総合大学)、1970年代に設立された「マレーシア国民大学」など3校、1980年代に設立された「国際イスラム大学」など2校、その他「トゥンク・アブドル・ラーマン・カレッジ」などがある。また、ブミプトラ(マレー系)子弟のための高等教育機関もある。(8か国下、31～33頁)

(8) シンガポール

イギリス統治下では高等教育は現地人の下級役人養成が目的であり、優秀な学生はイギリス本国に招聘していた。現在のシンガポールの高等教育機関は総合大学、教員養成機関および技術者養成機関の3種類に分けられる。唯一の総合大学である「シンガポール大学」は、イギリスの植民地時代に設立された「マレー連邦政府医学校」が数回の改名や他大学との統合、分校設立を経て1962年にこの名称となったものである。他方、中国系住民が子弟の教育のために1953年に設立した「南洋大学」は、当初の教授用語は中国語であったが、政府の干渉や就職に有利なために1975年より英語に転換され、さらに「シンガポール大学」に吸収された。1950年には初の教員養成大学が設立され、1954年にはマンパワー政策に基づいて技術者養成を目的とした大学が設立された。

高等教育制度は総合大学の「シンガポール国立大学」、教員養成機関である「教育学院」、技術者養成機関である「シンガポール・ポリテクニク」、「ギーアン・ポリテクニク」、「ナンヤン工業大学」の5校のみである。(8か国下、47～50頁)

以上8か国の高等教育の展開を概観してきたが、その特徴は表1-1のようにまとめられる。さらに、8か国高等教育人口の推移をまとめたものが表1-2と図1-1である。表1-2では、韓国・中国・タイ・フィリピンについては1945年現在の高等教育人口、インドネシア・インド・シンガポール・マレーシアはそれぞれ1950年・1960年・1970年・1970年現在の高等教育人口を1.0として5年ごとの高等教育人口の増減を表したものである。

表1-1、表1-2、図1-1に基づいて8か国の高等教育人口の推移を比較考察すると、どの国も国家発展のために高等教育を重視する政策をとっており、8か国全体として高等教育人口は増加傾向にある。文革で高等教育が後退した中国を除いた、他の7か国は、いずれも独立後高等教育人口は増加している。な

表1-1 8か国高等教育展開の特徴

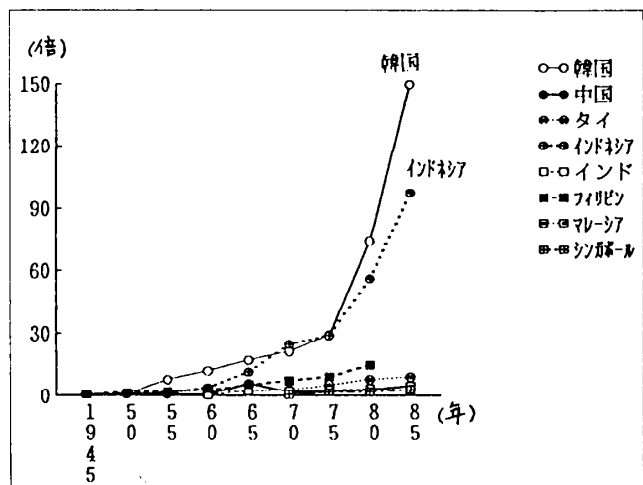
韓国	1979年以降高等教育拡大政策により大衆化
中国	文革後、高等教育が復興し大衆の教育機会も拡大
タイ	オープン大学開校(1971年)後、学生数が急増
インドネシア	1984年の放送大学設置以降、学生数が急増
インド	高等教育の質的向上もめざした政策の展開
フィリピン	8か国で時期的に最も早い、戦後すぐの量的発展
マレーシア	1970年頃以降量的発展(マレー人優先政策)
シンガポール	高等教育人口の緩やかな増加

かでも、韓国・インドネシアは1985年にはそれぞれ約150倍・約100倍と他の6か国に比べて桁違いの増加を示している。これら2か国は1970年末から1980年代はじめに国家の政策として高等教育の拡大を積極的に推進しており、高等教育人口は1975年から80年までの5年間で韓国は約2.5倍・インドネシアは約2倍、さらに次の5年間でそれぞれ約2倍・1.7倍と爆発的な増加を示している。また、フィリピンは1945年から50年の戦後わずか5年間で約2倍に増加しており、これら8か国のなかでは時期的に最も早い量的発展を示している。

表1-2 8か国高等教育人口の推移

国\年	1945	'50	'55	'60	'65	'70	'75	'80	'85
韓国	1.0	1.4	8.3	12.6	17.9	22.3	29.9	74.8	150.0
中国	1.0*	0.8	0.8	0.9	6.3	2.1	1.9	3.3	5.0
タイ	1.0	1.6	1.6	3.4	2.3	3.6	6.1	8.2	9.8
インドネシア	-	1.0*	2.3	4.7	11.9	25.1	29.5	56.3	97.6
インド	-	-	-	1.0	2.6	3.0	3.7	4.2	5.4
フィリピン	1.0*	2.3	2.5	3.6	6.2	7.7	9.4	15.4	-
マレーシア	-	-	-	-	-	1.0	2.0	2.9	5.2
シンガポール	-	-	-	-	-	1.0	2.0	2.0	3.2

図1-1 8か国高等教育人口の推移



出典：『アジア8か国における大学教授の日本留学観(上)』pp.30、46、61、75および『アジア8か国における大学教授の日本留学観(下)』pp.2、19、33より作成。

*:中国-1947年、インドネシア-1952年、フィリピン-1947年、シンガポール-1983年

☆:Unesco, Statistical Yearbook, 各年度版より作成

一方、中国では高等教育人口は1960年から65年の間に約6.7倍増の急激な発展をみせるが、文革により1970年には文革前の約3割にまで減少してしまっている。文革後は、再び徐々に増加して1985年には文革前の約8割にまで回復してきている。シンガポールは1970年から1985年までの15年間で高等教育人口は約3倍の増加であり、8か国のなかではもっともゆるやかな増加を示している。

2. 海外留学の展開

本章では、8か国における留学の展開状況について、『アジア8か国における大学教授の日本留学観(上)(下)』にまとめられた各国別の報告を概観し総合的に比較考察する。

なお、『アジア8か国における大学教授の日本留学観(上)(下)』が執筆されて以降、国によっては海外留学生数や日本への留学生数はかなり変化しているので、本論では総合的考察のためにデータをそろえるために、Unesco, Statistical Yearbook, 1963~1990に掲載のデータを付加し考察を行った。8か国の留学生数は、Unesco, Statistical Yearbook掲載の各年度の留学先主要5か国の合計を表している。文中『アジア8か国における大学教授の日本留学観(上)(下)』からの引用は(8か国、上、下、該当頁)とし、Unesco, Statistical Yearbookは(ユネスコ、該当年度)とした。また、当該国の留学生数や留学先国の動向を見る場合には日本への留学生数は、Unesco, Statistical Yearbookからのデータを使用し、日本での留学生における当該国出身の留学生の状況を見る場合には文部省『学校基本調査報告書』のデータを使用し、大学および大学院に在籍する国費と私費の留学生の合計人数としたため、数字に差が生じている。

(1) 韓国

開放前は日本への留学が主であったが、本格的な海外留学は開放後のアメリカ留学に始まる。開放後、米軍統治や朝鮮戦争後のアメリカからの復興援助、その後の経済成長などにより留学生数は増加するが、1970年代には政府の海外留学規制により増加が鈍る。しかし、経済成長にともなって自費留学のための財力が伸長してきた1980年代には留学の自由化政策に転じ留学生数は飛躍的に増加する。(8か国、上、31~32頁)

主な留学先国は1960年代から80年代を通じてアメリカである。また、1980年代に日本への留学が増加している。1985年以後は、第1位アメリカ・第2位日本・第3位西ドイツとなっている。(ユネスコ、1963~1990)

(2) 中国

留学先国は、文革前(1951年~60年)はソ連が84%を占め残りは東欧社会主義国であった。文革期(1966年~75年)は、イギリス・カナダ・メキシコ・西ドイツ・フランス等西側諸国に派遣を開始した。文革後(1976年以降)はアメリカ・日本・西ドイツへの派遣が主流を占めるようになり、1980年代は第1位アメリカ・第2位日本・第3位西ドイツとなっている。また、1984年から政府の経費節減のために私費留学の枠が拡大されてきており、1985年からは学部留学生を廃止し大学院留学生に重点を置くようになってきている。(8

か国上、47～48頁)

(3) タイ

留学は19世紀後半に国家発展の人材養成のために始められたが、その後多様化し留学生数も増加していった。1962年から1970年頃までは急激に伸び、1971年から3年間はやや減少し、1974年から再び増加し以後は横ばいである。留学生の専攻分野は法・社会科学が多い。(8か国上、61～63頁)

留学先は1960年代から80年代を通じてはアメリカが大半を占めついでフィリピン・インドとなっている。1988年には、留学先上位5か国のうちアメリカが第1位で約7割を占め、次にフィリピン、日本がつづいている。(ユネスコ、1963～1990.)

(4) インドネシア

オランダ植民地時代は宗主国オランダと中東でのイスラム学追求が中心であったが一部の富裕階級や貴族階級の子弟に限られており、しかも中国系が半数を占めていた。これらオランダや中東での留学生たちからは、独立後政治や宗教教育の分野で指導的役割を果たす人物が多く輩出された。

主な留学先国はオランダ・西ドイツ・アメリカ・オーストラリア・サウジアラビアである。独立後は、旧宗主国オランダの地位が相対的に低下し、1970年代には西ドイツが優位になりついでアメリカとなっている。1970年代半ば以降は、アメリカへの留学生が急増して1980年代には第1位となった。ちなみに、1984年にはアメリカが約51%を占め、第2位は西ドイツが約2割を占めている。専攻分野は西ドイツでは自然科学系が、アメリカでは社会科学系が、オランダでは医学が多く、日本では工学が多い。(8か国上、77～80頁)

(5) インド

19世紀半ばに官吏、弁護士、教師等になるために統治国イギリスへの留学が始まった。20世紀に入ると、産業の興隆に伴う人材需要や立身出世のためあるいは民族意識の高揚、イギリスの留学生受け入れの消極化などにより留学対象国や目的が多様化し、留学生数も着実に増加していった。独立後は、政府が国際理解・協力および国家再建の人材確保の見地から重要な国策として留学を推進しているが、自国の教育機関で学習できない分野を留学で補うことおよび自国の教育制度に役立つ形をとることを保持している。留学生の専攻分野は、工学をはじめとする自然科学系が圧倒的に多い。(8か国下、4～6頁)

留学先国は1960年代から1980年代にわたってアメリカが最も多く、次いでイギリスとなっている。(ユネスコ、1963～1990.)

(6) フィリピン

スペイン統治時代、留学先は宗主国スペインの大学であったが、ごく一部の富裕な家庭の子弟に限られていた。その後、アメリカの統治下では積極的な留学奨励策がとられ、この政策は多くの著名なフィリピン人を生みだし、さらにアメリカ留学の流れをつくった。独立後は国内の教育整備に力を注いだが、留学も引き続き行われている。アメリカが主な留学先国であり1960年代から80年代を通じて約8～9割を占めている。その他は、オースト

ラリアや日本、西ドイツ、さらに宗教との関連から中東、バチカンへも留学している。専攻分野では法律・社会科学が多く、人文・教育・医学は減少傾向にある。1960年以降留学生数は漸増しているが高等教育段階の学生数の伸びはこれを上回っている。(8か国、下、20～23頁)

(7) マレーシア

イギリス統治下では、イギリス連邦諸国への留学が主であった。独立後は、オーストラリア、シンガポール、イギリス、アメリカ、カナダが主であった。1979年のイギリスのフル・コスト政策により1980年代はアメリカが主な留学先国となっている。また、1982年にルックイースト政策が実施されてから日本への留学が増えている。マレーシアの場合、イギリス統治時代から高等教育を留学でまかなう伝統があり高等教育人口の半数が留学している(1985年現在国内69,762、国外約60,000人)。また、学部段階の留学が多いこと、私費が圧倒的に多くその大半は中国系であること、国費はマレー系が多いことが特徴であるが、近年はマレー人優先政策によりマレー人の留学生が増加している。(8か国下、34～36頁、およびユネスコ、1990。)

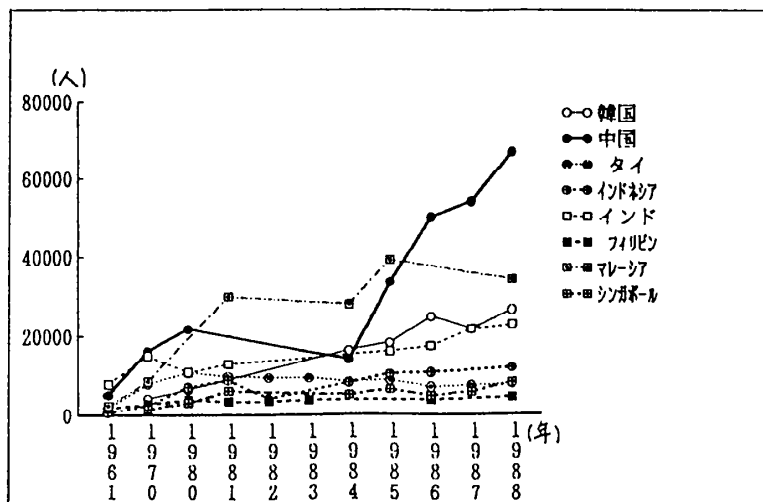
(8) シンガポール

高等教育設立以前のイギリス統治下では1885年にイギリス本国への招致が開始された。その後、高等教育機関が設立されてからも、国内での高等教育機関が5校しかないこともあって海外へ留学する学生は多く1936年には国内高等教育機関在籍者127名、海外留学生158名であった。主要留学先国はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなど英語圏であるが、1960・70年代はオーストラリアが、80年代にはアメリカが最も多い(8か国下、50～51頁、及びユネスコ、1963～1990)。

以上8か国の留学生数の推移を示したものが、図1-2、表1-3である。8か国のなかでは中国・マレーシア・韓国の留学生数の増加が著しい。中国の留学生数は1961年の5,500人が1988年には67,726人、マレーシアではそれぞれ538人から34,781人へと増加しており、韓国では1970年の4,391人から1988年には27,098人に増加している。残りの4か国も留学生数は漸増している。「1. 高等教育の展開」

でみたように、8か国では国家発展のために高等教育が重視され、高等教育の機会が拡大している。それにもかかわらず、このように留学生数が急激に増加しているのは、韓国では1980年代に入ってから留学自

図1-2 8か国留学生数の推移



出典: Unesco, Statistical Yearbook 各年版

表1-3 8か国留学生数の推移

(人)

年\国	韓国	中国	タイ	インドネシア	インド	フィリピン	マレーシア	シンガポール
1961	—	5,500	2,193★	700	8,289	2,312★	538	
1970	4,391	16,592	8,322	2,705	15,299	3,157	8,804	1,875
1980	6,823☆	22,339☆	11,047	7,429☆	11,279☆	4,294	16,384	3,464☆
1981	—	—	10,243	9,266	13,123	3,778	30,445	6,351
1982	—	—	9,773	—	—	3,799	—	—
1983	—	—	9,965	—	—	4,202	—	—
1984	16,884	14,590	8,862	8,386	—	4,103	—	5,403
1985	18,913	34,621	9,233	10,921	16,686	—	40,320	6,920
1986	25,429	51,225	7,367	11,253	17,706	4,267	—	5,327
1987	22,061	55,296	7,775	—	22,306	—	—	6,215
1988	27,098	67,726	8,006	12,262	23,256	4,847	34,781	8,660

出典:Unesco, Statistical Yearbook, 各年度版より作成 (☆:1979年 ★:1962年)

由化政策、中国では1984年からの私費留学奨励政策、マレーシアでは1970年代以降のマレー人優先政策のために国外へ中国系の学生が締め出されたことが主な原因である。いずれも各国政府の高等教育政策・留学政策が大きな影響を及ぼしている。

このような各国政府の留学推進政策の背景には、国家の近代化や経済発展のための人材

養成を海外に依存しようとする意図がある。他方、これらの国において、帰国後は自国のトップ・エリートの地位が保証されることも留学生数が激増する大きな理由となっている。

次に、主要留学先国の動向を示したものが表1-4である。8か国全体の留学先国の動向をみると、1960年代は中国はソ連へ、他の国は旧統治国・旧宗主国（アメリカ・西ドイツ・イギリス・英連邦等）を中心とした流れがある。そして、1970年代は旧宗主国ととも

表1-4 8か国主要留学先国の動向

	1960年代	1970年代	1980年代
韓国	アメリカ(約9割)	アメリカ(約7～8割)	アメリカ(約7割)日本(約1割)
中国	(文革前)ソ連(約8割)	(文革中)フランス(約1割) カナダ・メキシコ・西ドイツ ・イギリス・北朝鮮(1割未満)	(文革以後)アメリカ(約4割) ・日本(約2割)・西ドイツ (約1割)
タイ	アメリカ・カナダ(約5割) フィリピン(約2割)	アメリカ・カナダ(約7割)	アメリカ(約6割)フィリピン・インド(約1割)
インドネシア	西ドイツ・アメリカ(約3割) オランダ(約1割)	西ドイツ(約5割)アメリカ(約3割) オランダ(約1割)	アメリカ(約5割)西ドイツ(約2割)
インド	アメリカ(約7割) イギリス(約1割)	アメリカ(約7割)イギリス(約1割)	アメリカ(約9割)
フィリピン	アメリカ(約9割)	アメリカ(約9割)	アメリカ(約8割)
マレーシア	オーストラリア(約6割) イギリス(約1割)	オーストラリア(約6割) イギリス(約1割)	アメリカ(約4割)オーストラリア(約2割) イギリス(約2割)
シンガポール	オーストラリア(約5割) イギリス(約2割) アメリカ(約1割)	オーストラリア(約5割) イギリス(約2割) アメリカ(約1割)	アメリカ(約5割)イギリス(約2割) オーストラリア(約1割)

出典:Unesco, Statistical Yearbook, 1963年度～1990年度版より作成

にアメリカを中心として他の西側諸国へと留学先国は多様化している。1980年代は各国ともアメリカにもっとも多く多くの留学生を送り出しており、アメリカへの留学生集中の傾向が顕著である。またマレーシア・シンガポールからの留学先としてオーストラリアは、1960・70年代は第1位であったが、1980年代にはアメリカにとってかわられている。さらに1980年代には、韓国・中国の場合日本が第2位の留学先国になっていることが大きな変化である。留学生の増加はアジア8か国と留学生受け入れ国との相互依存の程度や人的資本（中等教育修了者）の増大、留学をまかなう財源の有無、留学を推進する機関の状況、国内における高等教育の機会、情報量などが、留学の促進に影響を与えている。(2)

アメリカが8か国の留学生を引き付けている理由は、①国際語である英語が習得できること、②学位取得のシステムが確立していること、③多様な奨学金が用意されていること、④多くの学術誌が英語で刊行されていること、⑤政治的な安定と高い生活水準、さらに、⑥他民族の受け入れに寛容であることなどによる。(3)

3. 日本留学の展開

これまでみた、アジア8か国の高等教育および留学の展開をふまえて、ここではこれらアジア8か国の日本への留学の状況を横断的に比較考察する。なお、日本での留学生の状況については、文部省『学校基本調査報告書』各年度版を参考にしたが、以下では（文部省、当該年度）とし、日本への留学生数は大学と大学院の国費と私費の留学生数の合計とした。表1-5は1990年5月現在の日本における留学生の出身国と人数（大学および大学院の在籍している国費と私費留学生数の合計）を示している。

(1) 韓国

本格的な日本留学は1965年の日韓条約後に始まり、その後1972年には日本留学が公的に認められて留学生数は徐々に増加していった。1980年代には留学の自由化政策により日本への留学生数も急増し、1970年の724人が1990年には4,982人となった。とくに、私費留学生の増加が著しく全体の87%を占めている。また、日本はアメリカに次いで第2位の留学先国である。日本への留学生の特徴は、国費留学生の大部分が大学院留学生であり理科系専攻が多いこと、私費留学生は学部、大学院にほぼ同数在籍しており文科系専攻が多いことである。（8か国上、33～34頁）韓国人留学生は、1990年現在、4,982人で日本での留学生総数の18.2%を占め、中国について第2位である。

表1-5 留学生の出身国
(1990年5月1日現在)

順位	出身国	人数 (%)
1	中国	15,376 (56.0)
2	韓国	4,982 (18.2)
3	マレーシア	1,150 (4.2)
4	アメリカ	1,092 (4.0)
5	タイ	662 (2.4)
6	インドネシア	608 (2.2)
7	フィリピン	307 (1.1)
8	ブラジル	301 (1.1)
9	パキスタン	220 (0.8)
10	香港	214 (0.8)
11	西ドイツ	140 (0.5)
12	イギリス	124 (0.5)
13	インド	114 (0.4)
14	フランス	108 (0.4)
15	オーストラリア	107 (0.4)
16	スリランカ	107 (0.4)
17	シンガポール	76 (0.2)
	その他	1,747 (6.4)
合計		27,435

出典：文部省『学校基本調査報告書』平成2年度版より大学および大学院に在籍する国費と私費の留学生数を合計したもの

(2) 中国

1978年に日中平和友好条約が締結され翌年から日本留学が開始された。日本から日本語・理科・数学などの教師が派遣されて学部生1年間、大学院生半年の予備教育が行われた。(8か国上、48頁)その後日本への留学生数は急増し1990年現在15,376人で日本の留学生数(大学と大学院の国費と私費留学生の合計人数)の56%を占め最も多い。専攻分野は社会科学・工学が多い。また、留学経費は私費が93%と大部分である。(文部省、平成2年度版)

(3) タイ

1903年に初めてのタイ人留学生8名が来日し、その後徐々に増加して1937年には200人に達した。太平洋戦争中は一時中断したが1954年から日本文部省による留学生招致が本格的にはじまり留学生数は次第に増加している。(8か国上、63～64頁)1990年現在、日本への留学生数は662人で私費留学生が急増しているが、日本における留学生全体に占める順位は第5位、割合は2.4%にすぎない。専攻分野は、社会科学・工学が多い。(文部省、平成2年度版)

(4) インドネシア

日本留学には三つの波があり、第一の波は1943・44年の「南方特別留学生」の制度により、12人が来日している。次は、1960年より始まった「インドネシア賠償留学生制度」によるもので、5年間毎年100人の留学生が派遣された。その後1970年代は低迷していたが1980年代に入って日本政府の留学生受け入れ政策などにより留学生数は増加している。1984年には、留学生数は208人になったが、インドネシア人の留学先国としては日本は第10位である。(8か国上、80～83頁)1990年には日本への留学生数は608人に増加したが、日本での留学生全体で第6位、約2.2%にすぎない。日本留学の特徴は私費が多く、学部・大学院レベルがほぼ同数で、工学、社会科学、農学の専攻者が多いことである。(文部省、平成2年度版)

(5) インド

日本留学は日清戦争後にはじまり、日露戦争に日本が勝利すると、インド人の民族意識の進展と呼応して急発展するが、その後は減少する。第二次大戦後は日本の留学生受け入れ再開により再び日本留学が始まるが、1990年現在114人で日本における全留学生数の約0.4%と微々たる存在であり、日本での留学生数では第13位を占める。インド人留学生の場合、国費で大学院課程に在籍し工学・農学専攻のものが多い。(8か国下、7～8頁および文部省、平成2年度)

(6) フィリピン

第一段階は、1943・44年の「南方特別留学生」の制度により51名が来日した。第二段階は、戦後の日本政府奨学金の増大によるものであり、1980年代になると大学院レベルの留学生が急増している。(8か国下、23頁)1988年は267人で日本は第3位の留学先国であ

る。(ユネスコ、1990) また、1990年には307人に増加しているが日本の留学生の第7位で1.1%を占めるにすぎない。(文部省、平成2年度版)

(7) マレーシア

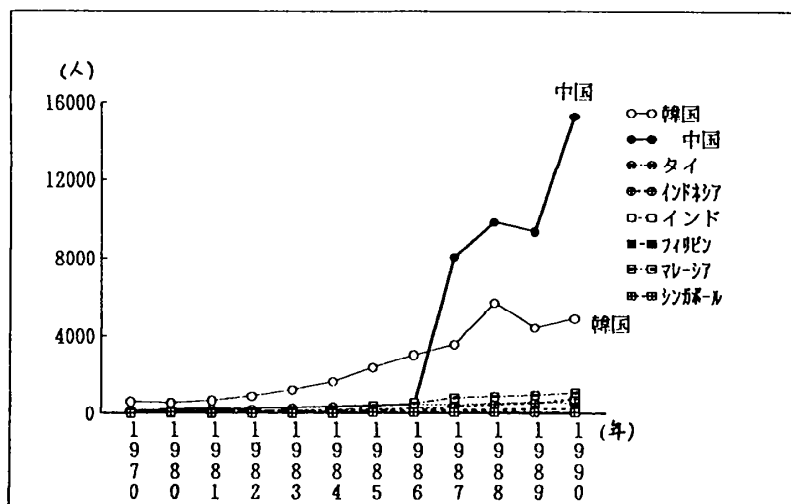
古くは「南方特別留学生」に始まったが、1982年のルックイースト政策以降、日本政府援助の留学生予備教育が行われるようになり日本留学は増加傾向にあるが、私費留学生が圧倒的に多い。(8か国下、36頁) 1988年の日本留学は983人であるがマレーシア人留学生全体の2.8%にすぎない。(ユネスコ、1990) また1990年の日本留学は1,150人で日本での留学生全体の4.2%で、第3位を占める。(文部省、平成2年度版)

(8) シンガポール

日本をアジアの経済・技術大国として重視して、1979年以来、日本留学についての奨学生を増加させているが、数値的には海外留学生全体の1.2%にすぎず、大きな増加もみられない。(8か国下、51～52頁) 1990年の日本留学は76人で日本での留学生全体の0.2%であり、第17位である。(文部省、平成2年度版)

以上、8か国からの日本留学生数の推移をまとめたものが、表1-6・図1-3である。1980年代以降韓国および中国の日本への留学生数が急増しているが、他の6か国は横ばいか微増である。即ち、日本が国策として推進している留学生10万人受け入れ計画は、本稿の「2. 海外留学の展開」の部分ですでに述べた、韓国・中国での1980年代の留学の自由

図1-3 8か国日本留学の推移



出典：文部省『学校基本調査報告書』各年度版より作成

化政策および奨励政策とあいまって、これら2か国については留学生を日本によりよせる効果を発揮しているといえるであろう。このことは、とりわけ、留学生10万人受け入れ計画が政策として打ち出された1983年以降増加が加速していることから明らかである。また、表1-7は1988年現在の8か国主要留学先国と日本留学の順位をまとめたものである。8か国とも第1位はアメリカであり、約4

～9割以上をしめておりアメリカへの流れが非常に大きい。

一方、日本は韓国・中国において第2位、タイ・フィリピンにおいて第3位をしめているものの、各国の留学生数全体にしめる割合は韓国・中国で約15%、タイ・フィリピンで1割以下である。また、他の4か国ではインドネシア5位、シンガポール6位、マレーシア7位、インド9位となっている。アメリカ以外の主要留学先国は、西ドイツ・イギリス

表1-6 8か国日本留学の推移

(人)

年\国	韓国	中国	タイ	インドネシア	インド	フィリピン	マレーシア	シンガポール
1970	724	3,149☆	184	132	28☆	47☆	163☆	63☆
1980	643	3,107	240	144	54	102	134	67
1981	762	3,407	287	156	54	109	152	64
1982	960	3,955	319	152	66	117	151	62
1983	1,306	4,606	378	178	80	128	200	61
1984	1,715	4,900	408	208	82	128	339	65
1985	2,408	5,519	501	222	99	144	501	74
1986	3,072	6,657	539	343	105	204	664	86
1987	3,657	8,072	561	459	104	219	884	89
1988	5,799	9,901	637	571	117	264	967	86
1989	4,487	9,453	671	668	123	284	1,032	85
1990	4,982	15,376	662	812	114	307	1,150	76

出典：文部省『学校基本調査報告書』各年度版より作成(大学・大学院の合計) (☆:1969年)

表1-7 8か国主要留学先国と日本留学の順位(1988年現在)

国名\順位	1位	2位	3位	4位	5位	合計(人)	日本留学の順位
韓国	アメリカ 17,874 (66.0)	日本 4,010 (14.8)	西ドイツ 3,557 (13.1)	フランス 1,343 (5.0)	イギリス 314☆ (1.1)	27,098	2位
中国	アメリカ 50,128 (74.0)	日本 10,422 (15.4)	カナダ 2,774 (4.1)	西ドイツ 2,378 (3.5)	フランス 2,024 (3.0)	67,726	2位
タイ	アメリカ 5,691 (71.1)	フィリピン 1,028 (12.8)	日本 616 (7.7)	オーストラリア 407 (5.1)	フランス 264 (3.3)	8,006	3位
インドネシア	アメリカ 7,565 (61.7)	西ドイツ 2,143 (17.5)	オーストラリア 1,314 (10.7)	オランダ 725 (6.0)	日本 574 (4.7)	12,321	5位
インド	アメリカ 20,252 (87.1)	イギリス 922☆ (4.0)	カナダ 890 (3.8)	西ドイツ 604 (2.6)	パキスタン 588 (0.2)	23,256	9位
フィリピン	アメリカ 3,936 (81.2)	サウジアラビア 312 (6.4)	日本 267 (5.5)	パキスタン 174☆ (3.6)	オーストラリア 160 (3.3)	4,849	3位
マレーシア	アメリカ 14,021 (42.9)	オーストラリア 7,270 (22.2)	イギリス 6,310 (19.3)	シンガポール 3,687 (11.3)	カナダ 1,410 (4.3)	32,698	7位
シンガポール	アメリカ 3,869 (44.7)	イギリス 1,930 (22.3)	オーストラリア 1,418 (16.4)	カナダ 1,133 (13.1)	ニュージーランド 310 (3.6)	8,660	6位

出典：Unesco, Statistical Yearbook, 1990. (上段：留学先国 中段：人 下段：% ☆1987年)

・オーストラリアなど従来からの留学生受け入れ国で占められており、アジア8か国において日本留学はまだマイナーである。日本への留学生が少ない原因について、8か国の留学生を引き付けているアメリカと比較すると、日本の場合①日本語は習得が難しく通用範囲が狭い、②学位取得のシステムが未確立、③日本の大学に特有の「文化」が留学生に理解されにくい、④奨学金や住居が不備・不足、⑤異文化摩擦が生じやすいといった状況がある。(4)

表1-8 8か国日本留学の特徴

表1-8は1990年現在、日本留学における8か国の特徴を留学費用・在学段階・専攻分野についてまとめたものである。表1-8から、留学費用は8か国のなかで韓国・中国・インドネシア・マレーシアで私費が大部分を占めており、タイ・インド・フィリピンでは国費の方が多い。シンガポールでは国費と私費はほぼ同数である。また、在学段階では、インド・フィリピンは大学院が大部分であり、マレーシア・シンガポールでは学部段階の留学が大部分である。他の4か国は学部と大学院にはほぼ同数在籍している。専攻分野は、8か国に共通して、工学、社会科学が多い。専攻分野で社会科学をのぞくと文科系が少ないのは、この分野では日本では博士学位の取得が非常に困難であるからであろう。(5)

	留学費用(%)		在学段階(%)		専攻分野
	国費	私費	学部	大学院	
韓国	13	87	48	52	社会・人文科学・工学
中国	7	93	58	42	社会科学・工学
タイ	60	40	43	57	社会科学・工学
インド	34	66	54	46	工学・社会科学
インドネシア	66	34	24	76	工学・農学
フィリピン	76	24	36	64	農学・工学・社会科学
マレーシア	19	81	88	12	工学・社会科学
シンガポール	46	54	89	11	工学
8か国平均	13	87	57	43	

出典：文部省『学校基本調査報告書』平成2年度版より作成

〈注〉

- (1) 馬越徹「アジアの高等教育と海外留学」『国際教育交流の新段階－1990年代の高等教育への課題－』高等教育研究紀要第12号、1990年、60～61頁。
- (2) William K. Cummings, 'Going Overseas for Higher Education: The Asian Experience', Bridges to Knowledge-Foreign Students in Comparative Perspective, The University of Chicago Press, 1984, 136-139.
- (3) 馬越徹、前掲書、62～63頁。
- (4) 馬越徹、前掲書、62～63頁。
- (5) 文部省『我が国の文教施策』平成2年度、56～57頁より留学生で理科系専攻の博士学位取得率は入学者全体の80%であるのに対して、文科系専攻は5%にすぎない。

第2部 アジア8か国における大学教授の留学観 - 質問紙調査の比較分析 -

永岡 真波

第2部では、1985年12月から翌1986年9月にかけて行なったアジア8か国、即ち韓国（266名）、中国（138名）、タイ（177名）、インドネシア（207名）、インド（215名）、フィリピン（183名）、マレーシア（95名）、シンガポール（50名）計1,331名の教授、助教授、助手、講師等の指導者層に対する質問紙調査について、その結果を横断的に検討していくことにする。

一口にアジアといっても、これら8か国は実に多様な国情を有している。例えば歴史的に見ると、タイは独立国であったが、インド、マレーシア、シンガポールはイギリスの、インドネシアはオランダの、フィリピンはスペイン、後アメリカの、そして韓国は日本、アメリカそれぞれの統治を受けた経験を有する。中国も半植民地的な状況があった。また政治体制という点から見れば、8か国のなかには社会主義国・中国が含まれる。一方、タイは民主主義国家ではあるが、国王を有している。マレーシアも形式的にはあるがスルタンと称される国王が君臨している。さらに、教育制度にしても、日本と同じ6-3-3-4制を取っているのは韓国、中国、タイ、インドネシアの4か国だけで、フィリピンは6-4-4制、マレーシアは6-3-2-2-3制、インドは5-3-2-2-3制、シンガポールは6（～8）-4（～5）-2（～3）-3制とそれぞれに異なっている。表2-1に8か国の概括的な特徴を示している。

表2-1 アジア8か国の概要

	植民地経験	政治体制	教育制度	高等教育の特色	主要留学先
韓国	日本-アメリカ	共和制	6-3-3-4	79年より大衆化	日本～米
中国	半植民地	社会主義	6-3-3-4	文革後復興	ソ連～米
タイ	独立国	立憲君主	6-3-3-4	73年より大衆化	米
インドネシア	オランダ	共和制	6-3-3-4	84年より大衆化	米・西独
インド	イギリス	共和制	5-3-2-2-3	加盟・単一・連合	英・米
フィリピン	スペイン-アメリカ	共和制	6-4-4	戦後すぐに大衆化	米
マレーシア	イギリス	立憲君主	6-3-2-2-3	70年代以降発展	英～豪～米
シンガポール	イギリス	共和制	6-4-2-3etc	質的發展	英～豪～米

このように多様な8か国を横断的に比較考察することは勿論困難なことではあるが、しかし留学、とりわけ日本留学に関する各国の多様な意見・要望を通して日本留学の抱えている問題を主体的に知ることができると考える。以下、第1部で明らかにされた各国の高等教育、留学の歴史等の背景を考慮に入れつつ、質問紙の回答を検討し、8か国のそれぞれの特色や共通性について考察していくことにする。

1. 回答者の属性

(1) 性別

8か国のうち、男性の割合が最も高い国は、韓国（91.4%：6.8%）であり、「儒教国家」の特徴をよく示している。さらにインド、マレーシア、中国、シンガポール、インドネシアの5か国までが、男性教師が8割以上の男性優位の比率を示している。一方、タイ、フィリピンの2か国では男女比がそれぞれ63.8%：35.6%、55.7%：43.2%と女性の進出率が高い。

(2) 専門領域

専門領域（問6）については、質問紙を発送する時点において各国とも教育、人文、法学、経済、理学、工学、農学、医学の各分野に均等になるように配慮したために、回答結果においても各専門分野にほぼ均等に分かれる結果となった。ただし、シンガポールには農学部がないために、農学を専門とする人はおらず、逆に工学部がほぼ倍の割合になっている。

(3) 地位

地位（問5）についても、サンプリングの段階で教授：副教授：助教授：講師の割合を可能な限り2：2：1：1となるように考慮したが、各国の事情及び入手リストの制約などの理由により、先の専門領域にみられるような均等な配分結果にはならなかった。さらに8か国における教官の肩書きも実に多様なものであり、語句の統一は困難である。従って、「アジア8か国における大学教授の日本留学観」の上巻（1988年：以下「上」と示す）及び下巻（1991年：以下「下」）における国毎の報告においては各著者が各国の事情に応じたカテゴリーの分類や

翻訳を行ったが、ここでは質問紙に書かれた形式（英文）のままで示すことにする（表2-2）。

表によれば、韓国、タイ、フィリピンは、Professor、Associate Professor及びAssistant Professorにほぼ均等に分布していることがわかる。また、中国とマレーシアはProfessor、Associate Professor、そしてLecturerに分布している。シンガポールは英語が教授用語の国らしくはっきり

表2-2 地位

	韓国	中国	タイ	インドネシア	インドネシア	フィリピン	マレーシア	シンガポール
1 Professor	44.0	21.0	19.2	9.2	67.4	35.0	36.8	32.0
2 Associate Professor	26.3	39.9	38.4	7.2	12.1	24.6	37.9	28.0
3 Reader	0.4	0.7	0.0	0.5	14.4	0.0	0.0	0.0
4 Senior Lecturer	0.8	5.8	1.1	38.2	0.0	0.5	4.2	22.0
5 Assistant Professor	21.1	2.2	26.0	1.4	0.5	18.6	0.0	0.0
6 Lecturer	0.8	19.6	9.0	39.1	0.0	2.2	20.0	16.0
7 Instructor	3.4	4.3	4.5	1.0	0.0	13.1	0.0	0.0
8 Others	1.5	4.3	0.0	2.4	3.7	4.4	0.0	0.0
不明	1.9	2.2	0.7	1.0	1.9	1.6	1.1	2.0
計（人）	266	138	177	207	215	183	95	50

としたProfessor、Associate Professor、Senior Lecturer及びLecturerの4領域への分布

を示している。地位の分布に関して特に偏りが大きい国はインドとインドネシアである。即ちインドではProfessorが67.4%とずば抜けて高い上に他国にはみられないReaderという肩書きを持つものもかなりの数にのぼる（14.4%）。一方、インドネシアの方は逆に教授、副教授層が極端に少ない配分となっている。この不均衡はインドでは入手リストが教授及び副教授（リーダー）のそれであったこと、インドネシアの方は発送の時点で階層別に振り分けることができなかつたために生じたものである。

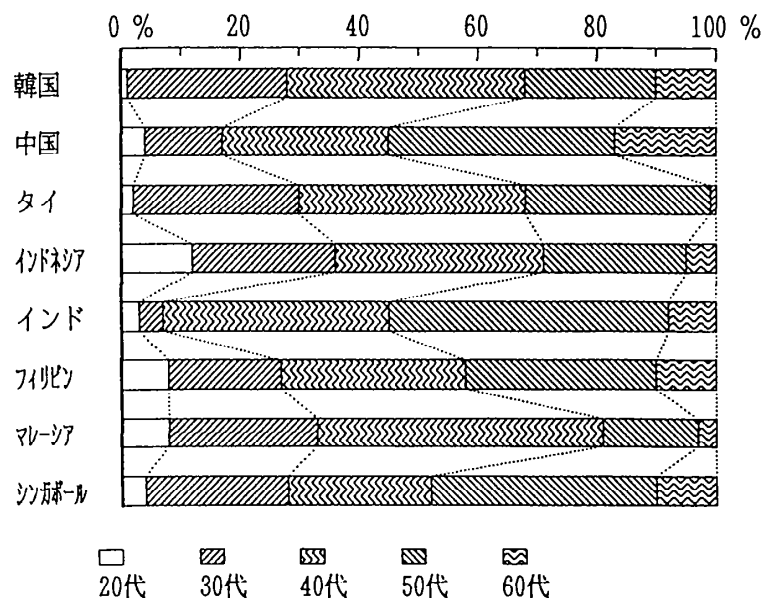
(4) 年令

回答者の年令（問2：図2-1）は、全体的には40代（韓国、タイ、インドネシア、マレーシア）、50代（中国、インド、シンガポール；フィリピンは40代、50代同率）をピークとし、30代から50代までに8割前後が集中する構造となっている。

各国の特徴としては、インドネシアでは20代の若年層の比率が他国に比べて多いこと（12.1%；8か国平均＝4.2%）、反対にインドでは50代（47.0%；8か国平均＝30.3%）、中国では60代（16.7%；8か国平均＝7.4%）の高年齢層が多いことが挙げられる。

これは、先に示した各国の教官の地位の分布にほぼ呼応した形となっている。即ち、若年層の多いインドネシアでは教授、助教授に比べて講師レベルの教官が多く、50代の多いインドでは教授層がずば抜けて高い数値になっているというものである（表2-2）。しかし、中国の状況を見ると、年令分布では8か国の中で60代の比率が最も高く、50代、60代の高年齢層が過半数を占める一方、地位別にみると教授ではなく副教授（Associate Professor）の数が最も多い結果となっている。これは、文化大革命による30代、40代前半の中堅者層の人材不足ないしは教師陣の高齢化を窺わせるものといえよう。

図2-1 回答者の年令



(5) 所属する国際学会

国際学会に所属する者の割合に関して（問7）、8か国平均では、1つの国際学会に属していると答えたものが20.1%、2つが12.1%、3つ以上が10.6%となっており、国際学会に所属しているものの割合は合計42.8%、半数弱という結果になっている。さらに国別に特徴をみていくと、国際学会への所属率が最も低い国が中国で、国際学会所属者全てを合計しても8%と極端に少ない（1つ＝5.8%、2つ＝0%、3つ以上＝2.2%）。逆に、国際学会への所属率が高い国はシンガポール（74.0%）とマレーシア（69.5%）である。両国はさらに3つ以上の国際学会に所属している者もそれぞれ22.0%、25.3%と8か国平

均を大きく上回る数値を示しており（8か国平均＝10.6%）、両国の教授の国際性が窺える。

一方、国際学会のうち日本の学会に所属している割合（問8）となると、急に割合が下がり、8か国平均で7.2%となる。特に、先の国際学会への非常に高い所属率を示したマレーシア・シンガポールが日本の学会に所属している割合は前者が1.1%、後者に至っては皆無である。8か国のうち、隣国・韓国だけが、26.3%と例外的に高い割合で日本の学会に所属している。しかし、全体的にみてこの数値の低さは日本の学会がいまなお世界の学問体形の周辺部に位置している事を端的に示すものであると言わざるをえない。これは、日本の学会の国際化における今後の検討課題の一つである。

(6) 所持する学位

回答者が有する最高学位については（問9：表2-3）、8か国平均では、博士学位53.0%、修士29.8%、学士6.3%、その他6.6%となっている。これも各国別に見ていくと、

表2-3 最高学位（問9） (%) (人)

	博士	修士	学士	その他	無記入	計
韓国	75.6	20.7	2.3	1.5	0.0	266
中国	10.1	52.9	22.5	10.1	37.0	138
タイ	48.6	42.4	6.2	2.3	0.6	177
インドネシア	17.9	48.8	4.8	26.6	1.9	207
インド	87.9	10.7	0.9	0.5	0.0	215
フィリピン	43.7	44.3	8.7	2.2	1.1	183
マレーシア	69.5	23.2	4.2	0.0	3.1	95
シンガポール	66.0	20.0	12.0	0.0	2.0	50
平均	53.0	29.8	6.3	6.6	4.3	1331

博士学位が特に多い国としてインド（87.9%）と韓国（75.6%）、博士学位と修士学位が拮抗している国としてタイ（博士48.6%、修士42.4%）とフィリピン（同順43.7%、44.3%）が挙げられる。最も特徴的なのが中国で、博士が10.1%と非常に少ない一方、修士が52.9%、学士が22.5%と他国に比べて極端に高い割合になっている。また、インドネシアは修士

学位が48.8%と最も高く、ついで多いのが「その他」の学位（26.6%）であった。その他の学位とはインドネシア特有の学位制度・サルジャナやインシニユールを指すものである。これらの学位は1970年代末まで運用された旧大学制度の5年の課程終了者に与えられたので、回答者のほとんどがこの学位を取得していると考えられる。インドネシアの留学観を報告した西村によれば、修士学位取得と答えた者も実際はこのサルジャナやインシニユール学位を取得しているということである（上・p.83）。

上記の各国の回答者の学位取得状況を整理すると、4つのタイプに類型化できる。第1が「博士学位優勢型」で、博士学位取得者が非常に多いインドと韓国にマレーシア、シンガポールを加えた4か国がこれに当たる。第2が「博士・修士併存型」で、タイ、フィリピンである。そして第3が「修士・学士併存型」の中国、第4が「特有の学位制度」を持つインドネシアとなる。

ここで、博士学位を留学との関連からもう少し詳細に見てみよう（表2-4）。まず、留学経験の有無に分けて博士学位の取得状況を見ると、インドとマレーシアでは留学経験を持つ者も持たない者も学位所持率はほぼ同数であるが、この2か国を除く6か国においては留学経験を持つ者の学位取得率の方が持たない者に比べて軒並み高くなっている。博士学位を留学中に取得したのかどうかは後に検討するが、少なくともこの数値からは留学が博士学位の取得に大きな役割を果たしていることが窺えるのである。

次に専門別に博士学位の所持率を見てみると、以下に示すような各国の特徴が明らかに

表2-4 博士学位所持率（留学経験別・専門別）

（％）

	全体	留学経験別		専門別						
		有	無	教育	法経	人文	理	農	工	医薬
韓国	75.6	87.4	48.6	65.2	64.9	67.6	83.7	88.6	80.6	85.3
中国	10.1	19.5	7.8	0.0	7.1	7.4	14.3	16.7	6.7	29.4
タイ	48.6	56.6	13.8	42.3	41.0	33.3	72.7	56.5	47.4	64.7
インドネシア	17.9	34.5	6.4	29.2	5.9	27.8	20.0	7.4	10.0	27.3
インド	87.9	87.2	87.8	90.5	95.9	86.4	100.	80.9	78.9	83.3
フィリピン	43.7	61.5	17.9	37.9	24.0	54.3	46.2	48.1	34.4	76.9
マレーシア	69.5	69.8	66.7	50.0	55.6	54.5	100.	81.0	100.	55.6
シンガポール	64.0	66.7	40.0	28.6	63.6	75.0	87.5	---	63.6	60.0

なってくる。まず、韓国は文科系分野の博士学位所持率が6割程度であるのに対し、理科系分野では全て8割以上である。このことから理科系分野の方が博士学位をより重視している事が分かる。中国においても理科系重視の傾向が窺える。即ち中国では博士学位取得者の割合そのものは10.1%と少ないが、文科系分野は教育の0%を筆頭に、軒並み10%を割っている一方で、理科系分野は工学の6.7%を除いて全て2桁台、特に医歯系は29.4%という数値を示している。同様に理科系の方が高い所持率を示しているのがタイとマレーシアで、特にタイでは理学部と医学関係の所持率が高くなっている。

これに対し、文科系・理科系にあまり大きな差が見られないのが、インドネシア、インド、フィリピン、シンガポールの4か国である。例えば、インドネシアについては、この国も中国同様博士学位所持者自体が少ない国であるが、法政経、農学の分野の所持者がさらに少ないという特徴を持っている。フィリピンでは特に医学関係の学位所持率が高い。

こうした、専門分野別の博士学位所持率の差異は、各国の高等教育の歴史的背景（例えば、中国ではソ連・社会主義の理科系を重視する教育の影響を受けた等）、及び現在の政府の政策（マレーシアの新経済政策にみられるような経済発展へ向けての科学技術を重視した政策等）、学位制度等の要因が複雑に絡んだ結果生じたものと思われる。これらの政策・制度の変化が今後の各専門分野における学位所持率にどのような変化をもたらすかは、今後も注目したい課題である。

2. 回答者の留学体験

(1) 留学経験の有無

回答者の留学経験に関しては（問11）、経験者が9割以上を占める国から3割に満たない国まで非常に大きな幅がある（図2-2）。経験者の多い国から順に挙げると、マレーシア（90.5%）、シンガポール（90.0%）、タイ（82.5%）、韓国（68.4%）、フィリピン（59.6%）、インド（58.1%）、インドネシア（42.0%）、中国（29.7%）となっている。

一方、各国の留学生送り出し率（国内の高等教育機関に在籍している学生数に対する海外学生数の割合）は、マレーシア（43.4%）、シンガポール（15.9%）が2桁台で非常に高く、大きく離れて韓国（2.4%）、中国（1.5%）、インドネシア（1.3%）と続き、タイ（0.9%）、インド（0.3%）、フィリピン（0.2%）は1%にも満たない状況である。（下p.50）

以上から、(1)マレーシア、シンガポール2国は指導者層のみならず、国全体として留学率が高いこと、(2)タイ、韓国、フィリピン、インドの4か国は、全体の留学率に比して指導者層の留学率が高いこと、そして(3)インドネシア、中国の場合は、全体の留学率、指導者層の留学率ともに低いということが言える。

こうした結果は、それぞれ次のような国情を反映しているものと考えられる。

まず第一の категорияに含まれるマレーシア、シンガポ

ール両国は、歴史的にイギリス植民地時代より高等教育を海外に依存していること、そして現在でも国内での大学その他の高等教育機関数が少なく（私立大学がない）、膨大する進学希望者の需要を満たし切れていないこと、さらに近年の私費留学を可能にする個々人の経済的な豊かさが加わって、多くの若者が高等教育を海外に求める結果を生むのであろう。

次に第2の categoryのタイ、韓国、フィリピン、インドは国内での大学数はかなり満たされているが、大学教授にとっては留学による学位の方がよりプレステージを持つがゆえに全体的な比率以上に回答者即ち指導者層の留学率が高くなっているといえる。

第3 category、即ち全体の留学率、教授の留学率ともに低い国家群のうち、インドネシアについては前述のように国内に独自の学位制度を有しており、従って他国ほど留学のメリットが見いだせないものと考えられる。また、留学経験者の最も少ない国、中国については、大学教官自体文革期に育つべき人材が育たなかったこともあり、当然留学経験者の少なさにもこの影響がおおいに反映されていると思われる。

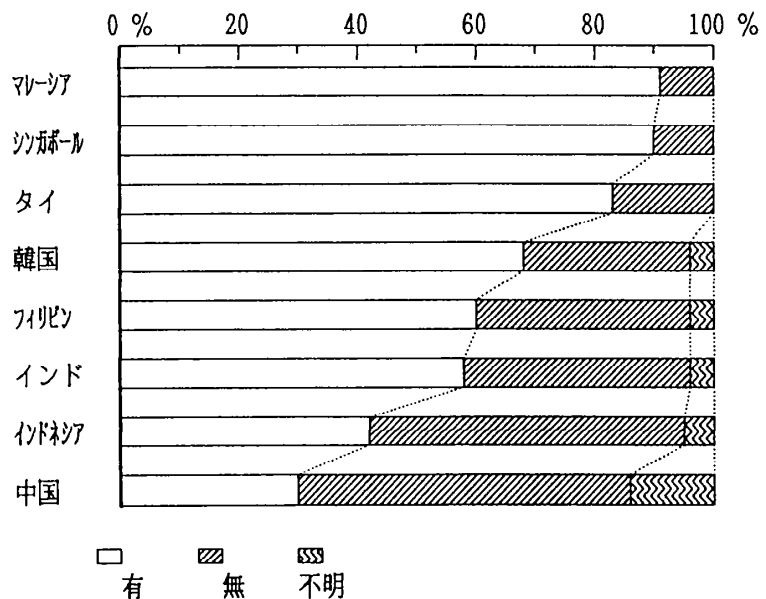
さて、留学経験に関してさらに専門分野別に留学率を検討してみる（表2-5）。表より各国ごとに留学率が平均を上回っている分野を挙げると（斜線部）次のようになる。

表2-5 専門別留学率（問11）

	留学有	専門別						
		教育	法経	人文	理	農	工	医薬
韓国	68.4	73.9	68.4	64.7	74.4	62.9	74.2	64.7
中国	29.7	28.6	28.6	18.5	57.1	25.0	43.3	11.8
タイ	82.5	73.1	89.7	66.7	81.8	82.6	94.7	82.4
インドネシア	42.0	25.0	37.3	58.3	35.0	29.6	50.0	45.5
インド	58.1	33.3	61.2	54.5	66.7	51.1	57.9	77.8
フィリピン	59.6	48.3	48.0	65.7	46.2	66.7	65.6	69.2
マレーシア	90.5	100	88.9	81.8	92.3	85.7	88.9	100
シンガポール	90.0	85.7	90.9	75.0	87.5	---	90.9	100

注) 斜線部は各国毎に平均を上回っている分野

図2-2 留学経験の有無



ンガポールの3か国と最も多い。人文はインドネシアとフィリピンが平均以上の留学率を示している。以上、文科系分野においては8か国のうち7か国までがいずれかにおいて平均を上回る分野を一つ有していることがわかる。しかし、唯一中国だけは文科系分野に平均を上回る専門分野を全く有していない。

一方、理科系分野についてみると、理学において留学率の高い国は、韓国、中国、インド、マレーシアの4か国で、特に韓国と中国ではそれぞれの分野の中で最も高い留学率となっている。農学はフィリピンとタイが僅かに平均を上回る程度で、理科系分野の中では最も低い数値を示している。逆に、ほとんどの国において平均を上回っている分野が工学で、韓国、中国、タイ、インドネシア、フィリピン、シンガポールの6か国に登る。平均以下のインドやマレーシアにしても僅かに下回る程度で留学率そのものはかなり高い数値を示している。このような工学分野にみられる高い留学率は8か国が共通して工業化を中心とした経済発展に力を入れていることを表すものであろうと思われる。最後に、医・歯・薬の分野であるが、これもインドネシア、インド、フィリピン、マレーシア、シンガポールの5か国が平均を上回る高い数値を示している。留学率が高いということは、反面それぞれの国内における教育・研究水準の低さ、あるいは機関の少なさなどの問題を示唆するものといえよう。

(2) 留学回数

留学回数においても(問12)、留学経験者の最も多いマレーシア、シンガポール両国は「2回」の経験を持つものがそれぞれ41.9%、31.1%(8か国平均=27.2%)、「3回以上」が同様に14.0%、11.1%(8か国平均=5.8%)というように経験頻度も高くなっている(表2-6)。

次に、留学経験の有無では第2グループに含めた、タイ、韓国、フィリピン、インドについては、回数の面では、フィリピン、タイの2国

が2回以上の留学経験者が多くなっており(順に33.0%、37.7%)、一方、韓国とインドは留学回数1回の者が多い(順に70.3%、80.0%; 8か国平均=60.3%)。インドネシア、中国は留学経験者は少ない国であったが、留学回数に関してはインドネシアに2回以上の留学経験者がかなり多く(33.3%)、中国は全員が留学回数1回となっている。

(3) 留学年代

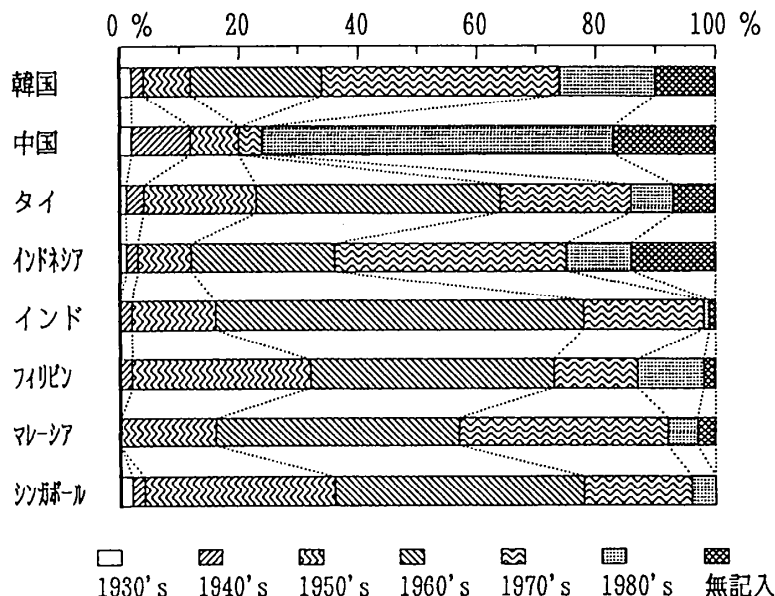
回答者が初めて留学した年代については(問13-2:図2-3)、1960年代を頂点としている国がタイ、インド、フィリピン、マレーシア、シンガポールの5か国で、韓国、インドネシアが70年代、そして中国が80年代を頂点としている。こうした傾向は回答者の年齢等が関係している。即ち回答者の年齢層は30代から50代までに集中しているが、彼らのはじめて留学を経験した時期はそのほとんどが20代であろうから、自然、1950年代後半から1970年代前半、とりわけ1960年代に集中することになる。逆に1960年代の留学が全く

表2-6 留学回数(問12:総数 876人)
(%) (人)

	1回	2回	3回以上	無記入	計
韓国	70.3	24.7	5.5	0.0	182
中国	100.	0.0	0.0	0.0	41
タイ	52.7	37.7	6.8	2.7	146
インドネシア	64.4	33.3	2.3	11.5	87
インド	80.0	18.4	1.6	6.4	125
フィリピン	56.9	33.0	9.3	0.8	109
マレーシア	44.2	41.9	14.0	0.0	86
シンガポール	57.8	31.1	11.1	0.0	45
平均	60.3	27.2	5.8	6.7	876

なかったのが中国であった。中国の場合は、年齢層からいくと40代、50代が多くなっており、1960年代の留学がないことはむしろ不自然である。これは1960年代に起こった文化大革命の影響を多分に受けているものと思われる。その他の関連要因としてインドネシアについては先にも述べた、独自の学位制度が博士、修士、学士という一般的な制度に変わったのが70年代であること、80年代の多い中国については、80年代より留学生送り出しの制限を解除した事と関係があると思われる。

図2-3 留学時期（第1回目のみ）



(4) 主な留学資金源

第1回目の留学の主な留学資金源に関して（問13-6：表2-7）、留学全体の傾向としては私費留学生の比率が高いのであるが、本調査における教授層の回答を見る限りにおいては、私費で留学したとするものは14.5%と非常に少なく、79.1%が何らかの資金を得ている。その中でも私費の割合が比較的多いのが、韓国

表2-7 主な留学資金源（いくつでも／問13-6）

	自国政府	他国政府	自国募金	外国募金	私費	その他	計
韓国	17.0	23.6	1.6	29.1	23.1	9.9	182
中国	60.1	19.5	12.0	4.8	2.4	1.2	41
タイ	21.9	38.4	1.4	15.1	21.9	5.5	146
インドネシア	10.3	55.2	4.6	23.0	3.4	6.9	87
インド	10.4	41.6	1.6	38.4	8.8	12.8	125
フィリピン	23.9	44.0	2.8	30.3	14.7	11.0	109
マレーシア	43.2	24.2	4.2	10.5	12.6	3.2	86
シンガポール	24.4	33.3	4.4	8.9	22.2	13.3	45
計	21.3	33.2	2.4	22.2	14.5	8.0	883

（23.1%）、タイ（21.9%）、シンガポール（22.2%）で、私費留学を可能にする経済的基盤の強さが伺える。また、殆どの国が他国政府の奨学金を受ける割合が高くなっているが、中国（60.1%）、ついでマレーシア（43.2%）は自国政府の奨学金を受けて留学する比率が高くなっている（8か国平均=21.3%）。これは、中国については社会主義国であり、国策としての留学生政策として留学生の送り出しを行なっていること、マレーシアでは、プミプトラ政策との関係があることなどが推定される。即ちマレーシアでは政府が派遣した人が帰国後教官職につきやすいという点（留学、就職ともにマレー系優先となる）が考えられる。

(5) 留学中に取得した学位

回答者の留学状況については（問13）、最大3回目までの留学の状況について尋ねる欄を設け、留学先国や留学した年など8つの項目に答えてもらった。各国報告ではこのうち

第1回目についてのみ分析しているが、特に博士学位などについては2回目以降で取得しているものも多いため、取得学位（問13-8）については3回目までの全てを集計、検討することにした。（表2-8）

その結果、学位取得の傾向については以下の4つのグループに分類することができた。

表2-8 留学中に得た学位
（問13-8/1回目から3回目までの合計）

	（%）			
	博士	修士	学士	その他
韓国	54.9	28.0	7.1	7.1
中国	14.6	17.1	2.4	12.2
タイ	55.5	65.8	18.5	13.0
インドネシア	20.7	54.0	8.0	25.3
インド	54.4	24.8	0.0	25.6
フィリピン	49.5	56.9	3.7	31.2
マレーシア	60.5	57.0	31.4	18.6
シンガポール	48.9	46.7	33.3	20.0

まず、第1のグループが「博士学位取得型」で、これには韓国（54.9%）、インド（54.4%）があてはまる。第2に「博士・修士取得型」でタイ（博士：修士＝55.5%：65.8%）、マレーシア（同順60.5：57.0）、シンガポール（同順60.5：57.0）、第3が「修士学位取得型」でインドネシア（修士学位＝54.0%）、フィリピン（56.9%）、そして第4の学位取得を重視しない国が中国である。中国は文革以降、ようやく留学が再開されたため、調査時の1985年段階で学位取得者がそれ程いなかったのは、当然の結果ともいえる。従っ

て現在の中国からの留学が急増している状況からすれば、10年後、20年後には全く異なる結果が得られることが予想される。

ここで、留学経験が学位、特に博士学位取得にどれ程有利に働くか、という疑問が起こる。前章において、博士学位所持率は留学経験を有するものの方が高いという傾向が見られたが（表2-4）、留学経験者のなかで博士学位を取得したものの割合を見てみると（表2-8）、博士学位を重視していた韓国、タイ、インド、マレーシア、シンガポール、及び修士学位を重視するとしたフィリピンの計6か国までがほぼ半数以上の割合で博士学位を取得していることは、注目に値する。

(6) 留学先国

第1回目の留学の留学先国については（問13：表2-9）、8か国平均では、北米（アメリカ・カナダ）に留学したとするものが最も多く50.3%、ついで西欧が18.5%、アジア・オセアニア10.4%、そして日本7.1%の順となっている。

表2-9 留学先国（問13-1）*第1回目の留学のみ
（%）（人）

	日本	北米	西欧	アジア 地区	東欧	その他	無記 入	計
韓国	18.6	62.1	8.8	5.5	0.0	3.1	1.6	182
中国	22.0	56.1	4.9	4.9	9.8	4.9	0.0	41
タイ	4.8	54.1	17.8	17.1	0.0	2.1	4.1	146
インドネシア	6.9	29.9	28.7	23.0	2.3	5.7	13.8	87
インド	0.8	60.8	24.0	4.0	6.4	4.8	6.4	125
フィリピン	5.5	73.4	8.3	7.3	1.8	2.7	0.9	109
マレーシア	0.0	38.4	41.9	15.1	0.0	2.3	2.3	86
シンガポール	0.0	31.1	42.2	20.0	0.0	6.7	0.0	45
平均	7.1	50.3	18.5	10.4	1.8	3.4	8.7	883

これを各国別に見ると、北米への留学経験者が過半数を超えている国は韓国、中国、タイ、フィリピン、インドの5か国であり、特にフィリピンは73.4%と北米に集中している。

一方、インドネシアは先の5か国同様に北米が留学先国として最も多く選択されている

ものの、比率的には西欧、及びアジア・オセアニアに分散した留学形態を取っている。

さらに、シンガポール、マレーシアについては、北米よりむしろ旧宗主国イギリスを含む西欧の方がやや多く、この2地域で留学先国を2分する形を取っている。但し、これら

2国も年代別にみると1970年代を期にイギリス留学からアメリカ留学へと主要留学先国の移行が起こっている。(下 pp. 37-38, p. 53) これはイギリスが1979年に留学生に対するフル・コスト・ポリシー(授業料全額負担制度)を開始したことと関連するものであろう。

次に日本への留学についてみると、韓国、中国では北米の次に多く留学先国として選択されているが、その他6か国においては殆ど留学しておらず、マレーシア、シンガポールに到っては皆無となっている。こうした回答は、第1部第3章に示すように本調査のみならず各国の全体的な留学の傾向にもみられるものである。

(7) 留学先国の選択理由

ここで、留学先国の選択理由を尋ねると(問14-1)、「研究水準の高さ」を挙げる者が最も多く(8か国平均=70.2%)、ついで「奨学金」(同57.6%)が挙げられている(表2-10)。これをさらに詳細にみていくと、「研究水準」を第1の選択理由として最も多く挙げている国は韓国、中国、インド、フィリピン、マレーシア、シンガポールの6か国にのぼるが、タイとインドネシアの2国は「奨学金」という経済的な面での動機を最も多く選択している。なお、中国は奨学金という点に対して8か国平均(57.6%)の約半分(24.4%)という最も低い比率を示している。

表2-10 留学先国の選択理由(いくつでも)(問14-1:総数 876名)

	(%)												(人)
	研究水準	奨学金	学位評価	関係深い	好き	教授推薦	友人知人	生活費安	近い	気候	学位容易	その他	計
韓国	86.3	44.0	27.5	11.0	16.5	12.1	11.0	4.4	7.7	2.2	1.1	4.4	182
中国	65.9	24.4	12.2	4.9	17.1	17.1	7.3	4.9	2.4	4.9	2.4	9.8	41
タイ	61.0	65.1	37.0	8.9	17.8	7.5	8.2	4.1	2.1	2.1	1.4	2.7	146
インドネシア	58.6	78.2	28.7	9.2	20.7	17.2	9.2	6.9	5.7	5.7	1.1	9.2	87
インド	81.6	67.2	40.8	16.8	16.8	17.6	4.8	4.8	0.0	0.8	0.8	20.0	125
フィリピン	78.9	77.1	52.3	43.1	22.0	10.1	6.4	3.7	3.7	1.8	0.9	16.5	109
マレーシア	76.7	65.1	50.0	33.7	18.6	17.4	14.0	3.5	3.5	2.3	1.2	8.1	86
シンガポール	82.2	60.0	53.3	35.6	22.2	12.4	8.9	4.4	4.4	0.0	0.0	11.1	45
平均	70.2	57.6	35.3	17.8	17.4	12.8	8.2	4.2	3.7	2.2	1.0	9.1	876
日本留学	63.5	42.9	20.6	12.7	22.2	12.7	17.5	7.9	27.0	0.0	0.0	4.8	63

8か国平均では、「研究水準」、「奨学金」に次いで「学位評価の高さ」(同35.3%)が挙げられている。特にマレーシア、シンガポール、フィリピン(5割以上)、さらにインドとタイ(8か国平均以上)が重視している。

また、8か国平均第4位の「留学先国と母国との関係が深い」という項目については、フィリピン、マレーシア、シンガポールの及びインドの4か国がより高い率で選択している。これらはすべて旧植民地国で今なお旧宗主国との深いつながりを持つ国々である。

次いで第5位にあたるのが、「好き」という項目である。これは、先の旧植民地諸国以外の国、即ち韓国、中国、タイ、インドネシアの4か国にとっては留学先国との関係が深いという項目より高い比率を示している。留学先国への関心の有無、好感度の有無が留学先国選択にかなりの程度影響を与えることが示唆される。これは日本のアジアにおける歴史的過去を鑑みるに、日本留学が選択されない要因の一つになっているのではないかと推測される。

第6番目に多いのが、「教授の推薦」である。この点についても、今回調査対象とした

指導者層が今後の留学の動向を左右するであろうという我々の仮定を裏付ける結果を示している。

日本留学のプル要因を探るために、8か国のデータの中から選択先国として日本を選択したもののみ抽出し（63名）、彼らの選択理由を再集計してみた（表2-10下段：「日本留学」の項）。すると、8か国平均に比べて数値的には低いものの、「研究水準」や「奨学金」、「学位評価」がかなり高い比率で選択されていることがわかった。また、逆に日本が選択されない理由となるのではないかと推測した「好き」という項目も実際に日本に留学した回答者たちの反応はむしろ平均を上回るものであった。また、特に平均を大きく上回るものとしては、「友人知人がいること」、「距離が近い」の2項目が挙げられる。これは日本留学者62名中34名までが韓国の指導者達であることも関係しようが、同じアジアの一員であるという身近さが日本留学の大きな選択動機となっていることを示すものといえよう。

(8) 留学の最重要目的

留学の最重要目的（問14-3）については、①学位の取得、②自己の研究の発展、③海外生活によって経験を豊かにする、④訪問国の文化、社会、歴史を知るため、⑤帰国後高い地位を得るため、⑥就職への有利性、⑦その他、という7項目について順位付けをしてもらう形式を取った（表2-11）。結果、「研究の発展」（44.6%）と「学位の取得」（34.1%）に回答が集中した。各国毎にみても、これら2項目について8か国は大きく2つのグループに分かれた。まず、第1のグループが「学位取得」を最も重要とするもので、タイ、フィリピン、マレーシア、シンガポールの4か国がこれに当てはまる。

もうひとつのグループは「研究の発展」を最も重視する国で、韓国、中国、インドネシア、インドとなっている。

この点を考慮に入れつつ実際の学位取得状況を見てみると確かに中国とインドネシアの博士学位取得率は他国に比べて低い値を示している。しかし、韓国、インドについては前項で示すように、かなり高い博士学位取得率を有しており（それぞれ54.9%、54.4%）、実情が必ずしも彼らの最重要目的と一致しているとはいえない。この結果からは彼らは自己の研究の発展の副産物として学位を取得しているといった解釈も可能である。

なお、「留学は研究に役立つか」という問いに（問14-4）、否定的な答えをするものは8か国中どの国にも見られなかった。

以上、回答者の留学体験について要約すると次のようなことがいえる。アジア8か国は、マレーシアやシンガポールのように回答者の9割以上が留学経験者という国から中国のように3割に満たない国まで大きな幅を持っている。

こうした中で、留学体験者の特徴としては、①工学、理学、医学等理科系の留学率が高

表2-11 留学の最重要目的（問14-3）

	(%)						(人)
	学位	研究 発展	留学 体験	文化 知る	帰国 地位	就職	計
韓国	28.0	65.4	0.0	0.0	1.1	0.0	182
中国	7.3	68.3	0.0	2.4	2.4	0.0	41
タイ	51.4	32.2	3.4	2.7	8.9	2.7	146
インドネシア	21.8	55.2	4.6	2.3	4.6	0.0	87
インド	24.0	60.0	2.4	0.8	8.8	0.8	125
フィリピン	48.6	32.1	3.7	1.8	5.5	2.7	109
マレーシア	47.7	33.7	2.3	1.2	5.8	1.2	86
シンガポール	60.0	22.2	0.0	0.0	0.0	0.0	45
計	34.1	44.6	2.1	1.3	4.8	0.7	876

いこと、②留学年代については1960年代の中国における文化大革命に代表される政治的要因あるいは留学政策などの影響を受けていること、③留学先国はアメリカが最大の受け入れ国であること、④日本留学は韓国、中国を除いては殆どなされていなかったことが挙げられる。

留学先国の選択理由は、「研究水準の高さ」という学問的な側面に加えて、「奨学金」という経済的な面も挙げられている。また、受け入れ国との関係の深さも重要な選択理由となっている。さらに、「教授の推薦があったこともかなりの程度重視されており、指導者が学生の留学及び留学先国決定に多大な影響を及ぼすことが推測される。なお、日本留学を選択した理由として「距離が近い」、「友人知人がいる」という身近さが挙げられている点が特徴的であった。

留学の最重要目的は「研究の発展」と「学位取得」であるが、中でも学位取得については、留学した者のほぼ過半数が学位を取得している点から、学位取得の持つ重要性が推測される。

以上の回答者の持つ社会的背景を参考に、彼らの留学指導に関する意見を検討していくことにする。

3. 学生の留学に関する意見

(1) 学生への留学指導

① 留学推薦段階

学生に留学を勧める段階（問15）について8か国が共通する点は「学部」段階の留学（6.7%）よりも「大学院」段階での留学（修士=34.0%、博士=33.7%）を勧める傾向にあるということである（表2-12）。

しかし、大学院において修士と博士のどちらをより強く勧めるかについては、各国毎に異なる結果がでており、タイ、インドネシア、フィリピン、マレーシアの4か国が修士課程での留学を、そして韓国、中国、インド、シンガポールの方が博士課程での留学をより強く勧めている。

表2-12 どの段階で外国への留学を勧めるか（問15）
（%）（人）

	学部	修士	博士	院後	その他	無記入	計
韓国	4.1	31.6	41.0	17.3	1.5	4.1	266
中国	5.1	23.2	44.9	15.2	5.1	6.5	138
タイ	10.2	42.4	22.6	14.1	4.5	6.2	177
インドネシア	6.3	37.7	22.2	24.2	2.4	7.2	207
インド	4.0	19.2	54.4	20.0	0.8	1.6	125
フィリピン	3.8	48.6	25.1	10.4	3.3	8.7	183
マレーシア	16.8	35.8	22.1	14.7	2.1	8.4	95
シンガポール	12.0	34.0	36.0	18.0	0.0	0.0	50
計	6.7	34.0	33.7	17.1	2.8	5.6	1331

② 留学推薦国

学生に留学を勧める国に関しては、第1位と第2位の国をそれぞれ記入する形式を取った（問16）。まず、第1位として推薦する国についてであるが（表2-13）、これは圧倒的にアメリカが多い。即ち、8か国共通して留学先国としてまずはアメリカ、次いでその他の先進国を推薦するというパターンとなっている。特に韓国、タイ、インド、フィリピンの4か国はその7割以上がアメリカを推薦しており、アメリカ一辺倒といった感がある。

第1位に推薦されたその他の先進国としては日本及びイギリスが挙げられるが、このど

表2-13 留学を最も勧める国(問16)

国名	留学経験	計(人)	日本	アメリカ	イギリス	カナダ	オーストラリア	西ドイツ	フランス	オランダ	中国
韓国	有	182	8.8	75.3	2.7	0.5	0.0	5.5	1.1	0.0	1.1
	無	74	18.9	64.9	4.1	0.0	0.0	5.4	0.0	0.0	1.4
		266	12.4	70.7	3.8	0.4	0.0	5.3	0.8	0.0	1.1
中国	有	41	19.5	56.1	4.9	2.4	2.4	0.0	0.0	0.0	---
	無	77	35.1	50.6	0.0	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	---
		138	29.7	53.6	1.4	0.7	0.7	2.2	0.0	0.0	---
タイ	有	143	4.2	70.6	7.0	0.7	0.0	0.7	1.4	0.7	0.0
	無	29	10.3	72.4	0.0	0.0	0.0	0.0	3.4	0.0	0.0
		177	5.1	70.1	5.6	0.6	0.0	1.1	1.7	0.7	0.0
インドネシア	有	87	10.3	51.7	3.4	1.1	5.7	1.1	3.4	6.9	0.0
	無	110	36.4	39.1	0.0	0.0	1.8	2.7	0.0	1.8	0.0
		10	24.2	44.0	1.4	0.5	3.4	1.9	1.4	4.8	0.0
インド	有	125	0.8	74.4	12.0	1.6	0.8	0.8	0.0	0.8	0.0
	無	82	7.3	70.7	11.0	0.0	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0
		215	3.7	73.0	11.6	0.9	0.5	0.5	0.5	0.5	0.0
フィリピン	有	109	10.1	75.2	2.8	0.9	2.8	0.0	1.8	1.8	0.0
	無	67	11.9	74.6	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5
		183	11.5	73.8	2.2	1.1	1.6	0.0	1.1	1.6	0.5
マレーシア	有	86	2.3	58.0	18.6	1.2	4.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	無	9	11.1	33.3	22.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		95	3.2	55.8	18.9	1.1	4.2	0.0	0.0	0.0	0.0
シンガポール	有	45	0.0	60.0	31.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.4
	無	5	0.0	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		50	0.0	60.0	32.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0

表2-14 留学を第2に勧める国(問16)

国名	留学経験	計(人)	日本	アメリカ	イギリス	カナダ	オーストラリア	西ドイツ	フランス	オランダ	中国
韓国	有	182	46.2	11.5	9.3	2.2	0.5	14.3	2.2	0.5	0.0
	無	74	52.7	18.9	2.7	0.0	1.4	8.1	2.7	0.0	4.1
		266	22.2	14.7	7.5	1.5	0.8	12.0	2.3	0.4	1.1
中国	有	41	39.0	22.0	7.3	0.0	0.0	9.8	2.4	0.0	---
	無	77	41.6	27.3	7.8	2.6	0.0	2.6	1.3	0.0	---
		138	40.6	25.4	8.7	1.4	0.0	4.3	1.4	0.0	---
タイ	有	143	22.4	10.5	30.1	3.5	7.0	1.4	0.7	0.0	0.0
	無	29	24.1	13.8	6.9	0.0	24.1	0.0	6.9	3.4	0.0
		177	25.0	11.3	25.4	2.8	9.6	1.1	1.7	0.6	0.0
インドネシア	有	87	18.4	21.8	16.1	1.1	8.0	3.4	1.1	1.1	0.0
	無	110	28.2	27.3	4.5	0.0	5.5	3.6	0.0	2.7	0.0
		10	23.2	24.2	9.2	0.5	6.8	3.4	0.5	2.9	0.0
インド	有	125	24.8	13.6	28.0	8.0	2.4	4.8	3.2	1.6	0.0
	無	82	20.7	14.6	28.0	9.8	2.4	6.1	0.0	0.0	1.2
		215	23.3	14.0	28.4	8.4	2.3	5.6	1.9	0.9	0.5
フィリピン	有	109	22.9	14.7	29.4	1.8	4.6	2.8	0.9	0.0	0.0
	無	67	26.9	13.4	17.9	3.0	3.0	3.0	1.5	0.0	0.0
		183	24.0	15.3	24.6	2.2	3.8	2.7	1.1	0.0	0.0
マレーシア	有	86	7.0	19.8	43.0	3.5	4.7	2.3	0.0	0.0	1.2
	無	9	22.2	22.2	33.3	0.0	11.1	0.0	0.0	0.0	0.0
		95	8.4	20.0	42.1	3.2	5.3	2.1	0.0	0.0	1.1
シンガポール	有	45	6.7	28.9	37.8	8.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	無	5	0.0	20.0	40.0	0.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		50	6.0	28.0	38.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0

ちらを第2の留学先国として選択するかについては、国ごとに異なる結果がでている。即ち、シンガポール及びマレーシア、インドはやはり旧宗主国イギリスを第1位の国として推薦しており、中国（29.7%）、インドネシア（24.2%）、韓国（12.4%）、フィリピン（11.5%）の4か国においては日本を選択する比率が高い。

表2-13では、留学経験が留学先国の推薦においてどのような影響をもたらすかを知るために、留学経験の有無に分けての考察も行った。結果、特に日本を選択する際、シンガポールを除くどの国においても留学経験の無い者の方が留学経験を有する者より日本を選択する割合が高いということがわかった。さらに、興味深いことに、アメリカ留学に関しては、逆に留学経験を有する者の方が経験の無い者よりも高い割合でアメリカ留学を推薦する結果となっている。この点は全回答者のわずかに7.2%が日本留学経験者である一方、過半数が北米（アメリカ・カナダ）の留学経験者であることと重要な関連があると考えられる。

同様に、第2位に推薦する国としては（表2-14）、日本とイギリスが挙げられている。これも第1位の推薦に関して述べたように、日本留学経験者の最も多い韓国、中国は日本を、英語圏であるインド、フィリピン、マレーシア、シンガポール及びタイがイギリスを第2位に推薦する国として挙げている。残るインドネシアはアメリカと日本をほぼ同率で挙げている。このことから日本、西欧のどちらを第2の留学先国として選択するかは、留学経験の有無の他、歴史的関係、及び留学先国の言語の問題（特に英語力）等に関係しているものと推測される。表2-14でも、留学の有無に分けて数値を示したが、ここでも日本留学に関連して差異が確認された。即ち、全体として日本留学を第2位に推薦する国として最も多く挙げていたのは、中国と韓国の2か国のみであったが、留学経験の無い者だけをみると、韓国、中国に加えてタイ、インドネシア、フィリピンの計5か国までが日本を推薦している。本調査が「日本」の調査であるという点で多少のバイアスが掛かっているとはいえ、留学経験の無い者の方がアメリカ一辺倒、あるいは欧米偏重とも言うべき傾向が少ないといえるのではないだろうか。

③ 留学先国の推薦理由

留学先国推薦に関連して、第1位に推薦した国の選択理由についても尋ねた（問16-1：表2-25）。その結果、8か国共通して「専門に役立つから」としたものが圧倒的に多いことがわかった（8か国平均=74.0%）。ついで、「自分が留学したから」（8か国平均

表2-15 第1番めの国の選択理由（多岐選択/問16-1）

	専門に役立つ	自分が留学	就職に有利	交流プログラム	政府の推進	大学の推進	低経費	学位取得容易	その他
韓国	86.1	16.5	13.2	6.8	5.6	3.4	4.1	2.6	10.2
中国	73.2	9.4	3.6	24.6	13.0	9.4	4.3	5.1	8.0
タイ	67.8	20.9	19.2	8.5	11.3	5.6	3.4	4.5	17.5
インドネシア	64.3	17.4	16.9	19.8	17.4	12.6	3.9	4.3	17.4
インド	80.0	24.7	29.3	12.1	6.0	10.2	2.3	1.9	24.7
フィリピン	69.4	25.7	30.1	23.0	10.4	10.9	2.7	1.6	39.3
マレーシア	65.3	34.7	8.4	8.4	11.6	4.2	2.1	1.1	34.7
シンガポール	82.0	34.0	26.0	0.0	12.0	8.0	4.0	4.0	18.0
計	74.0	21.0	18.6	13.8	10.4	8.1	3.4	3.1	20.4

=21.0%)、「就職に有利」(同18.6%)、「交流プログラム」(同13.8%)の順となっていた。

国別にみて特徴的な点は、中国とマレーシアでは「就職に有利」という点をそれほど重視していないことが挙げられる。これは、例えば中国の場合、近年開放されつつあるとはいえ、資本主義社会ほどは自由に自分の職業を選択できない状況があることも一因だろう。また、マレーシアは8か国中最大の留学生送り出し大国であり、言い換えれば、留学の大衆化が最も進んでいる国であるため、留学先国の選択が即就職への有利性とは結びつきにくくなっているのではないかと推測される。

就職に関連して、「留学は昇進に役立つか」(問18)との問いも行ったがこの点については、留学経験者の少なかった中国やインドネシアも含めて回答者のほぼ全員が「役立つ」と答えていた(8か国平均=93.0%)。但し、ここでも詳細に検討すれば、役立つ「程度」に関して、ほとんどの国が「大変役立つ」という項目を最も多く選択していたのに対して、最も留学経験者の多いマレーシアのみ「少し役立つ」と答える割合が高かった(順に38.9%、46.3%)。これも、留学が就職への有利性には直結しないことを示唆するものといえる。

次に、「交流プログラム」については8か国平均では第4位の選択理由となっているが、中国、インドネシアでは「専門に役立つ」に次いで第2位、フィリピンにおいても23.0%と平均(13.8%)を大きく上回る回答を示している点は興味深い。逆に「交流プログラム」をそれほど重視していない国は、韓国、タイ、マレーシア、シンガポールといった新興工業国家群である。このことは、特に途上国からの留学においては、交流プログラム等の援助プログラム、あるいは経済的支援が留学先国ひいては留学の可能性そのものにも左右するほど重要な点であることを意味するのではないだろうか。

④ 留学指導の基準

先の留学先国としては圧倒的に「アメリカ」が推薦されていたが、指導者層が学生に留学の指導を行う際に最も高いプライオリティを持つ点は何かという問いに関しては(問19)、「国」と答える者はむしろ少なく(8か国平均14.6%)、「学科や学部、学校」(同49.4%)、あるいは「教授」(同23.1%)と答える者の方が多くなっている。これは留学先国の選択理由として「専門に役立つから」という項目が圧倒的に高かったことに関連する。即ち、このことはどの国に留学するかではなく、専門への有利性を第1として学生に留学指導をした時に、研究水準が高い学校や学科が多く、さらに専門分野において第1人者といわれるような教授のいる「アメリカ」が最も多く推薦される結果となることを示すものである。

(2) 学生の留学上の問題点

学生の留学上の問題点については(問20:表2-16)、8か国平均では、「経費」が最も高く78.5%、ついで「語学力」(63.9%)、「研究能力」(38.5%)、「生活適応力」(31.7%)、「健康」(14.5%)の順となった。

この点についても詳細に見ていくと、タイとインドネシアは「経費」よりも「語学力」の方をより問題としている点が興味深い。この両国は、英語についても日本語についても

表2-16 学生の留学の問題点 (問20)

	(%)						(人)
	経費	語学 力	研究 能力	適応 力	健康	その 他	計
韓国	77.4	60.9	43.2	13.9	16.9	0.8	266
中国	66.7	58.0	44.9	13.8	14.5	1.4	138
タイ	62.7	74.0	41.8	39.5	19.8	2.3	177
インドネシア	72.9	73.9	38.6	34.8	12.6	3.4	207
インド	93.0	48.4	32.6	25.6	5.1	2.8	215
フィリピン	92.9	68.9	35.0	53.0	22.4	4.4	183
マレーシア	74.7	69.5	27.4	55.8	7.4	1.1	95
シンガポール	88.0	58.0	44.0	38.0	16.0	4.0	50
平均	78.5	63.9	38.5	31.7	14.5	2.4	1331

文法的あるいは歴史的にみてそれほど有利性を持たない国である。

一方、「経費」について強く問題としているのがインドとフィリピンで、9割を超える。

これは、国民の経済力、即ち私費留学が容易であるかという点にも関係しているように思われる。

さらに「適応力」についても国毎にばらつきがある。即ち、韓国や中国

は平均より問題とする比率がずっと少なく、フィリピンやマレーシアは平均を大きく上回っている。これは、それぞれの国の国民性や宗教的な問題が背景となっているように思われる。

以上、回答者の留学生指導に関しては、次のように要約できる。まず、留学先国の推薦に関して、①アメリカ留学を推薦するものが圧倒的に多いこと、しかしながら②第2位の国としてはイギリスと並んで日本が推薦されていること、さらに③留学経験の無いものに日本留学を推薦する割合が高いこと、逆に④留学経験者（日本留学経験者は7%程度）は自分達の留学経験をもとにして学生への留学指導を行っていることがいえる。

次いで留学指導上の基準としては、①専門に役立つことが重視され、②専門に関する学科、学部、学校を第1に考慮した結果、アメリカを中心とした留学先国を推薦する結果となるといえる。

さらに、留学の問題点としては、①経費、②語学力が最も高い比率で指摘されているが、これを国毎にみていくと、アジア各国の経済力や教育体系（特に教授用語）が留学や留学先国選択に深く関与している姿が浮かび上がってきた。

次章では、日本が受け入れ国として実際にアジア8か国の指導者達によってどのように評価されているのか、またどのような点を改善すべきであると考えられているのかについて、最大の受け入れ国であるアメリカとの比較も加えながら検討していくことにする。

4. 日本留学に関する意見

(1) 日本の大学に対する評価

① 日本の大学の水準

欧米と比較した日本の大学の水準（問21）に関する5段階評価の結果を、右の図2-4にまとめている。この図ですぐに目にとまるのは、欧米と日本の大学の水準を「同等」とする項目（8か国平均で35.2%）と「回答困難」（8か国平均=28.3%）の項目の回答率の高さである。

こうした傾向はどのように解釈されるべきなのであろうか。「同等」という評価が最も多くなされたという点は、日本の大学にとって好ましい結果と受けとめることもできる。しかし、「回答困難」の多さとあわせて考慮すれば、「同等」という回答は、回答者たちが日本と欧米との大学水準の比較を避け、優等生的な無難な回答を選択したという解釈も

可能となる。何故なら回答者の中に実際に日本留学を経験したものは少なく、加えて後述する様に日本の高等教育に関する情報は非常に限られているからである。

そこで、回答結果の中から「同等」と「回答困難」と答えたものは除外して、実際に「高い（かなり高い、やや高い）」か「低い（かなり低い、やや低い）」かの評価を行ったものだけを抽出してみた（表2-17）。すると、中国を除くすべての国において「低い」とい

う評価の方が「高い」という評価を上回っていることがわかった。さらに、中国の他、韓国、インドネシア、フィリピンは第2に推薦する留学先国として日本をかなり好意的に評価していたが（問16）、このうち韓国とインドネシアにおける「大学水準」に対する評価は非常に厳しいものとなっている。

なかでも、日本・アメリカ双方の状況について精通し、最も的確な評価をしようとするであろう韓国において否定的な意見が多いことは、注意を要する。勿論専門分野によっても異なるであろうが、他のアジア諸国が日本の大学を十分理解し、評価しようとする状況が訪れたとき、果たして「同等」と言う評価が最も多くなるか、あるいは韓国のように否定的な意見が多くなるのか、この点については今後の検討課題としたいところである。

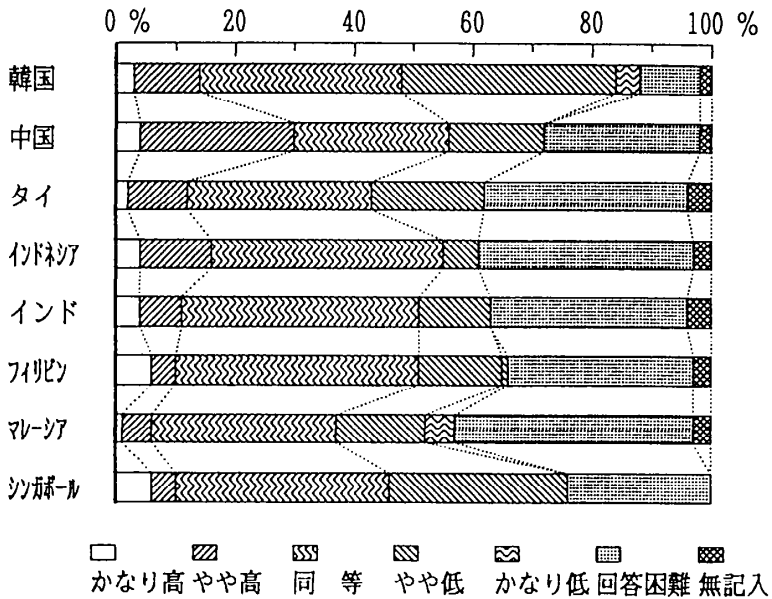
表2-17 欧米と比較した日本の大学の水準 (抜粋)

	高い	低い	計
韓国	13.9	40.3	266
中国	29.7	15.9	138
タイ	11.9	18.6	177
インドネシア	15.5	38.6	207
インド	11.2	12.6	215
フィリピン	10.4	14.8	183
マレーシア	6.4	20.0	95
シンガポール	10.0	30.0	50
平均	13.9	19.7	1331

② 日本の博士学位の有用性

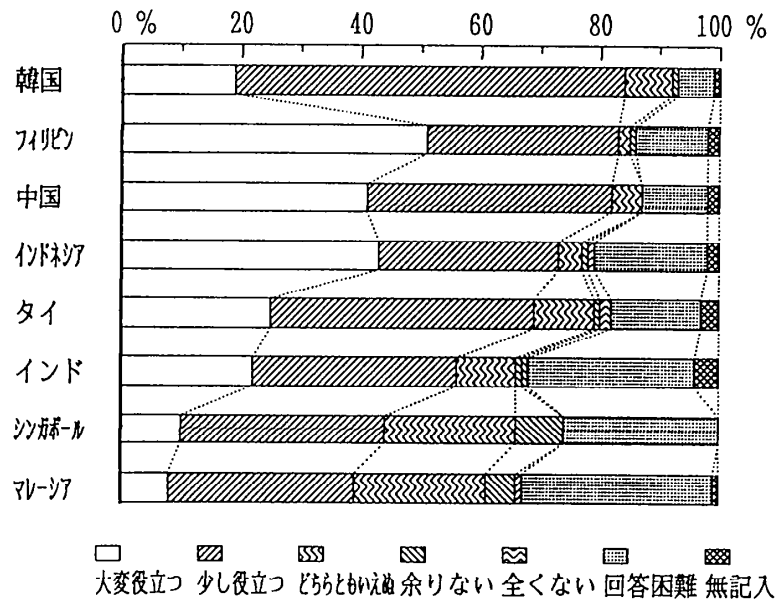
「日本の博士学位は就職・昇進に役立つか」（問25/図2-5）という質問について、「役立つ（大変役立つ、少し役立つ）」としたものが多かった国から順に挙げると、韓国、中国、フィリピン、インドネシア、タイ、インド、マレーシア、シンガポールとなる。これら8か国の評価は最も評価の高い韓国（83.8%）から最も評価の低いマレーシア（38.9%）まで実に大きな幅がある。また、「役立つ」と答える率の低い国ほど「回答困難」と答える比率が高くなっており、ここでも日本の大学について判断するに十分な知見を持たないことが窺える。さらに、日本を留学先国として推薦する比率（問16）が低かったマレーシア、シンガポールは博士学位の有用性についても「余り役立たない」とする率が他国と比べ高くなっている（それぞれ5.3%、8.0%：8か国平均=1.3%）。しかし、シンガポールでは1979年から「日本に学べ運動」が、マレーシアでは1981年から「ルック・イース

図2-4 欧米と比較した日本の大学の水準



ト政策」が展開され、特にマレーシアでは組織的な留学生の派遣も行われている。従って、調査時の1985年段階ではそれほど持たなかった日本への知見も1990年代に入って増加しているに違いない。また、これら両国に限ったことではないが、近年、日系企業のアジア各国への進出は目ざましい。従って、この質問項目はさらに時代を追って行うことによって、興味深い結果を得られるのではないかと考える。

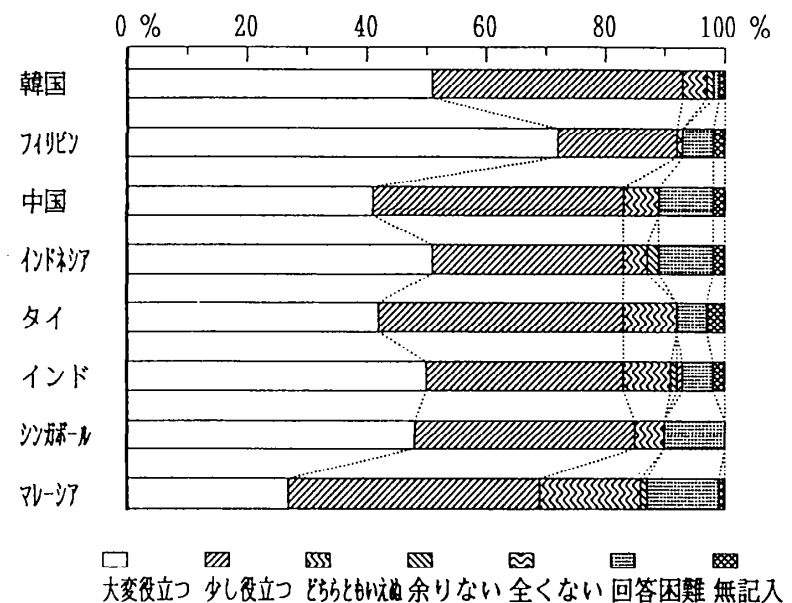
図2-5 日本の博士学位の有用性



③ アメリカの博士学位の有用性

一方、日本と同じく受け入れ大国アメリカの博士学位についても「アメリカの博士学位は就職・昇進に役立つか」(問26/図2-6)という質問を行った。その結果、日本に関しては消極的な評価を行なったマレーシア、シンガポールの2か国もアメリカの学位に対しては非常に高い評価を与えていることがわかった。また、日本の博士学位を最も積極的に評価していた韓国、フィリピンのアメリカの学位への評価の割合も日本の学位への評価よりも高くなっている。

図2-6 アメリカの博士学位の有用性



即ち、アメリカの学位は8か国か国全てにおいて高い評価が既に確立・定着しており、一方日本の学位評価については、「低い」という評価こそ少ないが、依然としてアメリカのように世界的に統一された評価がなされていないことがわかる。

④ 日米の博士学位の水準

この点に関連して、さらに日米の博士学位の価値の高さを直接的に比較する問も設けた(問27)。その結果、8か国平均としては「アメリカが上」とする回答と「同等」という

割合が拮抗しているが、国別にみると、韓国を例外として、日本留学に消極的な評価をした国ほど、アメリカの博士学位の価値を高く評価しているという傾向が見られた（表2-18）。即ち、アメリカの博士学位の方に価値があるという回答を最も高い比率で選択した国は、韓国、タイ、マレーシア、シンガポール、インドの5か国であるが、韓国を除く4か国は先の日本の博士学位の有用性においても比較的低い評価を行っている。逆に、「同等」という回答が「アメリカの学位の方が高い」という回答を上回った国は中国、インドネシア、フィリピンであるが、これらの国は日本の博士学位の有用性についてもより積極的な評価を行っている。

表2-18 博士学位の価値の高さの比較（問27）
（％）（人）

	アメリカ が上	同等	日本 が上	回答 困難	無記 入	計
シンガポール	68.0	20.0	2.0	8.0	0.0	50
韓国	51.5	26.7	5.3	15.0	1.5	266
マレーシア	49.5	27.4	3.2	17.9	2.1	95
タイ	42.4	31.1	4.5	18.1	4.0	177
インド	42.3	27.4	3.7	24.2	2.3	215
フィリピン	30.6	44.8	6.6	15.3	2.7	183
インドネシア	22.7	48.8	9.7	16.9	1.9	207
中国	21.0	44.2	10.1	22.5	2.2	138
平均	38.8	34.9	6.0	18.0	2.4	1331
日本留学	28.6	36.5	15.9	15.9	1.6	63

ていたにもかかわらず、アメリカとの直接的な比較となると、絶対的にアメリカ留学の価値を高く評価している。これは、韓国がこれまでの日本留学に関する回答に「役立つ」という点では高い数値となるものの、その程度において、「大変役立つ」という選択肢ではなく、「少し役立つ」という選択肢を選ぶ比率が高かったこととも関係するものであろう。

この韓国の回答に顕著に現われているように、日本の大学、特に学位の水準はそれ

自体かなり高いとは評価されるが、アメリカの博士学位と比較した場合、やはりアメリカの学位とはかなりの格差があるものと認識されているということが出来る。

ここで、日本留学組（63名）の日本の博士学位に関する価値認識を抽出してみると（表2-18下段「日本留学」の項）、やはり「日本が上」と回答する人の割合が増加している。しかし、それでもなお、「アメリカが上」とする割合の方が高く、ここからも日本の学位水準とアメリカの学位水準との格差が示される。

⑤ 日米の博士学位の取得の難易度

次に、日本の博士学位の問題点のひとつとして「取得が困難」であることが指摘されていることを考慮して、「日本の学位はアメリカの学位と比較して取得が容易であると思うか」という問いを行った（問24）。その結果、8か国平均で「大変取り易い」が2.0%、「やや取り易い」が6.8%、「どちらともいえない」が20.4%、「やや取り難い」が18.2%、「大変取り難い」が8.6%であった。各国別にみると、韓国がやや日本側が「取りやすい」と答えている人の比率が高くなっているものの（22.9%）、それでもなお、日本の学位は「取りにくい」との回答が大勢を占めている。なお、この設問は回答不能と答えたものの比率が最も高くなっている（8か国平均=41.9%）。

(2) 日本留学の評価

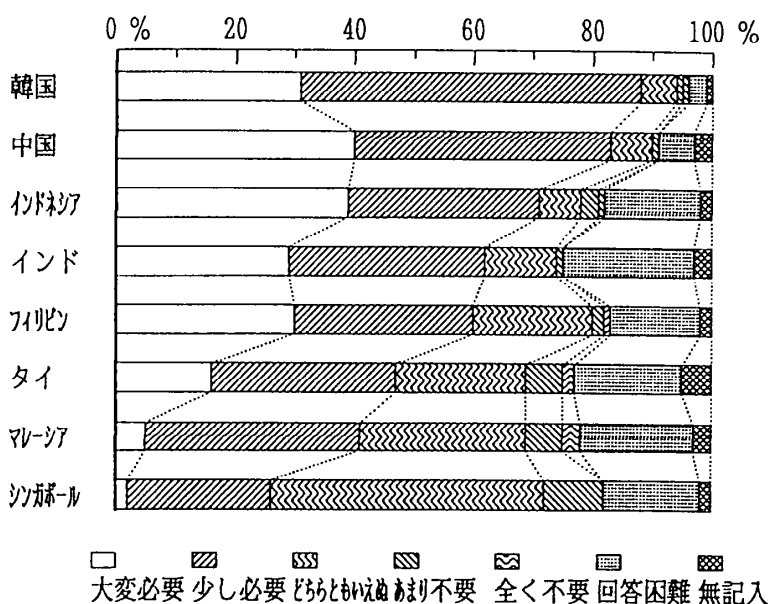
① 日本留学の必要性

日本留学の必要性に関して、「あなたの専門分野において日本留学は必要だと思うか」

という形式の質問を行った（問22）。この結果は図2-7に、必要とする度合いが高い国から順に示している。8か国ともに「必要でない」とする数こそ少ないが、ここでも

「必要」と明言するものに関しては非常に大きなバラツキがあることが分かる。上から順に見ていくと、まず日本留学を必要とする割合が過半数を超えているのは、実際に日本に留学する人が多く、かつ日本にも近い韓国（88.0%）、中国（83.4%）の2国が挙げられる。次いでインドネシア（71.0%）、インド（61.9%）、フィリピン（60.2%）の順である。しかし、タイ（46.9%）、

図2-7 日本留学の必要性



マレーシア（41.1%）は日本留学を必要とする割合が過半数を割っており、さらにシンガポールに到っては26.0%という極めて低い数値を示している。また、この問においても、先の日本の博士学位の有用性の評価における回答傾向と同様に、日本留学を必要とするという回答が少ない国ほど「どちらともいえない」と答える比率が大きくなっている。こうした傾向は、日本留学の必要性に対する婉曲的な否定と受け止めることもできそうだ。

② 日本留学の有用性

前章における、「留学は昇進に役立つか」（問18）という一般的な意見を尋ねる問いに関連して、特に日本を対象とした、「日本留学は就職・昇進に役立つか」という問いも設けた（問23）。ここでは比較のために2つの問に対する結果の表を列挙することにする（表2-19、表2-20）。2つの表を比較すると、日本留学の有用性については（表2-20）、「役立たぬ」とする率こそ少ないが、一般的な留学の有用性についての意見では「大変役立つ」という回答が8か国平均で56.6%と過半数を超えているのに対し、日本留

表2-19 留学（一般）は就職・昇進に役立つか（問18）

	（%）						（人）
	大変役立つ	少し役立つ	どちらとも	余り役立たぬ	全く役立たぬ	無記入	計
韓国	49.6	44.4	3.8	0.4	0.4	1.5	266
中国	47.1	45.7	4.3	0.0	0.0	2.9	138
タイ	50.8	41.2	3.4	0.6	0.0	4.0	177
インドネシア	64.7	25.6	7.2	0.5	0.0	1.9	207
インド	53.0	39.5	6.0	0.0	0.5	0.9	215
フィリピン	84.2	15.3	0.0	0.0	0.0	0.5	183
マレーシア	38.9	46.3	11.6	0.0	0.0	3.2	95
シンガポール	54.0	42.0	4.0	0.0	0.0	0.0	50
計	56.6	36.4	4.7	0.2	0.2	1.9	1331

表2-20 日本留学は就職・昇進に役立つか(問23)

	(%)							(人)
	大変役立つ	少し役立つ	どちらとも	余り役立つため	全く役立つため	回答不能	無記入	計
韓国	15.4	67.7	10.2	0.8	1.1	3.8	1.1	266
中国	34.8	47.1	6.5	0.0	0.7	7.2	3.6	138
タイ	21.5	49.7	9.6	2.3	0.6	13.0	3.4	177
インドネシア	39.6	36.2	6.8	0.5	1.0	14.5	1.4	207
インド	20.5	38.1	14.0	1.9	0.5	21.4	3.7	215
フィリピン	45.9	36.6	6.6	1.1	0.0	7.7	2.2	183
マレーシア	6.3	31.6	34.7	3.2	1.1	21.1	2.1	95
シンガポール	2.0	24.0	46.0	10.0	0.0	16.0	2.0	50
計	26.1	45.7	11.7	1.5	0.7	12.0	2.3	1331

学の有用性となると「大変役立つ」と答えるものの割合が26.1%と低くなっている点が注目される。各国別にみても、どの国も一様に「大変役立つ」とする比率が減少しているが、特にマレーシア、シンガポールの減少は著しい。この2か国の回答の最も多くがむしろ「どちらともいえない」と答え、また、「回答困難」という比率も高くなっている。こうしたことは、回答者たちの中に、「留学」それ自身は就職や昇進に有利に働くけれども、「日本留学」となると、まだ一般的ではなく欧米留学ほどの有用性は認められないという認識があることを示唆するものである。

③ 回答者の日本留学希望の程度

まず、指導教官自身が日本留学を希望するか(問29)、と尋ねたところ、8か国平均で7割が「希望する」と答えた。回答者自身の希望については、最も希望が少なかった国においても過半数を超えており(54.0%：シンガポール)、留学先国としてかなり好意的な評価を受けているといえよう。

希望する理由(問29-1)としては、「自分の専門に有益」(8か国平均=72.4%)及び「日本一般に関心がある」(同71.4%)が最も多く挙げられている。また、韓国と中国においては「近距離」という点も希望する理由として挙げている(それぞれ43.4%、38.0%、8か国平均=28.9%)。

また、希望しない理由(問29-2)については、「高経費」(8か国平均=22.0%)、「自分の専門に有益でない」(17.2%)が多く選択されていたが、「その他」(68.7%)として年令的な問題や日本語の問題を挙げるものもあった。

(3) 日本留学に関する指導

① 日本留学の重要点

日本留学に関して重要とされる点に関する問いにおいては(問28)、8項目(日本語、生活力、研究力、健康、経費、習慣の違い、制度の相違、その他)から3項目を選択する形を取った。その結果、8か国全体の傾向として「経費」(8か国平均=76.6%)と「日本語」(同71.8%)を特に重視していることがわかった(表2-21)。

ここで項目別にみると、「日本語」に関して各国毎に認識の幅があることがわかる。即ち、同じ漢字文化圏の韓国・中国は5割程度しか重要としておらず、むしろ「研究力」を「日本語」と同等以上に考えているが、非漢字圏のなかでも英語圏であるインド、フィリ

表2-21 日本での留学に関して重要とされる点(3つ:問28)

	経費	日本語	研究能力	制度の相違	適応力	健康	習慣の相違	その他	計
韓国	86.5	55.3	51.5	8.3	22.2	16.2	9.0	5.3	266
中国	71.0	47.1	58.0	25.4	23.9	15.9	5.8	10.1	138
タイ	65.5	76.8	36.7	29.4	24.3	6.8	5.1	12.4	177
インドネシア	77.8	62.3	34.8	35.7	33.8	3.9	12.6	10.1	207
インド	83.7	85.6	17.7	34.4	16.7	0.9	3.7	7.4	215
フィリピン	84.7	90.7	16.4	35.0	35.0	6.6	9.3	1.1	183
マレーシア	53.7	88.4	21.1	32.6	41.1	1.1	9.5	4.2	95
シンガポール	56.0	90.0	16.0	42.0	26.0	4.0	4.0	4.0	50
計	76.6	71.8	33.8	28.0	26.8	7.7	7.7	7.1	1331

ピン、マレーシア、シンガポールの4か国では9割近くが「日本語」を重視している。

「経費」と「語学力」の2点を重視するという傾向は、前章における国を限定せずに尋ねた、「学生の留学の問題点(問20)」においても同様に見られるものであった(表2-16)。ただし、こちらの問いでは、先の英語圏4か国の「語学力」に関する問題点は日本語程強く意識されていない(インド48.4%、フィリピン68.9%、マレーシア69.5%、シンガポール58.0%)。当然のことながら、「語学力」の問題はアジア8か国それぞれの国の事情及び留学先国との関係によって多少するが、特に英語圏国家にとって日本語は最大の阻害要因であり、受け入れ国日本が抱える今後の重要な検討課題の一つである。

② 日本留学の指導

日本は1983年に打ち出したいわゆる「留学生10万人増計画」において留学生を受け入れる比率は、学部学生6割、大学院学生3割程度の割合とすることを示しているが、実際に送り出す側の指導者層はどちらの段階での留学を勧めようとしているのであろうか。この点については「大学院生に日本留学を勧めるか」(問30)及び「学部生に日本留学を勧めるか」(問31)という設問から検討することにする。回答結果によれば、日本側の期待とは逆に、大学院生に対して「勧める」と答えている割合が8か国平均で81.0%となっているのに対し、学部生に対しては、「勧める」という者は8か国平均で32.2%に過ぎず、逆に「勧めない」とするものが過半数を超えた(63.2%)。前章における学生に留学(一般)を勧める段階に関する意見においても(表2-12)、学部レベルより大学院レベルの留学を勧める意見が大勢を占めており、これは単に日本への留学に限られた意見ではないことがわかる。

そこで、「大学院生に日本留学を勧める理由」(問30-1)、「勧めない理由」(問30-2)も尋ねたが、「勧める理由」において最も重視されているのが、「研究水準の高さ」(76.3%)であった。この点についても、先に留学先国の選択理由(問16-1)において「専門に役立つ」事が最も高く選択されていたことと矛盾しない。

一方、「大学院生に日本留学を勧めない理由」としては、第1に「日本の教育に対する情報不足」が挙げられた(8か国平均=55.1%)。次いで「高経費」(同28.0%)、「他国を勧めたい」(22.4%)、「学位取得が困難」(10.8%)の順となっている。「日本語」の問題を選択肢の中に入れていなかったためと思われるが、「その他」が35.1%と2番めに高い比率になった。(その他を選択した者の中には「日本語の問題」と但し書きする人

もあった。)

さらに、学部生に対しては、「日本留学を勧めない理由」(問30-1)を尋ねたが、これは日本留学というよりも、学部段階での留学そのものが「時期尚早」という理由によるものが最も多く(8か国平均=71.8%)、次いで「英語圏への留学が有利」(同36.5%)となっていた。

日本留学のみならず一般的な留学において学部レベルより大学院レベルの留学をより多く推薦しているということは(表2-12)、次のような理由によるものと思われる。即ち、本調査が大学の指導者層を対象とするものであるが故に、「専門分野の研究」に役立つような留学が最も重要とされ、それが最も有効に達成し得る段階が大学院レベルでの留学であると認識されるのであろうと推察する。しかし、留学の目的は教授たちが考えるような、研究あるいは研究者となるためのものにとどまらず、一般の企業人となったり、語学の学習のためというものも当然有り得る。従って、大学の指導者層以外の有識者の留学観を明らかにすることも今後必要となると考える。

5. 日本の留学生政策への要望

(1) 日本が取るべき改善策

留学生のために取るべき改善策について(問32)、設定した13項目の中から、特に回答率の高かった5項目を表2-22に示している。

表2-22 留学生のためにとるべき日本の改善策(問32)
(%)

	奨学金の数の増加	情報を増やす	奨学金の額の増加	英語の講義の増加	日本語コース増設
韓国	83.8	58.6	63.2	13.2	19.9
中国	74.6	78.3	48.6	29.0	43.5
タイ	81.4	71.2	44.6	59.3	39.5
インドネシア	73.9	83.6	62.3	55.6	64.3
インド	88.8	88.2	61.4	61.9	60.5
フィリピン	83.6	80.9	68.3	74.9	59.0
マレーシア	87.4	80.0	50.5	58.9	58.9
シンガポール	80.0	76.0	38.0	62.0	62.0
平均	81.9	76.3	57.6	49.0	48.2

前章において、日本留学の問題点は「経費」と「語学力」であるということが明らかにされたが、改善策の第1が「奨学金の数を増やして欲しい」という意見であった(8か国平均=81.9%)。また、「奨学金の額を増加して欲しい」という意見も3番目に挙げられ、留学における経済的問題の重要性が指摘されている。

また、「語学力」に関する要望としても「英語の講義を増加して欲しい」、

及び「日本語のコースを増加して欲しい」という要望が第4位と第5位に挙がっている。どちらの項目においても英語を公用語とする国々(及びインドネシア)の比率が高くなっており、ここでも語学の問題の克服がこれらの国家群からの日本留学の数的増減の鍵を握ることが窺える。

経費、語学力以外での要望の第1は、これも前章で再三述べてきたように「日本留学に関する情報をもっと供給して欲しい」という点で、語学に関する問題より高い比率で選択されている。また、これを各国別にみると、インド、フィリピン、マレーシアなど日本留学の意見において「回答困難」と答える比率の高かった国々がより情報を必要としていることがわかる。

(2) 日本語教育の改善策

日本語の問題が非漢字圏諸国、特に英語圏諸国からの日本留学にとって重要な問題であることが既に明らかにされたが、日本語教育に関して具体的にどのような政策が取られるべきなのであろうか。この点について（問32-1）、8か国平均では、「日本語教育専門家の養成」（67.7%）、「視聴覚教材の充実」（63.7%）、「大学内での日本語学科の創設」（63.3%）、「日本語学習機関の増設」（59.6%）の順で必要とされた。特に、韓国や中国など日本語教育の専門家が既にある程度養成されている国以外の国での「専門家養成」の要望度は高く、日本語教育の改善は調査時点ではこれから始まるという印象がある。これが現在どの程度充実されているのか、また、それを8か国の人々はどの程度満足しているのか、この点についても今後検討していきたいと考える。

(3) 日本の情報の改善策

問32で情報を増やすことが必要であると答えた人を対象に、それではどのような情報が必要なのかを尋ねた（問32-1）。その結果を表2-23に示している。回答中最も多かったのは「奨学金」に関する情報であった。この点も、やはり留学最大の問題である「経費」に直結するものである。次いで、「日本の高等教育制度」、「個々の大学」、「学位取得」に関する情報が必要とされた。

また、驚くべきことには留学に関する種々の情報のみならず、「一般的な教育制度」という日本の教育に対する導入部的な情報についても、韓国（30.1%）、中国（54.6%）以外の国の7割前後が必要と答えている（8か国平均は65.3%）。こうした数値にも日本の教育制度が如何に海外の人々に知られていないかが表れている。

表2-23 必要な情報の種類（いくつでも）
（問32-1/問32で「情報を増やす」と答えた人）

	(%)								(人)
	奨学金	高等教育制度	個々の大学	学位取得	教育制度	生活	日本社会特性	その他	計
韓国	88.5	57.1	75.6	44.9	30.1	36.5	17.9	3.2	156
中国	76.9	75.9	69.4	48.1	54.6	47.2	39.8	3.7	108
タイ	88.9	81.7	80.9	68.3	72.2	64.3	45.2	3.2	126
インドネシア	90.8	85.5	83.8	80.9	78.6	72.3	59.5	3.5	173
インド	95.7	92.1	81.6	77.4	67.9	65.8	46.3	8.9	190
フィリピン	93.2	87.8	86.5	66.9	77.7	73.0	65.5	8.1	148
マレーシア	92.1	92.1	86.8	65.8	76.3	77.6	65.8	7.9	76
シンガポール	92.1	97.4	92.1	60.5	73.7	73.7	60.5	2.6	38
計	90.2	82.2	81.2	65.7	65.3	62.5	48.2	5.4	1015

(4) 日本留学の将来予測

最後に「将来日本への留学生は増えるか」という質問を行った（問33/図2-8）。

その結果、8か国全てにおいて「少し増加」という予想が最も多いことがわかった（8か国平均=51.2%）。これを「大幅に増加」（同26.4%）との回答と合わせれば、8割り近くが「増加」を予測していることになる。逆に、減少するという予想は8か国平均で1割りにも満たなかった。ここに受け入れ国としての日本への期待の程度を知ることができる。即ち、8か国の回答者たちの多くは日本の留学生受け入れの増加を期待するもの

の、欧米留学との関係において情報量が少ない等の様々なマイナス要因があることを考慮して、「少し増加」という予測を選択する結果になったのであろうと考える。

国毎にみると、やはりこれまで日本留学に関して消極的意見が多かったマレーシアとシンガポールは、「減少」という意見こそわずかであるものの、「大幅に増加」という意見も非常に少ない。これら両国は「日本に学べ」や「ルック・イースト」のような日本重視の政策を打ち出しているとはいえ、依然他国に比べて欧米志向が強いといえる。

また、この問いに関連して日本留学増減に関する判断の理由も尋ねたが(問33-1)、日本の「国際的地位」(50.2%)、「研究水準」(46.0%)を判断理由としたものが多かった。なお、マレーシアでは過半数が「自国の政策が適切かどうか」を判断理由としており(54.7%：8か国平均=27.8%)、ルック・イースト政策の影響があると推測される。

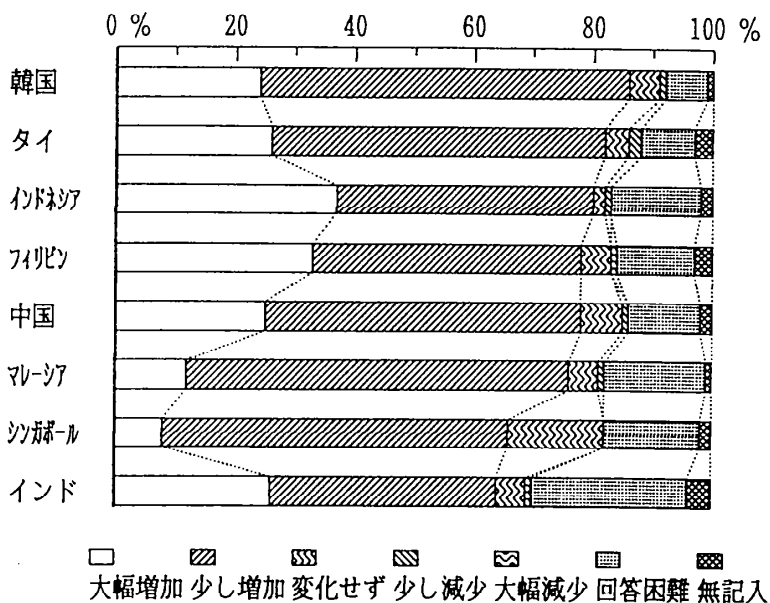
以上、日本への留学に関する教授層の意見を尋ねたが、これを要約すると、まず日本の大学、博士学位の水準については、ある程度の評価を受けてはいるものの、8か国において評価に大きな幅があり、かつアメリカと直接比較した場合にはやはり格差が認められた。

次に、日本留学の必要性についても、距離的に近く、言語的にも共通性の多い(漢字、文法)、韓国、中国においては必要度が高いが、一方で同じアジアの中でもマレーシア・シンガポールのように旧植民地で、かつ英語教育が重視されているような国においては日本留学の必要度は低いものとなっている。

それでは日本留学のどこに問題があるかということであるが、この点については一般的な留学の指導の際にも同様に挙げられた、「経費」と「言葉」の問題が挙げられている。特に「日本語」という点において、マレーシア、シンガポール、インドといった旧英連邦英語圏諸国の問題意識は高く、それが日本留学への消極的な見解の一因となっているものと思われ、この阻害要因をどう克服するかが重要である。

さらに、欧米留学と比較した場合の日本留学特有の問題として最も重要なのは、「情報」の問題である。日本の学位や留学に関する問いにおいて「回答困難」という回答が非常に多かった点も、日本留学については日本の高等教育に関する情報不足に起因する問題である。欧米留学に関する情報については、回答者の多くが経験していることもあって、比較的容易に入手できようが、日本留学に関する情報は、前述のように回答者の7割が、留学に関する情報だけでなく、まずもって一般的な日本の教育事情に関する情報を必要とする状態であり、今後は送り出し国・日本相互の相当な努力が要求されるのである。

図2-8 日本留学増減予測



第3部 日本の留学政策への提言

久保田 優子

質問紙の最終頁に日本留学への提言を、(1)政府の留学生政策に対する提言、(2)個々の大学に対する提言、(3)日本の大学教授に対する提言として、自由に記述してもらった。そこで本章では、日本留学について8か国の大学教授が行なった提言を質問紙の他の回答と関連させながら総合的に分析することにしたい。まず、各国からの提言を具体的な事例に即して考察し、次に各国からの提言を総合的に検討する。提言は長い文章や箇条書きなど各人各様の書き方がなされていたが、提言の内容を簡略にまとめたものが表3-1「日本政府の留学生政策に対する提言」、表3-2「個々の大学に対する提言」、表3-3「日本の大学教授への提言」である。提言の大部分は英語で書かれていたが、韓国の教授7人、および中国の教授2人は日本語で記述している。

1. 各国からの提言－具体的事例

ここでは、8か国の大学教授から寄せられた提言のなかで、留学生の受け入れについてその国の代表的な提言を各国2～4人ずつ取り上げて、提言内容を忠実に日本語に訳して掲載する。以下では、(日本政府の留学生政策への提言)を(政策)、(個々の大学に対する提言)を(大学)、(日本の大学教授への提言)を(教授)と略して記述する。ここで取り上げた教授のプロフィールについて、その専門、職位、性別、年齢、留学経験(留学先、留学期間、留学中に取得した学位)の順で記載した。

(1) 韓国

- ・ 医学、Professor・大学病院長、男性、63歳、留学経験(アメリカー20か月、スウェーデンー1年間)

(政策) ①留学生に日本に対する良い感情をもたせるような、長期間の留学のための思い切った投資をすべきである。②外国人学生に対して、もっと積極的に門戸を開放すべきである。外国人学生が留学の時期を決めるのは日本次第である。③外国人留学生に対する奨学金の件数や金額を増加すべきである。それは、外国への援助ではなくて投資なのである。④外国に学習や研究のための財源をだしてほしい。そうすれば、日本は教える以上に多くのことを学ぶだろう。

(大学) ①隣国の大学との共同研究を進めてほしい。アジアは現在別々の人々ではなく、ひとつの家族である。(EECのように) ②お互いに学生とスタッフの交換をしてほしい。双方向の交換を学ぶべきである。③国際的なアジア研究をやりたいなら協力を求めてほしい。

(教授) ①留学生と、腹を割った親身の議論と教育をしてほしい。留学生は、よりよい新鮮なアイデアを持っているから、新しい発想の源泉となるだろう。②留学生についての体験を政府に伝えてほしい。

・ 教育学、Associate Professor、男性、44歳、留学経験（アメリカー3年ー博士号取得）

（政策）日本はアメリカと比べて、外国から経済的利益を得ることだけを重視し、教育を共有することを大切にしていなかった。しかし、これからは先進国として、韓国を含めて発展途上国と文化と産業技術を共有するよう門戸を開くべきである。奨学金、教育システム、入国手続きに関する情報をもっと提供してほしい。

（大学）日本の個々の大学についての情報がほしい。韓国のたいていの若者は日本人を知らない。だから、日本の大学についてのカタログを読む機会がない。外国人学生には英語で書かれたカタログが必要である。

（教授）日本人の教授は優秀であると思うが、上記の理由でだれがだれかわからない。最後に、韓国人学生のために情報システムを改善し財源的援助をすべきである。

・ 農学、Asisstant Professor、男性、33歳、留学経験（日本ー5年半ー博士号取得）

（政策）①東洋圏からの留学生をもっと受け入れてほしい。②韓国の場合、日本文部省の奨学生の受験資格が大学の助教か研究所の研究員でなければならない。その要件は必要ないと思う。だれでも試験に合格すれば行けるようにしたほうが公平である。③自費留学生のために大学の保証の下でアルバイトの機会を与えてほしい。④文部省留学生のアフターサービスを増やしてほしい。

（大学）①帰国した留学生同士にも交流をもてるように、その大学で留学した留学生の住所、名前、職場、職位などを入れた名簿を国別、年度別、学部、学科別に分類してつくり、別に各国からの通信や近況をのせるような新聞をつくったらいと思う。

②帰国した留学生の再招聘を各大学でも推進したらいいと思う。

（教授）①大学院生にも時間の許すかぎり学部学生の講義を多く聞くようにする。②アメリカで勉強した人は大学院生も基礎科目をすべて受講しなければならないから全般的な基礎が堅固で理論が強いといわれる。日本の場合、一つの狭いことについて重点的に研究するためそれについては詳しいが、周辺についてはよくわからないこともある。また、応用には強いが理論が弱いとよくいわれる。これらを両方とも考慮に入ればよい。（以上、提言は日本語で記入されている。）

(2) 中国

・ 薬学、（職位不明）、女性、31歳、留学経験なし

（政策）私の大学では多くの学生が留学を望んでいる。その1つは日本です。しかし、もっとも大きな問題は外国に行くための費用です。もし、日本が留学経費を減らしてくれるなら、将来日本留学生の数は増加すると思います。

（大学）大学はどの分野でも設備の充実が必要です。進んだ実験装置とこれを使用できる十分な能力をもったスタッフが必要です。

（教授）学生を成功に導くかどうかは、教授の能力にかかっています。教授はたとえ有名でなくても学生に有用な指導をすることができます。教授は自分で実験装置を開発することができないような年寄ではだめです。

・ 薬学、（職位不明）、男性、24歳、留学経験なし

（政策）他の国と友好関係を保ち、留学生と外国人研究者を受け入れてほしい。留学生のための奨学金を増やしてほしい。

(大学) 研究環境や設備が立派な大学は他の多くの外国人学生にとっても魅力的だと思う。さらに、種々のメディアによる大学についての情報の提供は外国人学生にとっても重要です。

(教授) 教授は専門領域において優秀であるべきであり、研究分野において一定の水準を保持すべきである。実験技術は新しければ、実験装置は新しくなる。もちろん、留学生には親切な方がよい。

・ 教育学、Professor、男性、73歳、留学経験（スウェーデン－2年半、フランス－半年）

(政策) 中国人教授をもっと日本へ招聘・交換してほしい。

(大学) 九州大学は世界でも有名である。我々の大学と、教育学部と関係を結びたい。

(教授) 私は、歴史教育の教授であり、研究所長である。日本を訪問したい。

・ 医学、助手、男性、36歳、留学経験（日本－2年間）

(政策) 途上国に対して奨学金の留学生を少し増やすことが望ましい。

(大学) 日本の大学が奨学金の留学生を募集するなら、それについての情報を知せていただくこと。

(教授) 帰国してからもとの先生方との連絡を強めること。また、適当な時期に互いに訪問しあうことが望ましい。以上3つの目的は自国を発展させるために優れた技術を勉強したいのです。（以上、日本語で記述されており、原文のまま記載した）

(3) タイ

・ 農学、Associate Professor、男性、47歳、留学経験（フィリピン－2年間－修士号取得、アメリカ－2年半－博士号取得）

(政策) 日本で留学するための奨学金を外国人にもっと提供してほしい。

(大学) もし、アカデミックプログラムが英語で行われるなら、外国人留学生はたやすく入学するし、学部段階においても魅力的なものとなる。

(教授) 一般に、日本の大学教授の能力はきわめて高い。態度は大体においてよい。しかし、英語の能力が特に会話において低いことがしばしば見受けられる。

・ 経済学、Associate Professor、男性、58歳、留学経験（アメリカ－2年－修士号取得、オーストラリア－半年、インド－半年）

(政策) 外国人学生にもっと門戸を開いて、そして授業料や経費を下げてほしい。

(大学) 英語は我々にとって第二外国語であるから、英語で授業をしてほしい。そして奨学金を増やしてほしい。

(教授) 教授は留学生に興味をもつべきであるし、彼らに寛大であるべきだ。

・ 教育学、Associate Professor、女性、51歳、留学経験（アメリカ－1年半－修士号取得）

(政策) 発展途上国に対して広い心をもってほしい。寛大な心で、利益を期待しない誠実な援助をしてほしい。

(大学) 一般に、水準は普通である。ナショナリズムを減らして、他の国の文化、習慣、言語、生活のスタイルを理解するようになってほしい。

(教授) たいいていの大学教授はとても賢明で有能であるが、発展途上国の状況に合うような教授法を採用するか教授法を改善すべきである。

(4) インドネシア

- ・ 教育学、Lecturer、男性、48歳、留学経験（ニュージーランド－10か月、アメリカ－1年半－修士号取得）

（政策）外国での日本語教育の機関をつくるための組織づくりや資金の援助をしてほしい。日本で勉強するための奨学金を外国人学生にもっと提供してほしい。

（大学）外国の大学との関係をもっと発展させてほしい。

（教授）大学講師の交換を促進して、教鞭または研究させてほしい。

- ・ 水産学、Senior Lecturer、男性、40歳、留学経験（日本－10年間－学士号、修士号、博士号取得）

（政策）外国人学生についての情報をもっと日本人に提供すべきである。そうすれば、日本人は外国人学生について適切なイメージをもつことができ、差別することなく留学生を受け入れることができる。

（大学）大学は、留学生の受け入れにおいて、彼または彼女の科学的、学問的個々の能力にもとづいて行うべきであり、単に入学試験のみでなく、個々人の態度、行動、将来性をも考慮すべきである。

（教授）教授は留学生に特別の注意を払うべきである。なぜなら、彼らは日本のシステムを理解し取り入れることが困難であるばかりでなく、日本のアカデミックな環境にも慣れていないからである。

(5) インド

- ・ 科学・農学、Professor、男性、62歳、留学経験（英国－3年3か月－博士号取得、アメリカ－2年半）

（政策）政策はもっと積極的であるべきだ。アメリカの政府のように日本政府も大使館を通じて日本に留学するのによい学生を選ぶべきである。また、興味のある人には豊富な短期のコースを提供すべきである。

（大学）日本の大学は多くのインドの教授を日本の大学に講義や研究のために招聘することができる。日本の大学は、インドの大学に適切な参加者を送ることによって様々なセミナーやシンポジウムを定期的に行うことができる。これらの参加者は少なくとも9～12か月以上滞在とする。

（教授）日本の産業技術や知識はインドにとって非常に役に立つ。多くのインドの教授はもし施設が使用可能であり、例えば地方の無料宿舎が使えるとかであれば、交通費は教授自身が用立てるであろう。代わりに、教授は大学で教えることができる。このプログラムの期間は2週間から2か月くらいである。これら歴史のある二国間の思想やアイデアの交換のためにインドー日本学会といった機関誌をもった媒体が設立されるとよい。

- ・ 法学、Leader、男性、45歳、留学経験なし

（政策）私は日本の法体系についてほとんど知らないし、二国間での法律学者の交換プログラムもほとんど知らない。しかし、日本とインドの法的社会的体系の比較が双方の大学において研究されるならとても望ましいことである。したがって、日本の政策は日本における留学生の研究にとってよりよい思考をもたらすであろう。

(大学) バナラスヒンドゥー大学やデリー大学などの学者はインドにおける社会問題の解決のために日本の法体系の研究のために日本に招聘されるべきである。個々の大学からの奨学金が提供されるべきである。

(教授) 日本の政策は、共通の関心領域におけるインドの学者による研究が日本にとっても役に立つことを認識し日本の法学部への招聘フェローシップを提供すべきである。

(6) フィリピン

・ 水産学、Professor、男性、44歳、留学経験（日本－6年半－修士号、博士号取得）

(政策) アジアでの大学院レベルの奨学金の件数を増やしてほしい。日本へ行く前に大学院レベルへの入学を認めてほしい。

(大学) 大学院レベルの入学試験を英語で実施してほしい。日本語コースに日本文化と社会のトピックを含めて続けてほしい。日本－留学生クラブを奨励してほしい。

(教授) 留学生の出身大学について知ってもらうために日本の大学教授を一学年度の間出身大学に送ってほしい。海外の教授を日本の大学に一学年度の間招聘してほしい。このことは、自分の学生が日本での大学院留学のために準備するためのたすけになる。

・ 教育学、Associate Professor、男性、44歳、留学経験（アメリカ－1年1か月）

(政策) 日本は先進国であるから、発展途上国特にアジアに援助すべきである。日本の進んだ技術や科学は共有されるべきであり、それにより我々は輝かしい幸福な世界にすることができる。

(大学) 学生の交換プログラムを促進しなければならない。さらに、奨学金や英語で授業を行う大学を増加させなければならない。また、日本に留学するための世話をする機関をもっと支持し、最新の図書館や研究施設が設置され、大学間の姉妹関係の締結が促進されねばならない。

(教授) 大学の様々な側面に関するアイデアの交換、教育に関する概念や技術、態度の交換、専門領域に関する組織、アジア諸国に配布するニュースレターの主導、財団の後援により国際的なフォーラムや会議の指揮、休暇の間にそれぞれの国で相手を受け入れることなどの促進ができる。

(7) マレーシア

・ 水産学、Lecturer、男性、29歳、留学経験（英国－1年8か月－修士号取得）

(政策) 日本政府はすべての大学院レベルで英語の使用を促進してほしい。進んだ科学的な教育は、発展途上国においては英語以外のことばではほとんど役に立たないし、日本語のコース終了者は帰国後最も高いレベルでの情報交換において障害となる。

(大学) もしかかなり多くの留学生が含まれているなら専門的な大学院レベルでの授業は英語で行ってほしい。留学生の面倒をよくみる教授にはより高い給料が支払われるべきであり、留学生の出身国を訪問する費用を大学が出すべきである。

(教授) 外国人は劣っているのではないとの認識をもつべきであり、留学生のもつ大きな文化的宗教的差異を認識すべきである。例えば、イスラムは酒を飲むことができないから学生にお酒を飲むように期待すべきでない。さらに、日本に長くいればいるほど自国に貢献できないから、留学生はできるだけ早く帰国できるように努力をすること

を認識すべきである。

- ・ 経済・経営学、Professor、男性、48歳、留学経験（カナダ－1年10か月－修士号取得）
（政策）もっと奨学金を提供してほしい。来日前に日本語学習の機会がもてるようにしてほしい。

（大学）コースや設備、連絡をとるべき人についての情報を提供してほしい

（教授）マレーシア大学からの教授と協定を結んでほしい。日本留学に興味をもっているマレーシア人学生のために、マレーシアで講演を行なってほしい。

(8) シンガポール

- ・ 化学、Associate Professor、男性、年齢不明、留学経験（オーストラリア－6年8か月－修士号、博士号取得、英国－1年半）

（政策）政府の政策は公平で望ましいものであったと思う。多くのシンガポール人学生が日本の奨学金で日本留学できたことに感謝していることを知っている。そこで、受けるに値する学生にもっと奨学金をだしてくれればもっと感謝するだろう。

（大学）日本のたいていの大学は留学生に対して好意的であるばかりでなく、オープンであると聞いている。もし、留学生はことばをマスターすれば自国にいるのと同じで何の問題もないだろう。

（教授）日本の大学教授は専門分野で評価が高いばかりでなく、留学生にとっても温かいし親切である。もし、留学生が日本にいる間だけでなく、帰国後も親切にしようとする気持ちがあつたならば素晴らしいことである。

- ・ 教育工学、Lecturer、女性、39歳、留学経験（西ドイツ－4年10か月、オーストラリア－6年8か月－学士号取得）

（政策）日本は大学を留学生に開放すべきである。利益は共有されるべきであり、日本は奨学金の増加、来日前の情報やアドバイスの提供、安価な日本語コースの提供をすべきである。

（大学）大学は、大学要覧とコースについての情報を英語で出すべきである。自分の大学に来てほしい学生の国を訪問して講義や講演をすべきである。

（教授）アカデミック・スタッフは留学生に対して、友好的でなければならず、また留学生の問題（ことば、文化等）を理解しなければならない。そうすれば、留学生は偏見をもたないし、自国にいるような感じがして歓迎されていると思う。

2. 各国からの提言－総合的検討－

ここでは、「1. 各国からの提言－具体的事例－」でみた8か国からの具体的な提言を「日本政府の留学生政策に対する提言」「個々の大学に対する提言」「日本の大学教授への提言」の3つのレベル別に、いくつかの代表的な項目に簡略にまとめて一覧表を作成し、総合的な検討を行う。

(1) 政府の政策レベルへの提言

表3-1 日本政府の留学生政策に対する提言

提言内容\国名	韓 国	中 国	タ イ	インド ネ シア	イ ン ド	フィ リ ピン	マ レー シア	シン ガ ポ ール	合計
①奨学金を強化してほしい（種類や件数の増大）	57	19	36	43	47	43	29	10	284
②政府・大学間の協定・協力・交流を促進してほしい	10	12	9	23	39	12			195
③情報提供してほしい（日本の大学・奨学金・教育制度等）	7		8	22	24	10	9	6	86
④留学の機会を拡大してほしい	22	7		16	21	6			72
⑤日本語・日本事情教育を充実してほしい（ことばの問題）	1		4	7	7	7	3	5	34
⑥発展途上国（特にアジア）に援助すべきである	4		7	3	1	5			20
⑦プログラムを多様化してほしい	4					2			6
⑧教授用語を英語にしてほしい				1	2		2		4
⑨学位の授与・取得期間の短縮・基準の明確化をしてほしい		1		2					3
⑩宿舎を整備してほしい			1	1					2
⑪政策が明瞭でない				1	1				2
⑫国際関係のコースを設置してほしい				1					1
⑬留学生のアルバイトを自由にしてほしい				1					1
⑭利益抜きの寛大な政策を推進してほしい				1					1
⑮大学院の整備をしてほしい				1					1
合計	105	39	71	117	142	85	43	21	623
*政府の対応は十分である						2	4		6

① 奨学金の強化

まず、政府の政策レベルへの提言で主なものを考察すると、もっとも多いのが「①奨学金の種類や件数を増やしてほしい」（8か国合計で284人）である。現在、日本政府の奨学金は1か月約18万円であり、これに研究旅費なども支給されており、金額的には決して少なくないのであるが、問題は奨学金の種類や件数の少なさにある。平成2年現在、日本における大学の学部・大学院留学生のうち国費留学生は全体の13%であり、残りの87%が私費留学生である。すでに、8か国における高等教育の展開状況でもみたように、これらのアジア諸国は自国の人材養成を海外に依存しているのであり、留学生は自費で来ることになる。しかし、現在の奨学金件数では不十分でありしかも自国よりずっと物価の高い日本での生活は留学生への大きな負担となっている。（権藤・白土、1988年、94～97頁）。

留学の経費面からこの提言に関連して、「④留学の機会を拡大してほしい（特にアジアに対して）」（同72人）「⑥途上国に援助してほしい」（同20人）という提言がみられる。これらの理由として「日本での経費が高い」「日本の経済力は高いのであるから発展途上国、特にアジアに対してもっと援助すべきである」「アメリカと同じように留学生を受け入れるべきである」「アジアへの援助は日本のためにも役立つ」としていることに、耳を傾けなければならないであろう。

② 交流の促進

次に多いのが「②政府・大学間の協定・協力・交流を促進してほしい」（同195人）である。日本とアジア諸国との経済的な関係は非常に密接であるが、教育交流は不足しておりもっと促進してほしいと要望している。日本は国際的教育交流において留学生の受け入れを主としているが、アジア8か国の教授は、学生を受け入れる前にまず、政府や大学間の交流が必要であり、その後で、学生を受け入れるべきであるとしている。それは、教官が日本の政策や大学について知らなければ学生へ留学の指導を行うことができないことや、アジア諸国の発展のために日本の進んだ技術や知識が必要とされているからであろう。ただし、この要望はマレーシア・シンガポールの2か国からは一人もいない。マレーシアの場合、日本は主要留学先国でないわりには、日本留学のため日本から教師が派遣されて来日前の予備教育が行われていることなどから、教育交流の促進が提言されていないのであろうか。それとも、マレーシアで来日前の予備教育が行われていることさえ大学教授層に知られていないのかもしれない。また、シンガポールについても日本への留学生数があまりにわずかであるために提言されていないのであろうか。

③ 教育情報の提供

第3番目に多いのは「③日本の大学・奨学金・教育制度などの情報を提供してほしい」（同86人）である。（問29）で圧倒的に多数の教授が日本留学を希望しており、学生にも勧めるとしているが、日本の大学の種類や修業年限などの制度や奨学金の有無などについての情報がなければ、留学を考えることができないわけである。（問30）で学生に日本留学を勧めない理由は、情報不足としている教官が最も多いことがこれを裏付けている。この情報不足に関連した記述として、「日本の留学生政策について知らないからコメントできない」と書いている教授が8か国にわたって多くいたことは特記すべきことである。現在日本が国際化の最重要課題として「留学生10万人受け入れ計画」を推進していることが、日本への留学生増に大きな影響を及ぼす存在である大学の教授層に知られていないわけであるから、日本政府は情報提供においてもっと積極的な施策を講じなければならない。

④ 日本語・日本事情教育の充実

その他の要望としては、「⑤日本語・日本事情教育を充実してほしい」（同34人）が中国以外の国から提言されている。中国や韓国以外の国は非漢字圏であり本来、日本語と言語がまったく異なるうえに、日本語を学習する機会が非常に限られているために、来日前の日本語および日本事情についての教育の機会の増大が要望されている。このことは「④教授用語を英語にしてほしい」（同5人）と同趣旨の要望である。つまり、日本語は自国では学ぶ機会が少なく、せっかく習得しても日本から帰国後は国際語でないためほとんど使用する機会がないのである。そこで、苦勞して日本語を学習するよりはむしろ教授用語を英語にしてほしいと要望しているのである。現在、海外における日本語の普及はめざましいが、日本語教育機関は韓国や中国に集中している。（NIRA、1985年）日本語教育の充実に関する提言が韓国からは1人だけ、中国からはまったくないのと対照的に、インドネシア・インド・フィリピンからそれぞれ7人、シンガポールから5人、タイから4人、マレーシアから3人の教授が提言している。この提言は（問28）でこれらの国の教授が、

「日本留学には日本語能力が重要である」とすることにすでに示されている。マレーシアおよび中国では来日前の予備教育として日本語教育が行われているのであるが、まだ、不十分だということである。したがって、これらの国における来日前の日本語教育がもっと強化・充実されなければならない。また、教授用語として英語を用いている大学もいくつかあるが、現在のところ、「日本留学の効果をあげるためには、日本人や日本文化の理解が重要であり、そのために日本語を習得すべきである」という考え方と、「限られた期間内に留学の効果をあげるには専門分野についての理解が重要であるから英語で授業をするほうがよい」とする考え方とがある。前者の場合は、留学生が来日前に留学生として十分な日本語能力を習得する機会が少ないという問題があり、後者の場合は日本の大学教師は講義やゼミを行うには英語能力が不足しているという問題がある。

⑤ その他の提言・要望

また、件数は少ないが、「⑨学位をだしてほしい・学位取得期間を短縮してほしい・学位基準を明確化してほしい」（3人）といった、学位に対する要望や、「ビザの取得手続きを簡略にしてほしい」といった行政上の要望も出されている。他方、「政府の対応は十分である」と記述した教官も6人おり、日本政府の留学政策に満足している教官もいるのである。しかし、奨学金の強化をはじめとして、日本政府が積極的に留学政策に取り組んでほしいと要望している教授が圧倒的に多いことは、日本の留学生10万人受け入れ計画が、諸施策においてはまだ不十分であることのあらわれである。

(2) 個々の大学に対する提言

表3-2 個々の大学に対する提言

提言内容\国名	韓 国	中 国	タ イ	インド ネシア	インド ネ	フィ リ ピン	マレー シア	シンガ ポール	合計
①大学間・教官・学生の交流を促進してほしい	23	5	22	20	61	26	29	6	192
②入学・コース・カリキュラム等の情報を提供してほしい	10	2	13	28	19	14	29		115
③奨学金を増加してほしい	12	3	8	7	17	14	6		67
④英語での授業・コース・文献を提供してほしい			9	7	11	13	4	5	49
⑤留学生のための特別コース（コースにあったプログラム）の提供	5		9	1		6	2		23
⑥日本語習得上の工夫をしてほしい			1	5	3	6	3	2	20
⑦大学をもっと開放してほしい		1		3	4	7		1	16
⑧学位をだしてほしい	6			3					9
⑨学科を増設してほしい			1						1
⑩もっと他国を理解すべきである			1		1				2
⑪留学生アドバイザーを置いてほしい			1						1
合 計	56	11	65	74	116	86	73	14	495
*レベルが高い	7	5		2					14

① 交流の促進

個々の大学レベルへの提言として「①大学間・教官・学生の交流を促進してほしい」（同192人）が最も多い。この提言は政府レベルの提言においても奨学金の次に多い要望であり、政策上だけでなく個々の大学が積極的にアジア諸国との交流を促進するよう提言されている。交流促進に関する記述では、単に教官や学生、情報の相互交換のみでなく、姉妹校協定の締結といったより制度的、組織的な交流が要望されている。

② 情報の提供

次に、「②情報を提供してほしい」（同115人）が多い。個々の大学レベルでは、大学入学の制度や、開設されているコースやカリキュラム等についての情報提供が提言されている。（問14）で留学の最重要目的は「学位取得」および「自己の研究の発展」であるから、個々の大学のカリキュラム等についての情報がなければ、留学を考えることはできない。また、現在の日本留学生への調査においても、「留学前に日本留学について得た情報は不十分であった」とするものが多くおり、留学の主目的を考慮すると専門分野についての情報が不足していることは留学の成否を決定するほど重大な問題である。（権藤・白土 1988年、73～76頁）。また、「日本の大学について知らないから答えられない」という記入が多かったことも、情報不足のあらわれである。

③ 奨学金の増加

三番目に多いのが「③奨学金を増加してほしい」である。奨学金の強化の要望はすでに政府の政策レベルでも第1位に出されていたが、さらに個々の大学でも奨学金の強化が要望されている。アメリカでは大部分の大学で奨学金の制度をもっているが、それに比べて日本ではまだ少ない。（文部省、1986年、85～86頁）。

④ 教授用語をめぐる要望

「④英語での授業」（同49人）や「⑥日本語習得上の工夫」（同20人）は政府の政策レベルでも提言されたが、個々の大学に対しても要望されている。やはり、「ことばの問題」は日本留学にとって大きな問題であると認識されている。

⑤ その他の提言

また「⑤留学生のための特別コース（ニーズにあったプログラム）の提供」（同23人）という提言は、従来からの日本人学生用のコースに外国人留学生をそのまま押し込むのではなく、留学生のニーズにあったプログラムの開設が要望である。このことは、日本の大学が留学生のニーズにあったコースを提供しておらず、この点でまだ受け入れ体制が整っていないことが示されている。

「⑦大学をもっと開放してほしい」（同16人）は、具体的には、留学生への門戸開放をはじめとして、実際に在学している留学生に大学の図書館や語学研修室など施設・設備をもっと開放してほしいというのである。

その他、学位授与や学科増設、他国への理解増進など、個々の大学に対しては政府レベルへの提言に比して、より留学生に身近で具体的な要望が出されている。

他方、「日本の大学のレベルが高い」（同14人）という意見もある。この意見は、韓国・7人、中国・5人である。韓国・中国は日本での留学生数の第1、2位を占めており、日本留学の評価（問21）、必要性（問22）、有利性（問23）、日本の博士学位の評価（問25）においても日本留学を高く評価している教官が他の国よりも圧倒的に多い。しかし、日本が主要留学先国でない、インドやマレーシア、シンガポールからはこのような、大学のレベルを高く評価する記述はみられない。インドネシアからも、日本の大学のレベルを高いとする評価がでてきているが（2人）、インドネシアは、日本は留学先国としては第5位であり、日本留学への評価も8か国のなかでは中間的であった。したがって8か国において日本留学の評価は、大学のレベルへの評価と関連が深い。このことは、日本の大学レベルへの評価が高まれば日本留学が増加する可能性を示唆している。

(3) 日本の大学教授への提言

表3-3 日本の大学教授への提言

提言内容\国名	韓 国	中 国	タ イ	インド ネシア	印 ド	マ レー シア	シンガ ポール	合計	
①教育の交流・協力をもっとすべきである	13	6	15	20	47	15	20	5	141
②外国語（英語）能力を高めて使用してほしい	6	1	9	15	4	18	6	3	62
③留学生を理解して親切に・寛容にしてほしい	10		9	12	7	13	7	2	60
④情報を交換したい・公開してほしい			1		7	3		1	12
⑤日本語学習への援助をしてほしい					4		2		6
⑥教授法を改善すべきである			4			1			5
⑦受け入れ機会の拡大をしてほしい							3		3
⑧留学生と日本人を区別しないでほしい	3								3
⑨アジアにおける研究組織をつくってほしい						1	1		2
⑩我々を見下している			1		1				2
⑪欧米だけみている						1			1
⑫自国に役立つようにしてほしい						1			1
⑬帰国後も連絡をとってほしい						1			1
⑭教官についての情報がない			1						1
合計	32	7	40	47	70	54	38	12	300
*優秀である	19	9	7	7	7	19		7	75
*対応は親切・十分である		2		1	4	1	4	2	14
*教授法がよい			1						1

① 交流・協力の促進

もっとも多いのが、「①教官の交流・協力をもっとすべきである」（同141人）との提言である。これは政策レベルでは第2位、個々の大学レベルにおいては第1位の提言であり、さらに教授レベルでも提言されているのは、現在アジア諸国と日本の大学間・大学教授間の相互交流が不活発であることへの不満であり、より積極的な交流・協力を望んでいるのである。

② 外国語（英語）能力

次に多いのが「②外国語（英語）能力を高めて使用してほしい」（同62人）である。この要望はフィリピン（18人）とインドネシア（15人）に多い。このことは、（問28）で、日本留学において日本語を問題とする教官が、非漢字圏の国々に多く、漢字圏の韓国や中国においてはより少ないことにも示されている。しかし、その一方で、韓国（6人）および中国（1人）からこの提言がだされていることにも注目しなければならない。これら漢字圏においても日本語より英語の方が普及しており、さらに（問13）から韓国・中国の教官の過半数がアメリカ留学経験者であることにもよるであろう。この提言が多いのは、日本語の習得困難があり、したがってむしろ日本人教官の方が国際語である英語を使用してほしいと要望しており、それも講義やゼミができるような高い英語能力が要求されている。その背景として、現在の日本人教官の英語力が不十分であることが指摘されている。

これに関連して、「④情報を交換したい・情報を公開してほしい」（同12人）という提言は、具体的には「同じ研究分野の成果を交換したいし、そのために英語で公開してほしい」というものである。

③ 留学生への理解

次に多いのが「③留学生を理解して、留学生に親切に・留学生に対して寛容にしてほしい」（同60人）である。この提言の背景として、「⑥教授法を改善すべきである」（同6人）「⑧留学生と日本人を区別しないでほしい」（同3人）「⑩我々を見下している」（同2人）「⑪欧米だけを見ている」（同1人）など日本人教官に対する不満が示されている。これは、日本人の大学教官がアジアからの留学生に対して理解がなく、不親切で、差別的な態度であり、しかも、教え方がうまくないといった不満ないし批判である。さらに、日本在住の留学生への調査でも、「指導教官にもっと指導をしてほしいし、対話の場をもうけてほしい」と望む留学生が多い。（権藤・白土、1988年、81頁）これらの解決策として「日本の大学教授は、留学生の指導のための特別研修を受けるべきである」との意見もあり、日本の大学教授が留学生の指導においてうまく対応できていない状況が指摘されている。

他方、「教授の対応は親切であり、十分である」（同14人）「教授法がよい」（1人）との評価もあるが、これは、主として実際に日本人教授からよくしてもらった経験があるものの評価である。その反面、「日本の大学教授に知り合いがないから評価できない」という記述も多かった。

また、「日本の教授は優秀である」とする教官が8か国合計で75人いる。このことは、すでにみたように日本の大学の研究レベルが高く評価されており、それを構成する日本の

大学教授は、各自の研究分野において優秀であると評価されているわけである。さらに「⑨アジアにおける研究組織をつくってほしい」（同2人）という要望は、日本の教授は研究面において優秀であり、日本なら研究組織をつくるだけの資金もあるのだから、欧米ばかり向いていないで、日本人の大学教授がイニシアティブをとって学会などの研究組織をアジアにつくってほしいというのである。

(4) まとめ

以上の提言の他にも様々な提言がなされているが、日本留学に対する政府の政策・個々の大学・教授の3つのレベルへの主要な提言を総合的に分析し、それに対する日本側の改善状況を考察すると以下のようにまとめられる。

①「奨学金の強化」に対する要望が8か国すべての教官から強く提言されている。（各レベル合計351人）この提言は、政府の政策レベル・個々の大学レベルでだされており、特に、奨学金の種類件数の増加が要望されている。その背景には、8か国が海外での人材養成を政策として推進していること、日本の大きな経済力と日本での留学経費の高さがあり、日本が教育面においてアジア諸国に積極的に援助するよう要望されている。

また、留学生への実態調査において日本留学の理由として、「日本政府からの奨学金がもらえた」という留学生が国費留学生の約半数もいることから判断すると（権藤・白土、1988年、77～78頁）奨学金の強化は、日本への留学生の増加に直接的な効果を及ぼすであろう。これについては、留学生10万人受け入れ計画が出される前の、昭和58年現在の日本留学における国費留学生の占める割合は全体の21%であったが、平成2年には13%へと減っており、奨学金の強化はまだ不十分である。（文部省、昭和58年）

②また、「ことばの問題」について、自国での日本語教育の機会の増加や充実ばかりでなく、教授用語を英語にすることを要望や、日本の大学教官が英語能力を高めて使用すべきであるといった提言がなされ、日本語能力が日本留学にとって大きな問題となっていることが改めて指摘された。日本語の普及については、従来から国際交流基金が中心となって活動を行ってきたが、海外での日本語教育協力機関として日本語国際センターが1989年に開設され、海外日本語教員の招聘研修を開始するなど本格的な取り組みがはじめられたばかりであり（日本語センター、1989年）、今後の活動が期待される。

③「情報を提供してほしい」という提言は、政府レベル・個々の大学レベルで2番目に多く、教授のレベルでは第4位であり合計213人である。すでに述べたように、「日本の留学生政策、大学、大学教授を知らないから答えられない」という記述が多かった。さらに「この調査によって、政策を知ったが、もっと推進してほしい」という記述が散見されたことを考慮すると、無記入の場合も提言がないのではなく、提言できるだけの情報がないと推測される。情報提供については、現在文部省が財団法人日本国際教育協会の留学生情報センターを通じて内外からの問い合わせに対応し、併せて英文大学案内等の情報誌の発行・海外への送付等の留学情報提供活動を行なっているが（文部省、平成元年）、もっと積極的に各レベルの情報をアジア諸国に発信していくことが今後の課題である。

これら3つの提言は、すでに「第2部 5. 日本の留学生政策への要望」（問32）において、日本留学における問題点の改善策として求められていたが、再度自由記述においても要望されているものである。

④さらに、これらの要望の他に、日本留学に対する提言として、新たに「政府・大学・教官・学生間の交流・協力の推進」が政府・大学・教授の3つのレベルすべてにおいて提言されている。提言した教授の数は各レベル合計528人おり、上記3つの提言と比較して最も多い。これは、日本とアジア8か国との教育的交流・協力が非常に不足していることを示している。現在日本は留学生の受け入れ増を重点施策としているが、学生レベルの受け入れのみでなく、政府間・大学間・教官間の交流が強く要望されているのである。

日本側において大学間の交流は年々活発になってきている。外国の大学と交流を行っている大学は年々増加しているが、提携先は北米や西欧諸国が大半であり、アジアでは中国、韓国が多い。（江淵、1990年、76～78頁）九州大学の例でも、平成2年現在大学間および学部間の交流協定をむすんでいる9か国合計42大学のうち、アメリカ・フランスなど欧米諸国は13大学であるが、アジア諸国では中国の北京大学など24校、韓国の釜山大学など3大学で、合計27大学あり、アジアが多い。（九州大学、1990年）しかし、アジアにおいては中国と韓国のみでありまだ他のアジア諸国の要望には答えきれていない。

最後に、この調査の日本の留学生政策への提言から得られた知見としては、日本留学のネックは「各レベルでの交流不足」が第1位であり、ついで「留学資金」「教育情報の不足」、「日本語能力」であることが判明した。このような各レベルの提言を通じてみられる、アジア8か国大学教授の要望は、「アジアにおいて経済的にもっとも発展し、研究面においても進んでいる日本から学びたいものが多く、そのために、日本はアジアのリーダーとして、アジアの他の国々のためにもっと積極的に援助すべきである」とまとめられる。留学生の受け入れ増をはかるには、これらの側面について改善することが急務であり、日本側も改善をはかっているがまだ不十分であることはこれまで述べたとおりである。したがって、日本は、アジアにおけるリーダーとして期待されておりその自覚をもって留学政策にあたらなければならないのである。

（注）本文中の（ ）は以下の文献を示している。

- ・（権藤・白土、1988年）は権藤與志夫・白土悟「外国人留学生の学習と生活に関する諸問題－九州地区国・公・私立大学における質問紙調査－」九州大学比較教育文化研究施設紀要第39号、1988年。
- ・（NIRA、1985年）は総合研究開発機構『日本語教育および日本語普及活動の現状と課題』1985年。
- ・（文部省、1986年）は文部省学術国際局留学生課『21世紀への留学生政策』昭和61年。
- ・（江淵、1990年）は江淵一公編『留学生受け入れと大学の国際化－全国大学における留学生受け入れと教育に関する調査報告－』広島大学大学教育研究センター、1990年。

- (九州大学、1990年)は九州大学国際交流委員会第一専門委員会『九州大学における国際交流－協定締結大学との交流実績の概要－』1990年3月。
- (文部省、平成元年)は文部省「留学生交流の現状と施策」『文部時報』1344号、平成元年、67頁。
- (日本語国際センター、1989年)は国際交流基金『日本語国際センター事業報告書』1989年。

結 語

権藤 与志夫

調査時の1985年から1986年においては、アジア8か国の大学教授の大半が日本への留学生数について「少し増加」するという予想をたてていた（p.40）。しかし、この5年間の日本への留学生の増加はその予想に反して「大きな増加」を示している。

この大きな増加の背景として、ここ5年間に奨学金の数、額ともに増加し、日本の国際的地位も上昇した。また、多様なアジア各国の状況もそれぞれめまぐるしく変化している。しかし、日本語教育、博士学位の取得状況など、ある程度改善されはしたものの日本留学を取り巻く問題は依然として多い。

本調査結果をみると、日本留学をめぐる問題点は、①経費、②言葉、③情報の3つに要約される。このうち経費と言葉の問題はどの国に留学する場合においても多かれ少なかれ発生する問題であるが、情報の不足という問題は欧米留学にはそれほどみられない、日本特有の問題といえる。奨学金などの経費の問題についても、十分に情報が伝わっていれば解決し得たであろうと思われる点も多々ある。歴史的背景や英語の国際性などから、アジア各国の欧米志向、特に近年のアメリカ一辺倒ともいうべき状況が今後急激に変化することはありえないであろうが、その一方でマレーシアのルック・イースト政策にみられるように受け入れ国としての日本の役割が増大していることも確かなことである。

今後の研究課題として、①今回調査対象者の中にはそれほど多く含まれていなかった日本留学帰国者の日本留学観を検討すること、また②大学教授だけではなく、民間企業や政府関係省庁の関係者あるいは高校の進学指導員など、学生の留学や留学先国に影響を与える有識者に対する調査を行なうことなどが必要であると考えられる。

さらに、高等教育制度が1970年代より変化したインドネシアや天安門事件以後の中国などは教授の地位、及び留学の効果そのものも大きく変化していると考えられること、さらには日本の受け入れ状況も大きく変わっているために、③今後も時系列的な調査が有効になろう。また、今後上記のような調査を行なう際には、冒頭にも示したように常に送り出し大国であるアメリカ留学との対比を行なうことが有益であると考えられる。アメリカの状況を日本の留学生受け入れ改善の参考資料であり続けるのではなかろうか。

アメリカの留学生指導の水準や受け入れのキャパシティに追い付き追い越せというつもりはないが、改善すべき点は改善し、アジアの人々が日本の教育を正しく理解したうえで、日本留学の得失、是非を判断し、結果として日本が世界に開かれた留学生受け入れ国になるように期待したいものである。

資 料 編

編集担当

久保田優子
永岡 真波

International Survey of Opinions on Studying in Japan

I Face sheet

(Please circle the appropriate item number)

Q 1 Your name _____

Q 2 Your age _____

Q 3 Your sex 1. Male 2 Female

Q 4 Name of your University (or Center, Institute,...)
_____ and
your Faculty (or Department, College,...)

Q 5 Your position

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1. Professor | 2. Associate Professor |
| 3. Reader | 4. Senior Lecturer |
| 5. Assistant Professor | 6. Lecturer |
| 7. Instructor | |
| 8. Others (Please specify) | _____ |

Q 6 Your major field of study (Please circle ONE)

- | | |
|---|--|
| 1. Education including teacher training, physical education | 14. Geology |
| 2. Law | 15. Agriculture |
| 3. Politics | 16. Veterinary |
| 4. Economics | 17. Fisheries/Animal Husbandry |
| 5. Cultural & Social Anthropology | 18. Civil Engineering |
| 6. Physical Anthropology | 19. Electrical Engineering |
| 7. Psychology | 20. Mechanical Engineering |
| 8. Literature, History, Philosophy, Linguistics, and other humanities | 21. Computer Science and Communication Engineering |
| 9. Theology | 22. Other Engineering |
| 10. Physics | 23. Basic Medical Science |
| 11. Chemistry | 24. Clinical Medicine (Nursing) |
| 12. Mathematics | 25. Pharmacy |
| 13. Biology | 26. Dentistry |
| | 27. Others (Please specify) |
- _____

Q 7 If you belong to international academic societies, then please give their names (at most three).

1. _____
2. _____
3. _____

Q 8 If you belong to academic societies of Japan, then please give their names (at most two).

1. _____
2. _____

Q 9 Your degree

1. Doctor's Degree 2. Master's Degree
3. Bachelor's Degree
4. Others (Please specify) _____

Q 10 At which course do you mainly teach, if you teach?

1. Graduate course 2. Undergraduate course
3. Both 4. Others (Please specify) _____
5. No teaching

II We are going to ask your own experience of studying abroad.
By studying abroad we mean "studying in a foreign country at least for an academic year" (about 10 months).

Q 11 Have you ever studied abroad? 1. Yes 2. No

If "Yes", please go to Question 12. If "No", please skip to Question 15.

Q 12 How many times have you studied abroad?

1. Once 2. Twice 3. More than twice

Q 13 Please fill in the following columns.

	1st experience	2nd	3rd
1. Country visited			
2. Year visited			
3. Duration of your stay (month)			
4. Name of institution where you studied			
5. Field of study			
(From 6 to 8, please write in a, b, c,... in the columns.)			
6. Main financial sponsor a. Your government b. Foreign government c. Domestic foundation d. Foreign foundation e. Private money f. Others (Please specify)			
7. Status before studying abroad a. Undergraduate b. Graduate c. Research fellow d. Others (Please specify)			
8. Degrees acquired through studying abroad a. Doctor's Degree b. Master's Degree c. Bachelor's Degree d. Others e. None			

Q 14 Which is the most important one for you among above mentioned studying abroad? Please circle ONE.

1. 1st experience
2. 2nd experience
3. 3rd experience

Q 14-1 Concerning your most important studying abroad, why did you go to the country to study? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Academic standard of my major field of study in the country was excellent.
2. Cost of living was low.
3. I had friends and acquaintances.
4. Climate is mild.
5. The country is near.
6. I like the country.
7. The country had strong ties with my own.
8. It was easy to get degrees.
9. Degrees of the country were highly valued in my country.
10. I got a scholarship to study in the country.
11. My professor recommended the country.
12. Others (Please specify). _____

Q 14-2 Concerning your most important studying abroad, why did you choose the institution? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. It was world famous.
2. Academic standard of my major field of study in the institution was excellent.
3. There were professors under whom I wanted to study.
4. Environment of the institution was good.
5. It had strong ties with my own universities and/or department.
6. My professor recommended it.
7. Others (Please specify). _____

Q 14-3 Concerning your most important studying abroad, what were the purposes of your studying abroad? Please RANK the following items according to the importance you attached and write the number 1,2,3,...in the parentheses provided.

1. To get degrees ()
2. To develop my own study and research ()
3. To have rich experience of living abroad ()
4. To know various aspects of the culture, society and history of the country visited ()
5. To get higher status and position after returning home ()
6. To get good jobs ()
7. Others (Please specify). _____

Q 14-4 Concerning your most important studying abroad, how useful do you think your own studying abroad was for academic achievement in your major field of study? Please circle ONE.

1. Very useful
2. Somewhat useful
3. Neither useful nor useless
4. Somewhat useless
5. Very useless

III We are going to ask your opinions on giving advice to your students, concerning the matter of studying abroad.

Q 15 What do you think is the most advisable stage for studying abroad? Please circle ONE.

1. Undergraduate course
2. Master degree course
3. Doctorate course
4. After finishing graduate course
5. Others (Please specify). _____

Q 15-1 If you circle 1 in Q 15, what are the reasons? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Most able students go to foreign universities at the undergraduate stage.
2. The student's ability to adjust to life and study in foreign countries is greater at the undergraduate stage.
3. Studying abroad at the undergraduate stage is most useful for getting jobs of higher status at home.
4. Studying abroad at the undergraduate stage is to help greatly students to get in foreign graduate courses.
5. Others (Please specify). _____

Q 16 What do you think are the most advisable countries for studying abroad in your major field of study? Please write in TWO countries.

1. First one _____
2. Second one _____
3. Difficult to answer

Q 16-1 As for the country of your first choice, what are the reasons for the choice? Please select and circle as many as you think appropriate.

1. I have studied in that country.
2. Studying in that country is useful for the student's major field of study.
3. Studying in that country is useful for getting jobs.
4. My government puts emphasis on studying in that country.
5. My university puts emphasis on studying in that country.
6. My university has an exchange program with universities in that country.
7. Expenses are low.
8. Getting degrees is easy.
9. Others(please specify). _____

Q 17 What do you think is the most advisable duration for students to study abroad? Please write in appropriate number of year(s).

1. In the case of Undergraduate students () year(s).
2. In the case of Master Course students () year(s).
3. In the case of Doctoral Course students () year(s).
4. In the case of Post-doctoral students () year(s).

Q 18 How do you think studying abroad is useful to get jobs or to get promoted in your major field of study? Please circle ONE.

1. Very useful
2. Somewhat useful
3. Neither useful nor useless
4. Somewhat useless
5. Very useless

Q 19 On which item do you put the highest priority when you give your students advices about studying abroad? Please circle ONE.

1. Country where the students study
2. Faculty, department or school where the students study
3. Professor under whom the students study
4. Others (Please specify). _____
5. Difficult to answer

Q 20 Which problems do you think are serious when your students go to study abroad? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Students' obtaining financial expenses for studying abroad.
2. Students' competence in the major field of study.
3. Students' competence in the language of the host country.
4. Students' ability to adjust to life in the host country.
5. Students' health.
6. Others (Please specify). _____

IV We are going to ask your opinions on studying in Japan.

Q 21 How do you evaluate the academic standard of your major field of study in Japanese universities comparing to American and European universities? Please circle ONE.

1. Much higher
2. Somewhat higher
3. Same
4. Somewhat lower
5. Much lower
6. Difficult to answer

Q 22 How do you think studying in Japan is necessary in your major field of study? Please circle ONE.

1. Very necessary
2. Somewhat necessary
3. Neither necessary nor unnecessary
4. Somewhat unnecessary
5. Very unnecessary
6. Difficult to answer

Q 23 How do you think studying in Japan is useful to get jobs or to get promoted after returning home? Please circle ONE.

1. Very useful
2. Somewhat useful
3. Neither useful nor useless
4. Somewhat useless
5. Very useless
6. Difficult to answer

Q 24 How easy do you think getting Doctor's degree in Japanese universities comparing to American universities in your major field of study? Please circle ONE.

1. Much easier
2. Somewhat easier
3. Neither easy nor difficult
4. Somewhat more difficult
5. More difficult definitely
6. Difficult to answer

Q 25 How do you think Japanese Doctor's degree is useful to get jobs or to get promoted after returning home? Please circle ONE.

1. Very useful
2. Somewhat useful
3. Neither useful nor useless
4. Somewhat useless
5. Very useless
6. Difficult to answer

Q 26 How do you think American Doctor's degree is useful to get jobs or to get promoted after returning home? Please circle ONE.

1. Very useful
2. Somewhat useful
3. Neither useful nor useless
4. Somewhat useless
5. Very useless
6. Difficult to answer

Q 27 Which is more valuable in your major field of study, Japanese or American Doctor's degree? Please circle ONE.

1. Japanese Doctor's degree
2. American Doctor's degree
3. Equal
4. Difficult to answer

Q 28 Which problems do you think are serious when your students go to study in Japan? Please select THREE and circle their numbers.

1. Students' competence in Japanese
2. Students' ability to adjust to life in Japan
3. Students' competence in the major field of study
4. Students' health
5. Students' obtaining financial expenses for studying abroad
6. Different customs from my own country
7. Different educational system from my own
8. Others (Please specify). _____

Q 29 Do you yourself hope to study in Japan?

1. Yes.
2. No.

Q 29-1 If "Yes", what are the reasons for "Yes"? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Studying in Japan is useful for my major field of study.
2. I want to get degrees.
3. Studying in Japan is useful for promotions.
4. I have friends and acquaintances.
5. Japan is near my country.
6. Expenses are low.
7. I am interested in Japan in general.
8. Others (Please specify). _____

Q 29-2 If "No", what are the reasons for "No"? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Studying in Japan is not useful for my major field of study.
2. Japanese degrees are not useful.
3. Studying in Japan is not useful for promotions.
4. I am not interested in Japan in general.
5. Expenses are high.
6. Others (Please specify). _____

Q 30 Do you recommend your graduate students to study in Japan?

1. Yes.
2. No.

Q 30-1 If "Yes", what are the reasons for "Yes"? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. I have studied in Japan.
2. Studying in Japan is useful for the students' major field of study.
3. Studying in Japan is useful for getting jobs.
4. My government puts emphasis on studying in Japan.
5. My university puts emphasis on studying in Japan.
6. My university has an exchange program with Japanese universities.
7. Japan is near my country.
8. Expenses are low.
9. Getting degree is easy.
10. Others (Please specify). _____

Q 30-2 If "No", what are the reasons for "No"? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Getting degree is difficult.
2. Japanese degrees are not useful.
3. Studying in Japan is not useful for getting jobs and promotions.
4. I am not interested in Japan.
5. Cost of living is high in Japan in general.
6. I have little information about Japanese education.
7. I should like to recommend other countries to students for study.
8. Others (Please specify). _____

Q 31 Do you recommend your undergraduate students to study in Japan?

1. Yes.
2. No.

Q 31-1 If "No", what are the reasons for "No"? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Japanese Bachelor's degree is not useful.
2. Japanese Bachelor's degree is difficult to get.
3. To study in English speaking countries is more appropriate conclusively.
4. It is too early for students to study abroad from the Bachelor stage.
5. Others (Please specify). _____

Q 32 What measures do you hope for Japan to improve the situation of foreign students studying in Japan? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. To increase the number of scholarships offered by Japan.
2. To increase the amount of individual scholarship offered by Japan.
3. To improve the system of guidance for foreign students to get Doctor's degree.
4. To give more Doctor's degree to foreign students.
5. To increase the number of lectures in English.
6. To establish and increase special courses for foreign students.
7. To increase the number of accommodations for foreign students.
8. To establish and increase courses of Japanese language.
9. To establish and expand preparatory education courses in my country for studying in Japan.
10. To supply more information about studying in Japan.
11. To take more care of students after returning home.
12. To establish and expand promoting agencies for studying in Japan.
13. Others (Please specify). _____

Q 32-1 If you circle 8 in Q 32, what measures do you hope for Japan to take to improve teaching of Japanese? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. To send more teachers of Japanese to my country.
2. To help to establish schools of Japanese study in our colleges and universities.
3. To make adequate textbooks of Japanese.
4. To make adequate audio-visual aids in learning Japanese.
5. To train more specialists in teaching Japanese as a foreign language.
6. To increase preparatory institutions of teaching Japanese for foreign students in Japan.
7. Others (Please specify). _____

Q 32-2 If you circle 10 in Q 32, what kind of information do you want to have? Please select and circle as many items as you think appropriate.

1. Information on Japanese education system in general.
2. Information on Japanese higher education system in particular.
3. Information on Japanese individual university in particular (e.g. Kyushu University, University of Tokyo and so on).
4. Information on scholarships for studying in Japan.
5. Information on getting Doctor's degree in Japanese universities.
6. Information on living in Japan to study.
7. Information on characteristics of Japanese society and people.
8. Others (Please specify). _____

Q 33 Do you think the number of students studying in Japan will increase in the future? Please circle ONE.

1. Increase very much
2. Increase somewhat
3. Constant
4. Decrease somewhat
5. Decrease very much
6. Difficult to answer

Q 33-1 What are the reasons for that? please select and circle as many items as you think appropriate.

1. The academic standard of Japanese universities is high/low.
2. The educational standard of Japanese universities is high/low.
3. Getting degrees in Japan is easy/difficult.
4. Japanese degrees are useful/useless.
5. The international status of Japan is high/low.
6. Policies of the Japanese government for foreign students studying in Japan are adequate/inadequate.
7. Policies of my country for studying in Japan are adequate/inadequate.
8. Others (Please specify). _____

Would you please comment and advise concerning Japanese policy on foreign students' study in Japanese universities?

1) On government policy

2) On individual university level

3) On professor level (ability, attitude, technique and so on)

Thank you very much for your time and cooperation.

資料② 各質問に対する8か国の回答

問2 年令 (％) (人)

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不明	計
韓国	1.1	26.7	39.1	20.7	10.2	0.0	2.3	226
中国	4.3	13.0	27.5	38.4	16.7	0.0	0.0	138
タイ	1.7	28.2	37.3	29.9	1.1	0.0	1.7	177
インドネシア	12.1	24.2	34.8	24.2	4.8	0.0	0.0	207
インド	3.3	3.7	37.7	47.0	8.4	0.0	0.0	215
フィリピン	7.7	18.6	31.1	31.1	9.8	0.0	1.6	183
マレーシア	8.4	24.2	48.4	15.8	3.2	0.0	0.0	95
シンガポール	4.0	24.0	24.0	38.0	10.0	0.0	0.0	50
平均	4.2	19.8	35.8	30.3	7.4	0.6	2.0	1331

問3 性別 (％) (人)

	男	女	不明	計
韓国	91.4	6.8	1.9	266
中国	84.1	15.2	0.7	138
タイ	63.8	35.6	0.6	177
インドネシア	81.6	15.9	2.4	207
インド	89.8	8.8	1.4	215
フィリピン	55.7	43.2	1.1	183
マレーシア	86.3	12.6	1.1	95
シンガポール	82.0	16.0	2.0	50
平均	79.6	19.0	1.4	1331

問5 地位 (％) (人)

	教授	助教授	講師	助手	不明	計
韓国	44.4	26.3	22.6	4.9	1.9	266
中国	21.7	39.9	27.5	8.7	2.2	138
タイ	19.2	38.4	36.2	4.5	1.7	177
インドネシア	9.7	7.2	38.2	39.1	5.3	207
インド	81.9	12.1	0.5	3.7	1.8	215
フィリピン	35.0	24.6	21.3	17.5	1.6	183
マレーシア	36.8	37.9	24.2	0.0	1.1	95
シンガポール	32.0	28.0	22.0	16.0	2.0	50
平均	37.0	24.7	30.6	6.1	1.6	1331

問6 専門

(%) (人)

	教育	法政経	人文	理	農	工	医歯薬	その他	不明	計
韓国	8.6	21.4	12.8	16.2	13.2	11.7	12.8	2.6	0.4	266
中国	15.2	29.7	10.1	8.7	12.3	21.7	1.4	0.0	0.7	138
タイ	14.7	22.0	15.3	12.4	13.9	10.7	9.6	1.7	0.6	177
インドネシア	11.6	24.6	17.4	9.7	13.0	9.7	10.6	0.0	0.5	207
インド	9.8	22.8	10.2	11.2	21.9	8.8	8.4	6.0	1.0	215
フィリピン	15.8	13.7	19.1	7.1	14.8	17.5	7.1	3.8	1.1	183
マレーシア	10.5	18.9	11.6	13.7	22.1	9.5	9.5	2.1	2.1	95
シンガポール	14.0	22.0	8.0	16.0	0.0	22.0	10.0	8.0	0.0	50
平均	12.1	19.8	14.7	11.8	14.4	12.8	10.1	3.3	10.8	1331

問7 所属する国際学会

(%) (人)

	1つ	2つ	3以上	無記入	計
韓国	28.2	17.3	8.3	46.2	266
中国	5.8	0.0	2.2	92.0	138
タイ	17.5	12.4	7.9	62.1	177
インドネシア	13.5	9.2	5.8	71.5	207
インド	20.0	10.7	11.6	57.7	215
フィリピン	21.9	13.7	16.4	48.1	183
マレーシア	26.3	17.9	25.3	30.5	95
シンガポール	34.0	18.0	22.0	26.0	50
平均	20.1	12.1	10.6	57.3	1331

問8 所属する日本の学会

(%) (人)

	1つ	2以上	無記入	計
韓国	18.8	7.5	73.7	266
中国	2.2	0.0	97.8	138
タイ	3.4	2.3	94.4	177
インドネシア	1.0	1.9	97.1	207
インド	1.4	0.0	98.6	215
フィリピン	1.6	0.0	98.4	183
マレーシア	0.0	1.1	98.9	95
シンガポール	0.0	0.0	100.0	50
平均	5.0	2.2	92.8	1331

問9 学位 (%) (人)

	博士	修士	学士	その他	無記入	計
韓国	75.6	20.7	2.3	1.5	0.0	266
中国	10.1	52.9	22.5	10.1	37.0	138
タイ	48.6	42.4	6.2	2.3	0.6	177
インドネシア	17.9	48.8	4.8	26.6	1.9	207
インド	87.9	10.7	0.9	0.5	0.0	215
フィリピン	43.7	44.3	8.7	2.2	1.1	183
マレーシア	69.5	23.2	4.2	0.0	3.2	95
シンガポール	64.0	22.0	8.0	6.0	0.0	50
平均	53.0	29.8	6.3	6.6	4.3	1331

問10 どの段階で教えているか (%) (人)

	大学院	学部	両方	教えない	その他	無記入	計
韓国	7.5	22.6	69.5	0.0	0.4	0.0	266
中国	10.1	26.8	56.5	1.4	2.9	2.2	138
タイ	15.3	27.7	56.5	0.0	0.0	0.6	177
インドネシア	25.1	28.5	39.1	1.9	1.9	3.4	207
インド	40.5	1.4	52.1	5.1	0.9	0.0	215
フィリピン	18.0	35.0	46.4	0.0	0.0	0.5	183
マレーシア	9.5	41.1	49.5	0.0	0.0	0.0	95
シンガポール	6.0	40.0	44.0	8.0	2.0	0.0	50
平均	18.4	24.9	53.3	1.6	0.9	0.8	1331

問11 留学経験 (%) (人)

	有	無	無記入	計
韓国	68.4	27.8	3.8	266
中国	29.7	56.5	13.8	138
タイ	80.8	16.4	2.3	177
インドネシア	42.0	53.1	4.8	207
インド	58.1	38.1	3.7	215
フィリピン	59.6	36.6	3.8	183
マレーシア	90.5	9.5	0.0	95
シンガポール	90.0	10.0	0.0	50
平均	61.5	34.0	4.4	1331

問12 留学回数(総数 876人) (%) (人)

	1回	2回	3回 以上	無記 入	計
韓国	70.3	24.7	5.5	0.0	182
中国	100.	0.0	0.0	0.0	41
タイ	52.7	37.7	6.8	2.7	146
インドネシア	64.4	33.3	2.3	11.5	87
インド	80.0	18.4	1.6	6.4	125
フィリピン	56.9	33.0	9.3	0.8	109
ロシア	44.2	41.9	14.0	0.0	86
シンガポール	57.8	31.1	11.1	0.0	45
平均	60.3	27.2	5.8	6.7	876

問13-1 留学先国(総数 883人) *第1回目の留学のみ (%) (人)

	日本	北米	西欧	アジア・ オセアニア	東欧	その 他	無記 入	計
韓国	18.6	62.1	8.8	5.5	0.0	3.1	1.6	182
中国	22.0	56.1	4.9	4.9	9.8	4.9	0.0	41
タイ	4.8	54.1	17.8	17.1	0.0	2.1	4.1	146
インドネシア	2.9	29.9	28.7	23.0	2.3	5.7	13.8	87
インド	0.8	60.8	24.0	4.0	6.4	4.8	6.4	125
フィリピン	5.5	73.4	8.3	7.3	1.8	2.7	0.9	109
ロシア	0.0	38.4	41.9	15.1	0.0	2.3	2.3	86
シンガポール	0.0	31.1	42.2	20.0	0.0	6.7	0.0	45
平均	7.1	50.3	18.5	10.4	1.8	3.4	8.7	883

問13-2 留学年代(総数 883人) *第1回目の留学のみ (%) (人)

	1930's	1940's	1950's	1960's	1970's	1980's	無記入	計
韓国	1.6	2.2	7.7	22.0	40.7	15.4	10.4	182
中国	2.4	9.8	7.3	0.0	4.9	58.5	17.1	41
タイ	1.4	2.1	19.9	40.4	21.9	6.8	7.5	146
インドネシア	1.1	2.3	10.3	26.4	42.5	12.6	14.9	87
インド	0.0	1.6	14.4	62.4	19.2	1.6	0.8	125
フィリピン	0.0	1.8	30.3	40.4	14.7	11.0	1.8	109
ロシア	0.0	0.0	16.3	40.7	34.9	4.7	3.5	86
シンガポール	2.2	2.2	31.1	42.2	17.8	4.4	0.0	45
平均	0.9	2.0	15.2	33.9	25.3	10.5	12.2	883

問13-3 留学期間（総数 883人）*第1回目の留学のみ（人）

	1年	2年	3年	4年	5年 以上	無記 入	計
韓国	24.7	19.2	9.9	11.5	32.4	2.2	182
中国	12.2	56.1	17.1	9.8	2.4	2.4	41
タイ	9.6	33.6	13.7	13.7	26.0	2.7	146
インドネシア	29.9	36.8	14.9	5.7	8.0	14.9	87
インド	27.2	19.2	23.2	18.4	12.0	0.0	125
フィリピン	33.0	31.2	15.6	6.4	11.9	1.9	109
マレーシア	6.9	29.1	14.0	12.8	32.6	4.7	86
シンガポール	22.2	20.0	17.8	8.9	31.1	0.0	45
平均	19.9	26.2	14.0	11.0	19.8	9.1	883

問13-4 留学先大学名（総数 883人） *第1回目の留学のみ (%) (人)

	ハーバート	スタンフォ	エール	オックス	ケンブリ	ロンドン	M.I.T	日本	その他	無記入	計
韓国	3.3	1.1	0.5	0.5	0.0	0.5	0.0	19.2	72.0	2.7	182
中国	7.3	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.1	70.7	2.4	41
タイ	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	0.7	3.4	89.7	2.7	146
インドネシア	1.1	1.1	0.0	0.0	0.0	1.1	1.1	4.6	86.2	14.9	87
インド	3.2	0.8	2.4	0.8	3.2	5.6	0.8	0.0	82.4	0.8	125
フィリピン	1.8	0.9	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	3.7	89.0	3.7	109
マレーシア	2.1	0.0	0.0	0.0	1.1	6.6	0.0	0.0	77.9	3.2	86
シンガポール	4.4	2.2	0.0	6.7	4.4	6.7	0.0	0.0	73.3	2.2	45
平均	2.4	0.8	0.5	0.6	0.8	2.5	0.3	6.2	76.3	9.3	883

問13-5 研究分野（総数 883人） *第1回目の留学のみ (%) (人)

	教育	法政経	人文	理	農	工	医歯薬	その他	無記入	計
韓国	8.8	15.4	6.6	15.9	9.9	10.4	12.6	14.8	4.4	182
中国	17.1	9.8	7.3	17.1	7.3	24.4	4.9	12.2	0.0	41
タイ	13.0	18.5	7.5	10.3	11.0	10.3	5.5	19.9	3.4	146
インドネシア	6.9	17.2	17.2	9.2	8.0	9.2	4.6	24.1	14.9	87
インド	5.6	19.2	4.0	7.2	16.8	8.0	8.8	28.8	0.8	125
フィリピン	14.7	19.3	4.6	11.9	3.7	12.8	31.2	1.8	0.0	109
マレーシア	11.6	11.6	4.7	14.0	16.3	9.3	4.7	24.4	3.5	86
シンガポール	8.9	15.6	4.4	13.3	2.2	20.0	4.4	31.1	0.0	45
平均	9.6	13.6	7.5	10.5	10.5	10.5	6.6	21.3	9.4	883

問13-6 主な留学資金源（いくつでも）（総数 883人）

	自国 政府	他国 政府	自国 募金	外国 募金	私費	その 他	計
韓国	17.0	23.6	1.6	29.1	23.1	9.9	182
中国	60.1	19.5	12.0	4.8	2.4	1.2	41
タイ	21.9	38.4	1.4	15.1	21.9	5.5	146
インドネシア	10.3	55.2	4.6	23.0	3.4	6.9	87
インド	10.4	41.6	1.6	38.4	8.8	12.8	125
フィリピン	23.9	44.0	2.8	30.3	14.7	11.0	109
マレーシア	43.2	24.2	4.2	10.5	12.6	3.2	86
シンガポール	24.4	33.3	4.4	8.9	22.2	13.3	45
平均	21.3	33.2	2.4	22.2	14.5	8.0	883

問13-7 留学前の地位（総数 883人（%）（人）

	学部 生	院生	研究 生	その 他	無記 入	計
韓国	14.3	25.8	25.8	29.1	4.9	182
中国	14.6	26.8	24.4	34.1	0.0	41
タイ	34.2	36.3	2.7	22.6	4.1	146
インドネシア	23.0	52.9	3.4	13.8	18.4	87
インド	5.6	40.8	9.6	42.4	1.6	125
フィリピン	23.9	49.5	1.8	22.0	2.8	109
マレーシア	31.4	37.2	3.5	25.6	2.3	86
シンガポール	24.4	44.4	2.2	26.7	2.2	45
平均	19.6	35.7	9.3	25.3	10.2	883

問13-8 留学中に得た学位（いくつでも）（総数 883人）（%）（人）

	博士	修士	学士	その他	なし	計
韓国	45.6	23.1	4.9	4.9	25.8	182
中国	14.6	17.1	2.4	12.2	51.2	41
タイ	30.1	51.4	16.4	7.5	6.2	146
インドネシア	11.5	43.7	6.9	18.4	23.0	87
インド	49.6	23.2	0.0	19.2	15.2	125
フィリピン	26.6	50.5	1.8	22.0	8.3	109
マレーシア	37.2	46.5	30.2	12.8	2.3	86
シンガポール	37.8	33.3	22.2	15.6	8.9	45
平均	32.2	34.1	8.8	12.1	14.8	883

問14 最も重要な留学は何回めか (総数 876)

(%) (人)

	1回	2回	3回	無記	計
韓国	69.8	16.5	1.1	12.6	182
中国	73.2	0.0	0.0	26.8	41
タイ	67.8	22.6	2.1	7.5	146
インドネシア	62.1	23.0	0.0	26.4	87
インド	41.9	4.7	0.5	14.9	133
フィリピン	59.6	24.8	3.7	11.9	109
マレーシア	61.6	22.1	3.5	12.8	86
シンガポール	77.8	13.3	2.2	6.7	45
平均	63.2	16.6	1.6	18.6	876

問14-1 留学先国の選択理由 (いくつでも) (総数 876名)

(%) (人)

	研究水準	生活費安	友人知人	気候	近い	好き	関係深い	学位容易	学位評価	奨学金	教授推薦	その他	計
韓国	86.3	4.4	11.0	2.2	7.7	16.5	11.0	1.1	27.5	44.0	12.1	4.4	182
中国	65.9	4.9	7.3	4.9	2.4	17.1	4.9	2.4	12.2	24.4	17.1	9.8	41
タイ	61.0	4.1	8.2	2.1	2.1	17.8	8.9	1.4	37.0	65.1	7.5	2.7	146
インドネシア	58.6	6.9	9.2	5.7	5.7	20.7	9.2	1.1	28.7	78.2	17.2	9.2	87
インド	81.6	4.8	4.8	0.8	0.0	16.8	16.8	0.8	40.8	67.2	17.6	20.0	125
フィリピン	78.9	3.7	6.4	1.8	3.7	22.0	43.1	0.9	52.3	77.1	10.1	16.5	109
マレーシア	76.7	3.5	14.0	2.3	3.5	18.6	33.7	1.2	50.0	65.1	17.4	8.1	86
シンガポール	82.2	4.4	8.9	0.0	4.4	22.2	35.6	0.0	53.3	60.0	12.4	11.1	45
平均	70.2	4.2	8.2	2.2	3.7	17.4	17.8	1.0	35.3	57.6	12.8	9.1	876

問14-2 留学先大学の選択理由 (いくつでも) (総数 876名)

(%) (人)

	世界的に有名	水準の高さ	習いたい教授	よい環境	姉妹関係	教授推薦	その他	計
韓国	22.5	71.4	39.0	18.1	6.0	17.0	9.3	182
中国	41.5	51.2	34.1	17.1	12.2	19.5	12.2	41
タイ	27.4	58.9	20.5	21.2	6.8	10.3	28.8	146
インドネシア	25.3	56.3	34.5	20.7	11.5	21.8	21.8	87
インド	46.4	65.6	40.8	20.8	15.2	16.8	15.2	125
フィリピン	33.0	70.6	33.0	33.9	13.8	13.8	23.9	109
マレーシア	36.0	65.1	37.2	32.6	11.6	22.1	10.5	86
シンガポール	51.1	68.9	33.3	31.1	20.0	20.0	20.0	45
平均	20.2	40.0	21.0	14.6	6.8	10.4	11.0	876

問14-3 留学の最重要目的①学位を取ること(総数 876名) (%) (人)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	無記入	計
韓国	28.0	24.2	7.1	4.4	1.1	2.2	0.0	33.0	182
中国	7.3	12.2	4.9	7.3	0.0	0.0	0.0	68.3	41
タイ	51.4	17.1	6.8	4.1	3.4	1.4	0.0	15.8	146
インドネシア	21.8	24.1	9.2	13.8	3.4	0.0	0.0	35.6	87
インド	24.0	18.4	7.2	7.2	2.4	0.8	0.0	40.0	125
フィリピン	48.6	13.8	8.3	2.8	3.7	3.7	0.0	19.1	109
マレーシア	47.7	12.8	8.1	3.5	2.3	1.2	1.2	23.3	86
シンガポール	60.0	6.7	4.4	0.0	4.4	0.0	20.0	0.0	45
平均	34.1	16.9	6.9	5.3	2.2	1.6	0.1	33.0	876

②研究の発展(総数 876名) (%) (人)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	無記入	計
韓国	65.4	21.4	3.3	2.7	0.5	0.0	0.0	6.6	182
中国	68.3	12.2	0.0	2.4	2.4	0.0	0.0	14.6	41
タイ	32.2	25.3	15.1	5.5	2.7	2.7	0.0	16.4	146
インドネシア	55.2	19.5	9.2	2.3	0.0	2.3	0.0	23.0	87
インド	60.0	12.8	9.6	4.0	0.0	0.8	0.0	12.8	125
フィリピン	32.1	34.9	2.8	9.2	2.8	0.9	0.0	17.3	109
マレーシア	33.7	22.1	14.0	4.7	2.3	5.8	0.0	17.4	86
シンガポール	22.2	28.9	0.0	13.3	2.2	8.9	0.0	24.4	45
平均	44.6	21.0	7.2	4.7	1.4	1.9	0.0	19.2	876

③留学の体験 (%) (人)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	無記入	計
韓国	0.0	12.6	20.3	18.7	12.6	6.6	0.0	29.1	182
中国	0.0	7.3	14.6	4.9	7.3	4.9	0.0	61.0	41
タイ	3.4	10.3	17.8	21.2	13.7	9.6	0.0	24.0	146
インドネシア	4.6	16.1	28.7	4.6	10.3	3.4	1.1	42.5	87
インド	2.4	12.8	12.8	16.0	16.8	4.0	0.0	35.2	125
フィリピン	3.7	10.1	25.7	11.9	11.9	2.8	0.0	33.9	109
マレーシア	2.3	15.1	16.3	14.0	12.8	3.5	0.0	36.0	86
シンガポール	0.0	11.1	24.4	8.9	24.4	4.4	0.0	26.7	45
平均	2.1	11.4	18.6	13.7	12.7	5.0	0.1	36.4	876

④留学先国の文化などをする事 (％) (人)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	無記 入	計
韓国	0.0	18.7	25.8	14.8	9.9	7.1	0.0	23.6	182
中国	2.4	31.7	17.1	4.9	0.0	4.9	0.0	39.0	41
タイ	2.7	8.9	18.5	21.9	20.5	4.8	0.0	22.6	146
インドネシア	2.3	14.9	14.9	19.5	11.5	3.9	0.0	40.2	87
インド	0.8	11.2	16.0	13.6	12.0	12.0	0.0	34.4	125
フィリピン	1.8	12.8	12.8	17.4	13.8	4.6	0.9	35.9	109
マレーシア	1.2	5.8	14.0	14.0	17.4	14.0	0.0	33.7	86
シンガポール	0.0	8.9	8.9	15.6	15.6	24.4	0.0	26.7	45
平均	1.3	12.6	16.4	15.2	12.6	8.2	0.1	33.7	876

⑤帰国後高い地位につく事 (％) (人)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	無記 入	計
韓国	1.1	9.9	13.7	12.6	17.6	7.1	0.0	37.9	182
中国	2.4	7.3	9.8	4.9	4.9	0.0	0.0	70.7	41
タイ	8.9	19.9	17.8	8.2	12.3	2.1	0.0	30.8	146
インドネシア	4.6	9.2	10.3	12.6	14.9	8.0	1.1	50.6	87
インド	8.8	18.4	18.4	8.0	8.8	4.8	0.0	32.8	125
フィリピン	5.5	14.7	28.4	11.0	8.3	3.7	0.0	28.4	109
マレーシア	5.8	11.6	16.3	10.5	11.6	11.6	1.2	31.4	86
シンガポール	0.0	11.1	22.2	17.8	15.6	6.7	0.0	26.7	45
平均	4.8	12.8	16.3	9.9	11.6	5.3	0.2	39.0	876

⑥よい職を得る事 (％) (人)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	無記 入	計
韓国	0.0	1.6	9.3	9.3	9.9	22.5	0.0	47.3	182
中国	0.0	0.0	2.4	2.4	4.9	2.4	2.4	85.4	41
タイ	2.7	8.2	6.8	6.2	5.5	24.0	0.0	46.6	146
インドネシア	0.0	1.1	4.6	6.9	10.3	19.5	0.0	69.0	87
インド	0.8	6.4	11.2	8.0	5.6	12.0	0.8	55.2	125
フィリピン	2.7	10.1	7.3	8.3	22.0	0.9	0.9	47.8	109
マレーシア	1.2	11.6	7.0	15.1	10.5	16.3	0.0	38.4	86
シンガポール	0.0	11.1	15.6	11.1	11.1	15.6	0.0	35.6	45
平均	0.7	4.8	8.0	7.9	7.6	17.6	0.3	53.1	876

問14-4 留学は研究に役立つか（総数 876名）（%）（人）

	大変役立つ	少し役立つ	どちらとも	あまり立たぬ	全く役立つため	無記入	計
韓国	91.2	7.7	0.5	0.0	0.0	0.5	182
中国	73.2	26.8	0.0	0.0	0.0	0.0	41
タイ	80.1	14.4	0.7	0.0	0.0	5.5	146
インドネシア	82.8	13.8	1.1	0.0	0.0	13.8	87
インド	89.6	8.8	0.8	0.0	0.0	0.8	125
フィリピン	91.7	8.3	0.0	0.0	0.0	0.0	109
マレーシア	84.9	9.3	0.0	0.0	0.0	5.8	86
シンガポール	86.7	11.1	2.2	0.0	0.0	0.0	45
平均	80.9	10.4	0.7	0.0	0.0	8.0	876

問15 どの段階で外国への留学を勧めるか（%）（人）

	学部	修士	博士	院後	その他	無記入	計
韓国	4.1	31.6	41.0	17.3	1.5	4.1	266
中国	5.1	23.2	44.9	15.2	5.1	6.5	138
タイ	10.2	42.4	22.6	14.1	4.5	6.2	177
インドネシア	6.3	37.7	22.2	24.2	2.4	7.2	207
インド	4.0	19.2	54.4	20.0	0.8	1.6	125
フィリピン	3.8	48.6	25.1	10.4	3.3	8.7	183
マレーシア	16.8	35.8	22.1	14.7	2.1	8.4	95
シンガポール	12.0	34.0	36.0	18.0	0.0	0.0	50
平均	6.7	34.0	33.7	17.1	2.8	5.6	1331

問15-1 「学部」と答えた人の理由（いくつでも）（%）（人）（総数89名）

	能力	適応力	よい職	院進学	その他	計
韓国	9.1	63.6	18.2	63.6	0.0	11
中国	14.3	85.7	28.6	71.4	0.0	7
タイ	27.8	77.8	5.6	38.9	5.6	18
インドネシア	61.5	84.6	15.4	92.3	0.0	13
インド	36.4	81.8	18.2	45.5	9.1	11
フィリピン	28.6	71.4	28.6	57.1	42.9	7
マレーシア	37.5	43.8	25.0	43.8	18.8	16
シンガポール	16.7	31.3	16.7	16.7	16.7	6
平均	31.5	71.9	18.0	53.9	10.1	89

問16 留学を最もすすめる国—第一位 (%) (人)

	日 本	米・加	西 欧	アジ・杻	東 欧	その他	無記入	答不能	計
韓 国	12.4	71.1	9.9	1.1	0.0	0.4	1.5	3.8	266
中 国	29.7	54.3	3.6	1.4	0.7	1.4	2.2	6.5	138
タ イ	5.1	70.7	9.0	1.7	0.0	0.0	4.5	9.0	177
インドネシア	24.2	44.5	9.5	4.4	0.0	0.5	5.3	11.1	207
インド	3.7	74.0	13.1	0.5	0.9	1.9	0.9	5.1	215
フィリピン	11.5	74.9	4.9	2.6	0.5	0.0	0.0	5.5	183
マレーシア	3.2	56.8	18.9	7.4	0.0	0.0	2.1	11.6	95
シンガポール	0.0	60.0	32.0	4.0	0.0	0.0	0.0	4.0	50
平 均	12.4	64.7	10.4	2.4	0.3	0.6	2.3	6.9	1331

問16 留学を最もすすめる国—第二位 (%) (人)

	日 本	米・加	西 欧	アジ・杻	東 欧	その他	無記入	答不能	計
韓 国	47.0	16.2	22.2	2.3	0.4	1.5	6.8	3.8	266
中 国	40.6	26.8	14.4	0.0	5.8	0.7	5.1	6.5	138
タ イ	23.2	14.1	28.8	10.8	0.0	2.3	11.9	9.0	177
インドネシア	23.2	24.7	16.0	6.8	0.0	1.0	14.0	11.6	207
インド	23.3	22.4	36.7	3.7	2.4	2.4	4.2	5.1	215
フィリピン	24.0	17.5	28.9	4.9	1.1	2.1	15.8	5.5	183
マレーシア	8.4	23.2	44.2	7.4	0.0	1.1	4.2	11.6	95
シンガポール	6.0	30.0	38.0	8.0	0.0	4.0	6.0	4.0	50
平 均	28.1	20.7	26.8	5.4	1.2	1.7	9.0	7.0	1331

問16-1 第1番めの国の選択理由(いくつでも)

	自分が 留学	専門に 役立つ	就職に 有利	政府の 推進	大学の 推進	交流プ ログラム	低経費	学位取 得容易	その他	計
韓 国	16.5	86.1	13.2	5.6	3.4	6.8	4.1	2.6	10.2	266
中 国	9.4	73.2	3.6	13.0	9.4	24.6	4.3	5.1	8.0	138
タ イ	20.9	67.8	19.2	11.3	5.6	8.5	3.4	4.5	17.5	177
インドネシア	17.4	64.3	16.9	17.4	12.6	19.8	3.9	4.3	17.4	207
インド	24.7	80.0	29.3	6.0	10.2	12.1	2.3	1.9	24.7	215
フィリピン	25.7	69.4	30.1	10.4	10.9	23.0	2.7	1.6	39.3	183
マレーシア	34.7	65.3	8.4	11.6	4.2	8.4	2.1	1.1	34.7	95
シンガポール	34.0	82.0	26.0	12.0	8.0	0.0	4.0	4.0	18.0	50
平 均	21.0	74.0	18.6	10.4	8.1	13.8	3.4	3.1	20.4	1331

問17 留学に適切な年数 学部生の場合 (％) (人)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	無入	計
韓国	3.0	4.5	3.8	44.0	8.6	2.3	0.8	0.8	0.4	0.8	0.0	0.4	30.8	266
中国	1.4	2.2	6.5	42.8	5.1	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	39.9	138
タイ	0.6	0.6	5.6	67.8	4.0	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.2	177
インドネシア	9.7	8.7	12.1	20.8	10.1	2.4	0.5	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	35.3	207
インド	0.0	6.5	16.7	25.6	7.9	1.9	0.5	0.9	0.0	0.5	0.0	0.0	39.5	215
フィリピン	2.7	7.7	3.8	50.3	13.7	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21.3	183
マレーシア	0.0	3.2	33.7	45.3	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.8	95
シンガポール	0.0	0.0	28.0	50.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.0	50
平均	2.7	4.9	10.7	41.6	7.7	1.7	0.3	0.3	0.2	0.2	0.0	0.1	29.5	1331

修士課程の場合 (％) (人)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	無入	計
韓国	3.0	56.4	20.3	1.5	1.9	0.8	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.8	266
中国	2.9	53.6	21.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.3	138
タイ	2.3	75.1	8.5	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.6	177
インドネシア	6.3	69.1	10.1	2.4	1.4	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.1	207
インド	6.5	59.1	7.9	2.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	22.3	215
フィリピン	9.3	68.9	13.1	3.3	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	183
マレーシア	12.6	73.7	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	10.5	95
シンガポール	30.0	66.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	50
平均	6.5	64.3	12.3	1.7	0.3	0.1	12.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.8	1331

博士課程の場合 (％) (人)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	無入	計
韓国	1.5	1.9	38.0	28.2	15.8	1.5	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.8	266
中国	5.1	29.0	41.3	8.7	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.6	138
タイ	0.6	4.0	46.9	23.7	10.7	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.6	177
インドネシア	1.0	21.3	37.2	15.0	5.3	1.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	18.4	207
インド	0.9	16.0	50.0	14.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.4	215
フィリピン	2.7	16.4	41.5	21.3	6.6	1.1	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.3	183
マレーシア	0.0	4.2	62.1	24.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.4	95
シンガポール	6.0	16.0	50.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.0	50
計	1.8	13.1	45.2	19.7	7.1	0.7	0.3	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	12.0	1331

Post-Doctoralの場合

(%) (人)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	無入	計
韓国	33.8	46.6	2.6	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.5	266
中国	18.1	34.8	5.8	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.6	138
タイ	42.9	26.6	1.1	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.8	177
インドネシア	30.0	19.8	6.8	3.4	1.9	0.5	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	37.2	207
インド	30.7	45.6	6.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.2	215
フィリピン	47.5	32.2	3.3	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.8	183
ロシア	50.5	25.3	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	22.1	95
シンガポール	54.0	16.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	28.0	50
平均	36.1	33.7	3.8	0.9	0.5	0.1	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	24.7	1331

問18 留学は就職・昇進に役立つか

(%) (人)

	大変役立つ	少し役立つ	どちらとも	余り役立つため	全く役立つため	無記入	計
韓国	49.6	44.4	3.8	0.4	0.4	1.5	266
中国	47.1	45.7	4.3	0.0	0.0	2.9	138
タイ	50.8	41.2	3.4	0.6	0.0	4.0	177
インドネシア	64.7	25.6	7.2	0.5	0.0	1.9	207
インド	53.0	39.5	6.0	0.0	0.5	0.9	215
フィリピン	84.2	15.3	0.0	0.0	0.0	0.5	183
ロシア	38.9	46.3	11.6	0.0	0.0	3.2	95
シンガポール	54.0	42.0	4.0	0.0	0.0	0.0	50
平均	56.6	36.4	4.7	0.2	0.2	1.9	1331

問19 学生の留学指導における重要基準

(%) (人)

	国	学部	教授	その他	答困難	無記入	計
韓国	9.0	52.6	29.7	1.5	3.4	3.8	266
中国	8.7	30.4	41.3	1.4	11.6	6.5	138
タイ	25.4	41.8	15.3	4.5	9.0	4.0	177
インドネシア	21.3	45.9	17.4	1.9	9.2	4.3	207
インド	10.2	51.2	28.8	1.4	5.1	3.3	215
フィリピン	16.9	62.3	8.2	5.5	6.0	1.1	183
ロシア	10.5	55.8	21.1	6.3	1.1	5.3	95
シンガポール	12.0	58.0	22.0	2.0	0.0	6.0	50
平均	14.6	49.4	23.1	2.9	6.2	3.9	1331

問20 学生の留学の問題点 (いくつでも) (%) (人)

	経費	能力	語学力	生活 適応力	健康	その他	計
韓国	77.4	43.2	60.9	13.9	16.9	0.8	266
中国	66.7	44.9	58.0	13.8	14.5	1.4	138
タイ	62.7	41.8	74.0	39.5	19.8	2.3	177
インドネシア	72.9	38.6	73.9	34.8	12.6	3.4	207
インド	93.0	32.6	48.4	25.6	5.1	2.8	215
フィリピン	92.9	35.0	68.9	53.0	22.4	4.4	183
マレーシア	74.7	27.4	69.5	55.8	7.4	1.1	95
シンガポール	88.0	44.4	58.0	38.0	16.0	4.0	50
平均	78.5	38.5	63.9	31.7	14.5	2.4	1331

問21 欧米と比較した日本の大学の水準 (%) (人)

	かなり 高い	やや 高い	同等	やや 低い	かなり 低い	回答困 難	無記入	計
韓国	3.4	10.5	33.8	36.5	3.8	10.2	1.9	266
中国	4.3	25.4	26.1	15.9	0.0	26.1	2.2	136
タイ	1.7	10.2	31.1	18.6	0.0	34.5	4.0	177
インドネシア	3.9	11.6	39.6	5.8	0.0	35.7	3.4	207
インド	4.2	7.0	39.5	12.1	0.5	33.0	3.7	215
フィリピン	5.5	4.9	40.4	13.7	1.1	31.7	2.7	183
マレーシア	1.1	5.3	30.5	14.7	5.3	40.0	3.2	95
シンガポール	6.0	4.0	36.0	30.0	0.0	24.0	0.0	50
平均	3.7	10.2	35.2	18.3	1.4	28.3	2.9	1331

問22 日本への留学の必要性 (%) (人)

	大変 必要	少し 必要	どちら とも	あまり 不必要	全く 不必要	回答困 難	無記入	計
韓国	31.2	56.8	5.6	1.5	1.1	2.3	1.5	266
中国	39.9	43.5	6.5	1.4	0.0	5.8	2.9	138
タイ	15.8	31.1	22.0	6.2	1.7	18.1	5.1	177
インドネシア	39.1	31.9	6.8	3.4	0.5	15.9	2.4	207
インド	29.3	32.6	12.6	0.5	0.0	22.3	2.8	215
フィリピン	30.1	30.1	20.2	1.1	1.6	15.3	1.6	183
マレーシア	5.3	35.8	28.4	5.3	3.2	18.9	3.2	95
シンガポール	2.0	24.0	46.0	10.0	0.0	16.0	2.0	50
平均	27.9	37.8	14.4	2.8	1.1	13.6	2.6	1331

問23 日本留学は就職・昇進に役立つか (%) (人)

	大変役立つ	少し役立つ	どちらとも	余り役立つため	全く役立つため	回答困難	無記入	計
韓国	15.4	67.7	10.2	0.8	1.1	3.8	1.1	266
中国	34.8	47.1	6.5	0.0	0.7	7.2	3.6	138
タイ	21.5	49.7	9.6	2.3	0.6	13.0	3.4	177
インドネシア	39.6	36.2	6.8	0.5	1.0	14.5	1.4	207
インド	20.5	38.1	14.0	1.9	0.5	21.4	3.7	215
フィリピン	45.9	36.6	6.6	1.1	0.0	7.7	2.2	183
マレーシア	6.3	31.6	34.7	3.2	1.1	21.1	2.1	95
シンガポール	2.0	24.0	46.0	10.0	0.0	16.0	2.0	50
平均	26.1	45.7	11.7	1.5	0.7	12.0	2.3	1331

問24 アメリカと比較して日本では博士学位はとりやすいか。

(%) (人)

	大変容易	少し容易	どちら	やや困難	大変困難	回答困難	無記入	計
韓国	4.5	18.4	27.1	19.2	8.3	21.8	0.8	266
中国	1.4	4.3	28.3	18.1	5.1	39.9	2.9	138
タイ	1.1	2.8	14.1	25.4	18.1	35.0	3.4	177
インドネシア	1.9	4.3	19.3	15.0	5.8	52.2	1.4	207
インド	0.9	2.8	19.5	9.8	1.9	61.9	3.3	215
フィリピン	1.6	6.0	16.9	23.0	13.1	37.2	2.2	183
マレーシア	0.0	2.1	17.9	17.9	6.3	54.7	1.1	95
シンガポール	2.0	4.0	12.0	20.0	14.0	44.0	4.0	50
平均	2.0	6.8	20.4	18.2	8.6	41.9	2.2	1331

問25 日本の博士学位は帰国後、就職・昇進に役立つか。

(%) (人)

	大変役立つ	少し役立つ	どちら	余りない	全くない	回答困難	無記入	計
韓国	18.8	65.0	8.6	0.4	0.4	5.6	1.1	266
中国	41.3	40.6	5.1	0.0	0.0	10.9	2.2	138
タイ	24.9	44.1	10.2	1.1	1.7	15.3	2.8	177
インドネシア	42.5	30.0	4.8	1.0	0.5	18.8	2.4	207
インド	21.9	34.0	10.2	0.9	0.9	27.9	4.2	215
フィリピン	50.8	32.2	2.2	0.5	0.0	12.6	1.6	183
マレーシア	8.4	30.5	22.1	5.3	1.1	31.6	1.1	95
シンガポール	10.0	34.0	22.0	8.0	0.0	26.0	0.0	50
平均	29.5	41.1	8.7	1.3	0.6	16.7	2.2	1331

問26 アメリカの博士学位は帰国後、就職・昇進に役立つか

(%) (人)

	大変役立つ	少し役立つ	どちら	余り	全く	回答	無記	計
			ら	ない	ない	困難	入	
韓国	51.1	41.7	3.8	1.1	0.0	1.1	1.1	266
中国	41.3	42.0	5.8	0.0	0.0	8.7	2.2	138
タイ	42.4	40.7	9.0	0.0	0.0	5.1	2.8	177
インドネシア	51.2	31.4	4.8	1.4	0.0	9.2	1.9	207
インド	50.2	33.0	7.9	0.9	0.5	5.1	2.3	215
フィリピン	71.6	20.8	0.5	0.0	0.0	4.9	2.2	183
マレーシア	27.4	42.1	16.8	1.1	0.0	11.6	1.1	95
シンガポール	48.0	38.0	4.6	0.0	0.0	10.0	0.0	50
平均	49.8	35.6	6.0	0.7	0.1	5.9	1.9	1331

問27 博士学位の価値の高さの比較

(%) (人)

	日本	アメリカ	同等	困難	無記	計
韓国	5.3	51.5	26.7	15.0	1.5	266
中国	10.1	21.0	44.2	22.5	2.2	138
タイ	4.5	42.4	31.1	18.1	4.0	177
インドネシア	9.7	22.7	48.8	16.9	1.9	207
インド	3.7	42.3	27.4	24.2	2.3	215
フィリピン	6.6	30.6	44.8	15.3	2.7	183
マレーシア	3.2	49.5	27.4	17.9	2.1	95
シンガポール	2.0	68.0	20.0	8.0	0.0	50
平均	6.0	38.8	34.9	18.0	2.4	1331

問28 日本での留学に関して重要とされる点(3つ)

(%) (人)

	日本語	適応力	研究能力	健康	経費	習慣の相違	制度の相違	その他	計
韓国	55.3	22.2	51.5	16.2	86.5	9.0	8.3	5.3	266
中国	47.1	23.9	58.0	15.9	71.0	5.8	25.4	10.1	138
タイ	76.8	24.3	36.7	6.8	65.5	5.1	29.4	12.4	177
インドネシア	62.3	33.8	34.8	3.9	77.8	12.6	35.7	10.1	207
インド	85.6	16.7	17.7	0.9	83.7	3.7	34.4	7.4	215
フィリピン	90.7	35.0	16.4	6.6	84.7	9.3	35.0	1.1	183
マレーシア	88.4	41.1	21.1	1.1	53.7	9.5	32.6	4.2	95
シンガポール	90.0	26.0	16.0	4.0	56.0	4.0	42.0	4.0	50
平均	71.8	26.8	33.8	7.7	76.6	7.7	28.0	7.1	1331

問29 日本への留学を希望するか

(%) (人)

	希望する	希望せず	無記入	計
韓国	85.0	12.8	2.3	266
中国	78.3	18.8	2.9	183
タイ	54.8	41.8	3.4	177
インドネシア	86.0	12.1	1.9	207
インド	65.1	30.7	4.2	215
フィリピン	73.8	24.6	1.6	183
マレーシア	56.8	41.1	2.1	95
シンガポール	54.0	46.0	0.0	50
平均	72.5	24.9	2.6	1331

問29-1 希望する理由(いくつでも)(総数 965名) (%) (人)

	研究水準	学位取得	昇進	知人	近距離	経費安い	関心あり	その他	計
韓国	85.4	5.3	8.4	17.3	43.4	1.8	53.5	6.6	226
中国	88.0	11.1	28.7	13.9	38.0	6.5	57.4	8.3	108
タイ	56.7	15.5	13.4	16.5	12.4	0.0	82.5	15.5	97
インドネシア	67.4	42.1	33.7	9.0	24.2	2.8	82.0	16.3	178
インド	75.0	3.6	10.7	7.1	16.4	0.7	78.6	22.1	140
フィリピン	65.9	19.3	23.7	17.0	40.7	5.9	78.5	25.9	135
マレーシア	40.7	0.0	1.9	9.3	9.3	0.0	81.5	24.1	54
シンガポール	74.1	3.7	11.1	22.2	7.4	0.0	74.1	14.8	27
平均	72.4	15.1	18.0	13.5	28.9	2.6	71.4	15.7	965

問29-2 希望しない理由(いくつでも)(総数 332名)

(%) (人)

	研究問題	学位問題	昇進問題	関心なし	経費高い	その他	計
韓国	41.2	8.8	8.8	17.6	20.6	23.5	34
中国	11.5	0.0	3.8	3.8	7.7	84.6	26
タイ	14.9	4.1	5.4	2.7	31.1	66.2	74
インドネシア	16.0	0.0	0.0	8.0	16.0	76.0	25
インド	10.6	1.5	6.0	0.0	12.1	77.3	66
フィリピン	13.3	2.2	2.2	0.0	28.9	88.9	45
マレーシア	25.6	7.7	5.1	5.1	28.2	59.0	39
シンガポール	8.7	0.0	0.0	0.0	21.7	69.6	23
平均	17.2	3.3	4.5	3.9	22.0	68.7	332

問30 院生に日本留学を勧めるか

(%) (人)

	勧め る	勧め ない	無記 入	計
韓 国	83.8	14.7	1.5	266
中 国	77.5	18.1	4.3	138
タ イ	73.4	20.9	5.6	177
インドネシア	88.4	9.7	1.9	207
インド	76.3	20.0	3.7	215
フィリピン	91.8	6.0	2.2	183
マレーシア	73.7	24.2	2.1	95
シンガポール	66.0	32.0	2.0	50
平 均	81.0	16.1	2.9	1331

問30-1 勧める理由(いくつでも)(総数1078名)

(%) (人)

	日本留 学経験	研究有 益	就職有 利	政府の 奨励	大学の 奨励	交流プ ログラム	近距離	低経費	学位	その他	計
韓 国	11.7	87.9	18.8	2.7	1.3	8.1	49.8	5.4	3.6	4.0	223
中 国	7.5	86.0	7.5	26.2	16.8	25.2	37.4	10.3	0.0	6.5	107
タ イ	2.3	68.5	30.8	4.6	3.1	16.9	16.9	1.5	0.0	22.3	130
インドネシア	8.7	77.0	24.0	21.9	15.3	25.1	29.5	4.9	2.2	12.6	183
インド	0.6	76.2	25.0	3.7	3.7	1.2	22.0	6.1	0.6	31.7	164
フィリピン	5.9	69.0	35.7	5.9	7.7	23.8	44.0	7.7	1.2	28.6	168
マレーシア	2.9	58.6	7.1	44.3	4.3	15.7	15.7	0.0	0.0	24.3	70
シンガポール	6.1	66.7	24.2	18.2	6.1	15.2	15.2	0.0	0.0	27.3	33
平 均	6.3	76.3	23.0	12.3	7.1	15.9	32.8	5.3	1.4	18.0	1078

問30-2 勧めない理由(いくつでも)(総214名)

(%) (人)

	学位取 得困難	学位不 利	昇進不 利	関心無 し	経費高 い	情報な し	他国を 勧める	その他	計
韓 国	10.3	10.3	5.1	0.0	20.5	35.9	33.3	20.5	39
中 国	12.0	0.0	0.0	4.0	16.0	48.0	12.0	36.0	25
タ イ	29.7	0.0	5.4	2.7	51.4	54.1	24.3	32.4	37
インドネシア	10.0	5.0	0.0	0.0	15.0	75.0	10.0	45.0	20
インド	2.3	11.6	20.9	0.0	4.7	62.8	18.6	30.2	43
フィリピン	18.2	9.1	9.1	0.0	72.7	72.7	27.3	27.3	11
マレーシア	0.0	17.4	17.4	0.0	52.2	60.9	17.4	52.2	23
シンガポール	0.0	12.5	6.3	0.0	25.0	50.0	37.5	56.3	16
平 均	10.8	7.9	8.9	0.9	28.0	55.1	22.4	35.1	214

問31 学部生に日本留学を勧めるか

(%) (人)

	勧める	勧めない	無記入	計
韓国	22.6	75.2	2.3	266
中国	32.6	62.3	5.1	138
タイ	41.8	51.4	6.8	177
インドネシア	38.6	57.5	3.9	207
インド	21.4	72.6	6.0	215
フィリピン	39.3	55.2	5.5	183
マレーシア	37.9	57.9	4.2	95
シンガポール	32.0	66.0	2.0	50
平均	32.2	63.2	4.6	1331

問31-1 勧めない理由(いくつでも)(総数841名)

(%) (人)

	学位不利	学位取得困難	英語圏有益	学部段階尚早	その他	計
韓国	13.0	1.5	20.5	80.5	4.5	200
中国	9.3	2.3	16.3	79.1	15.2	86
タイ	1.1	12.1	48.4	57.1	23.1	91
インドネシア	4.2	4.2	33.6	78.2	14.3	119
インド	10.3	1.9	45.5	69.2	21.8	156
フィリピン	3.0	5.9	39.6	80.2	23.8	101
マレーシア	7.3	3.6	54.5	49.1	21.8	55
シンガポール	12.1	3.0	81.8	42.4	15.2	33
平均	11.5	3.9	36.5	71.8	16.1	841

問32 留学生のためにとるべき日本の改善策(いくつでも)

(%)

	奨学金の数の増加	奨学金の額の増加	学位取得ガイダンス	学位をもっと与える	英語の講義の増加	特別コース設置増設	施設の増加	日本語コース増設
韓国	83.8	63.2	29.7	16.5	13.2	21.1	35.7	19.9
中国	74.6	48.6	29.0	26.8	29.0	25.4	21.0	43.5
タイ	81.4	44.6	44.6	18.1	59.3	42.9	25.4	39.5
インドネシア	73.9	62.3	53.6	36.7	55.6	46.9	33.3	64.3
インド	88.8	61.4	40.5	15.8	61.9	46.0	39.1	60.5
フィリピン	83.6	68.3	39.9	30.1	74.9	55.7	43.2	59.0
マレーシア	87.4	50.5	35.8	10.5	58.9	43.2	35.8	58.9
シンガポール	80.0	38.0	46.0	10.0	62.0	48.0	42.0	62.0
平均	81.9	57.6	39.5	22.0	49.0	39.8	34.3	48.2

問32 (続き) (%) (人)

	予備教育	情報を増やす	帰国後の世話	出先機関設置	その他	計
韓国	14.3	58.6	9.0	25.2	1.9	266
中国	37.3	78.3	10.1	19.6	4.3	138
タイ	35.6	71.2	10.2	35.6	2.3	177
インドネシア	49.8	83.6	15.9	38.2	2.4	207
インド	48.4	88.2	11.2	59.1	10.7	215
フィリピン	53.0	80.9	13.7	55.7	5.5	183
マレーシア	47.4	80.0	9.5	48.4	8.4	95
シンガポール	54.0	76.0	12.0	36.0	4.0	50
平均	39.7	76.3	11.5	39.7	4.7	1331

問32-1 (32で「日本語コースの増設」と答えた人)

日本語教育の改善のための方策(いくつでも)(総数641名)(%) (人)

	教師派遣	日本語学科	教科書	視聴覚教材	専門家養成	学習機関増設	その他	計
韓国	22.6	37.7	37.7	54.7	45.3	62.3	0.0	53
中国	63.3	58.3	41.7	65.0	45.0	41.7	0.0	60
タイ	38.6	58.6	32.9	60.0	62.9	60.0	1.4	70
インドネシア	54.9	55.6	38.3	74.4	83.5	63.2	2.3	133
インド	56.9	85.4	38.5	64.6	70.0	56.2	6.2	130
フィリピン	35.2	61.1	43.5	63.9	70.4	63.9	10.2	108
マレーシア	58.9	67.9	33.9	57.1	64.3	64.3	1.8	56
シンガポール	58.1	67.7	22.6	45.2	80.6	64.5	0.0	31
平均	48.8	63.3	37.8	63.7	67.7	59.6	3.7	641

問32-2 (32で「情報を増やす」と答えた人)

必要な情報の種類(いくつでも)(総数1,015名)(%) (人)

	教育制度	高等教育制度	個々の大学	奨学金	学位取得	生活	日本社会特性	その他	計
韓国	30.1	57.1	75.6	88.5	44.9	36.5	17.9	3.2	156
中国	54.6	75.9	69.4	76.9	48.1	47.2	39.8	3.7	108
タイ	72.2	81.7	80.9	88.9	68.3	64.3	45.2	3.2	126
インドネシア	78.6	85.5	83.8	90.8	80.9	72.3	59.5	3.5	173
インド	67.9	92.1	81.6	95.7	77.4	65.8	46.3	8.9	190
フィリピン	77.7	87.8	86.5	93.2	66.9	73.0	65.5	8.1	148
マレーシア	76.3	92.1	86.8	92.1	65.8	77.6	65.8	7.9	76
シンガポール	73.7	97.4	92.1	92.1	60.5	73.7	60.5	2.6	38
平均	65.3	82.2	81.2	90.2	65.7	62.5	48.2	5.4	1015

問33 将来日本への留学生は増えるか (%) (人)

	大幅 増加	少し 増加	変化 せず	少し 減少	大幅 減少	回答 困難	無記 入	計
韓 国	24.4	62.0	4.1	1.5	0.4	6.4	1.1	266
中 国	24.6	53.6	7.2	0.7	0.0	11.6	2.2	138
タ イ	26.0	55.9	4.5	1.1	0.0	9.6	2.8	177
インドネシア	37.2	42.5	2.4	0.5	0.0	15.5	1.9	207
インド	25.6	38.6	5.1	0.0	0.5	26.5	3.7	215
フィリピン	32.8	45.4	4.9	0.0	0.5	13.7	2.7	183
マレーシア	11.6	64.2	5.3	1.1	0.0	16.8	1.1	95
シンガポール	8.0	58.0	16.0	0.0	0.0	16.0	2.0	50
平 均	26.4	51.2	5.0	0.7	0.2	14.1	2.3	1331

問33-1 その理由(いくつでも) (%) (人)

	研究水 準 高/低	教育水 準 高/低	学位取 得 難/易	日本学 位有用 /無用	国際的 地位 高/低	日本政 策 適 /不適	自国政 策 適 /不適	その他	計
韓 国	59.4	35.7	9.4	29.3	53.4	17.3	12.4	8.3	266
中 国	49.3	37.0	13.0	29.7	29.0	24.6	33.3	10.1	138
タ イ	52.0	36.2	11.3	34.5	52.5	27.7	18.6	8.5	177
インドネシア	46.4	40.1	7.2	35.3	49.8	34.8	38.2	12.6	207
インド	35.3	28.8	4.7	30.7	53.0	23.7	29.8	22.8	215
フィリピン	43.7	38.3	10.4	38.3	56.8	33.9	29.5	20.8	183
マレーシア	30.5	27.4	3.2	21.1	50.5	17.9	54.7	23.2	95
シンガポール	26.0	20.0	2.0	30.0	48.0	24.0	18.0	22.0	50
平 均	46.0	34.6	8.3	31.9	50.2	25.8	27.8	14.8	1331

高等教育研究叢書 バックナンバー

旧大学研究ノート

- 第 1 号 (1971. 8) サセックス大学のカリキュラム：自然科学ハンドブック 1966-67より
…… 大学問題調査室〔編訳〕
- 第 2 号 (1971. 9) ドイツの大学における Institute 数及び教授数に関する集計
…… 近藤 春 生
- 第 3 号 (1971.10) 高等教育に関する主要外国雑誌目録 …………… 岩 村 聡〔編〕
- 第 4 号 (1972. 7) 欧米の医学カリキュラム …………… 杉 原 芳 夫〔編訳〕
- 第 5 号 (1972. 8) アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料
…… 関 正 夫・川 上 昭 吾〔編訳〕
- 第 6 号 (1973. 2) サセックス大学のカリキュラム：人文・社会系ハンドブック 1966-67より
…… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 7 号 (1973. 3) 諸大学学寮規程・規則集(1) …………… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 8 号 (1973. 8) ドイツ大学改革と学生生活の現況 マールブルク大学を中心として
…… 千代田 寛・阪 口 修 平
- 第 9 号 (1973. 9) 広島大学医学部紛争における医局・講座，大学院および学位制度問題資料
…… 杉 原 芳 夫〔編〕
- 第 10 号 (1974. 1) 理学部生物学科の調査－カリキュラムを中心に
…… 川 上 昭 吾
- 第 11 号 (1974. 2) 大学院・研究体制に関する文献目録 …………… 喜多村 和 之〔編〕
- 第 12 号 (1974. 2) 大学院・学位に関する規定集 …………… 喜多村 和 之〔編〕
- 第 13 号 (1974. 3) アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育
…… 関 正 夫〔編訳〕
- 第 14 号 (1974. 3) 諸大学学寮規定・規則集(2) …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 15 号 (1974. 6) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究
農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究
－普通高校生との比較－ …………… 山 谷 洋 二
- 第 16 号 (1974. 9) カリフォルニア大学の農学系カリキュラム …………… 山 谷 洋 二〔編訳〕
- 第 17 号 (1975. 1) ヨーロッパの学生宿舎を見て …………… 横 尾 壮 英
- 第 18 号 (1975. 2) 学寮の管理運営の法的検討
…… 畑 博 行・村 上 武 則
- 第 19 号 (1975. 3) 大学院・学位制度に関する資料集 …………… 寺 崎 昌 男〔編〕
- 第 20 号 (1975.10) 大学の大衆化をめぐる－第 3 回 (1974年度) 研究員集会の記録－
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 21 号 (1976. 1) 大学英語教育に関するアンケート調査－広島大学における学生の意見－
…… 五十嵐 二 郎・稲 田 勝 彦・岩 村 聡
藤 本 黎 時・温 浅 信 之
- 第 22 号 (1976. 3) 西ドイツ高等教育改革の青写真 …………… 天 野 正 治

- 第 23 号 (1976. 3) 宮城教育大学の教育改革－視察報告－
 …… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 24 号 (1976. 8) 広島大学学生の宿舎と生活－アンケート調査から－
 …… 黒川正流・上里一郎・岩村 聡
- 第 25 号 (1976. 9) 高学歴社会－その現実と将来－ ー第 4 回 (1975 年度) 研究員集会の記録ー
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 26 号 (1976.11) 大学の組織・運営に関する総合的研究
 …… 組織・運営プロジェクト〔編〕
- 第 27 号 (1977. 2) 教師教育カリキュラムに関する研究 …… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 28 号 (1977. 2) 農学系大学・学部新入学生の入学生の入学動機と農業に関する
 意識の調査・研究－その 2 東日本の場合－ …… 山谷 洋 二
- 第 29 号 (1977. 3) 理学系学生に対する教養課程における自然科学教育に関する調査・研究
 ー広島大学一般教育課程における物理学教育に関するアンケートからー
 …… 理科系教育研究プロジェクト (物理グループ)
- 第 30 号 (1977. 6) 日本のアカデミック・プロフェッション
 ー帝国大学における教授集団の形成と講座制ー
 …… 天野 郁 夫
- 第 31 号 (1977. 9) 大学における専門教育－第 5 回 (1976 年度) 研究員集会の記録ー
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 32 号 (1978. 8) 大学の国際化 ー第 6 回 (1977 年度) 研究員集会の記録ー
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 33 号 (1978.10) 諸外国の大学における国際交流－とくにアメリカ合衆国を中心として－
 …… 喜多村 和 之・天野 郁 夫・湯 浅 信 之
- 第 34 号 (1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題 (I)
 ー広島大学の事例を中心としてー
 …… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 35 号 (1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題 (II)
 ー理科系専門教育の立場からー
 …… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 36 号 (1979. 2) 広島大学医学部と地域社会 …… 大学と地域社会プロジェクト
- 第 37 号 (1979. 5) 諸外国における一般教育および科学技術教育改革の動向
 …… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 38 号 (1979. 7) 高等専門学校の現状と課題 …………… 葉 柳 正
- 第 39 号 (1979.10) 地域社会と大学 ー第 7 回 (1978 年度) 研究員集会の記録ー
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 40 号 (1979.11) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究 (I)
 ー広島大学教員実態調査ー
 …… 大学と地域社会プロジェクト (池田秀男)
- 第 41 号 (1979.12) 大学の国際交流に関する文献目録
 …… 「大学の国際化」プロジェクト〔編〕

- 第 42 号 (1979.12) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究 (II) - 地域住民の大学観 -
 …… 大学と地域社会プロジェクト (吉森 護)
- 第 43 号 (1980. 1) 日本の大学における外国人教員 - 全国調査結果の概要 -
 …… 「大学の国際化」プロジェクト [編]
- 第 44 号 (1980. 7) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究 (III) - 広島大学と地域社会 -
 …… 大学と地域社会プロジェクト (黒川正流)
- 第 45 号 (1980. 7) 大学農学教育に関する文献目録 …… 山 谷 洋 二 [編]
- 第 46 号 (1980. 9) 理科系学生に対する一般教育の現状と課題
 …… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 47 号 (1980.11) 諸外国の大学における外国人教授の任用 - 制度と実態 -
 …… 喜多村 和 之
- 第 48 号 (1981. 7) 大学医学教育に関する文献目録 …… 川 崎 尚 [編]
- 第 49 号 (1981. 8) 科学社会学の研究 …… 新 堀 通 也 [編]
- 第 50 号 (1981.10) 大学における教育機能 (Teaching) を考える
 - 第 9 回 (1980年度) 研究員集会の記録 -
 …… 大学教育研究センター [編]
- 第 51 号 (1982. 1) 19世紀における科学の制度化と大学改革 - フランス・ドイツ・英国 -
 …… 成 定 薫 [編]
- 第 52 号 (1982. 2) 日本の大学院教育に関する留学生の意見調査
 - 全国調査結果の概要 - …… 「大学の国際化」プロジェクト
- 第 53 号 (1982. 3) 工学系大学・学部の教育改革に関する事例研究
 - 広島大学工学部改革調査 - …… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 54 号 (1982.10) 大学における教授と学習 - 第10回 (1981年度) 研究員集会の記録 -
 …… 大学教育研究センター [編]
- 第 55 号 (1982.12) 教師教育カリキュラム研究(2) …… 教師教育プロジェクト [編]
- 第 56 号 (1983. 3) 日本の理工系大学教育の現状と将来像
 - 全国大学教員意見調査結果の概要 -
 …… 高等科学技術教育研究プロジェクト [編]
- 第 57 号 (1983. 8) 大学教育とカリキュラム - 第11回 (1982年度) 研究員集会の記録 -
 …… 大学教育研究センター [編]
- 第 58 号 (1983.11) 高等教育に関する統計資料 - 理工系分野を中心にして -
 …… 前 川 力
- 第 59 号 (1984.10) 大学における教育と研究の接点を求めて
 - 第12回 (1983年度) 研究員集会の記録 -
 …… 大学教育研究センター [編]
- 第 60 号 (1985. 1) 外国大学における日本研究 …… 新 堀 通 也 [編]
- 第 61 号 (1985. 3) 明治初期専門教育成立に関する公文関係史料
 …… 三 好 信 浩 [編]
- 第 62 号 (1985. 3) 日本の大学教育の現状・課題・展望
 - カリキュラムとティーチングを中心に -

- …… 「大学教育に関する全国調査」プロジェクト〔編〕
- 第 63 号 (1985.10) 新制大学の35年—その功罪を考える—
—第13回 (1984年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 64 号 (1986. 3) 学生の体調とやる気
…… 石 桁 正 士・岩 崎 重 剛
- 第 65 号 (1986. 3) 研究者の流動性と研究能力の向上に関する研究
…… 小 林 信 一・塚 原 修 一・山 田 圭 一
- 第 66 号 (1986. 3) アカデミック・プロダクティビティの条件に関する国際比較研究
…… 有 本 章〔編〕
- 第 67 号 (1986. 8) 大学入試と教育改革 —第14回 (1985年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 68 号 (1987. 3) 将来社会における研究者の需給予測に関する研究
…… 山 田 圭 一〔編〕
- 第 69 号 (1987. 3) アジアの高等教育 …………… 馬 越 徹〔編〕
- 第 70 号 (1988. 1) アジア 8 か国における大学教授の日本留学観 (上)
…… 権 藤 与志夫〔編〕
- 第 71 号 (1988. 1) 官学と私学—大学の設置形態と国公立大学の将来—
—第15回 (1986年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 72 号 (1988.11) 大学と政府—高等教育における役割と責任—
—第16回 (1987年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 73 号 (1989.10) 臨教審と高等教育改革—第17回 (1988年度) 研究員集会の記録—
…… 大学教育研究センター〔編〕

高等教育研究叢書

- 第 1 号 (1990. 3) 留学生受け入れと大学の国際化
—全国大学における留学生受け入れと教育に関する調査報告—
…… 江 淵 一 公〔編〕
- 第 2 号 (1990. 3) 大学教育改革の方法に関する研究
— Faculty Development の観点から—…………… 関 正 夫〔編〕
- 第 3 号 (1990. 3) 近代日本高等教育における助手制度の研究
…… 伊 藤 彰 浩・岩 田 弘 三・中 野 実
- 第 4 号 (1990. 3) ファカルティ・デベロップメントに関する文献目録および主要文献紹介
…… 伊 藤 彰 浩〔編〕
- 第 5 号 (1990. 3) 大学教育の改善に関する調査研究—全国大学教員調査報告書—
…… 有 本 章〔編〕
- 第 6 号 (1990. 3) 「大学」外の高等教育 国際的動向とわが国の課題
…… 阿 部 美 哉・金 子 元 久〔編〕

- 第 7 号 (1990.10) 大学評価 -その必要性と可能性-
 -第18回 (1989年度) 研究員集会の記録-
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 8 号 (1991. 3) 中国高等教育関係法規 (解説と正文) …… 大塚 豊
- 第 9 号 (1991. 3) 学生の勉学のやる気の状態遷移の分析
 …… 石 桁 正 士・岩 崎 重 剛・横 山 宏
- 第 10 号 (1991. 3) 学術研究の改善に関する調査研究
 -全国高等教育機関教員調査報告書-
 …… 有 本 章〔編〕
- 第 11 号 (1991. 3) アジア 8 か国における大学教授の日本留学観 (下)
 …… 権 藤 与志夫〔編〕
- 第 12 号 (1991. 3) 諸外国のFD/S Dに関する比較研究 …… 有 本 章〔編〕
- 第 13 号 (1991. 3) ヨーロッパにおける留学生受け入れのシステムと現状
 -独・仏・英国現地調査報告- …… 江 淵 一 公
- 第 14 号 (1991.10) 2005年に向けてのカリキュラム改革
 -食糧・農業科学の将来計画- …… 山 谷 洋 二〔訳〕
- 第 15 号 (1991.11) 大学評価 -提案と批判-
 -第19回 (1990年度) 研究員集会の記録-
 …… 大学教育研究センター〔編〕

執筆者紹介

編者・序論・結語	権藤与志夫	九州大学 教育学部 教授 (留学問題・価値教育・比較教育学)
第1部・第3部・資料編	久保田優子	九州大学 教育学部 助手 (日本語教育・比較教育学)
第2部・資料編	永岡 真波	九州大学大学院 教育学研究科 博士課程 (留学問題・比較教育学)



アジア8か国における大学教授の日本留学観
—総合的考察—
(高等教育研究叢書 16)

1992(平成4)年1月31日 発行

編者 権藤 与志夫
発行所 広島大学 大学教育研究センター
〒730 広島市中区東千田町1丁目1-89
電話 (082)241-1221 内線(3706)
印刷所 株式会社 ニシキプリント
〒730 広島市西区商工センター7-5-33
電話 (082)277-6954(代)

ISBN4-938664-16-X

RHE